二、梁陳時代の佛教と飛鳥時代の佛教との關係　飛鳥期の佛教は、三韓の佛教を傳へたるものなるは云ふまでもないが、其等の佛教系統に付き、少し精細な觀察を試みやうとするなれば、史料の乏しい三韓をさし置て、直接に梁、陳代の佛教文化を考査する必要がある。尤も此の事に就ては、前章に極めて略簡ながら大旨の存する所を書き流したが、こゝには實際に我が初期時代の佛教美術と接觸を有するものに就て、一つ二つ補記することゝしよう。

蓋し推古朝の御物玉蟲厨子の臺座繪は、此の時代の遺品として尤も信ずべき最古の作物であるが、其の厨子臺座の兩側面に、『涅槃經』聖行品の施身聞偈と、『金光明經』捨身品所說の投身餓虎の因緣が畫かれてある。是れ我朝に行はれた原初にして而かも二度と行はれなかつた唯一の本生圖像である。此等の本生圖像の流行は、例へ『涅槃經』、『金光明經』等の流傳と相待つものなるを確實に保證せざるにしても、其の間に何等かの意義を有するものと認めて差支なからうと思はるゝのであるが、それには梁陳時代の王侯間に盛に行はれた捨身といふことを結び付けて考へて見たい。

北魏の宣武帝、孝明帝と時を同じして、梁武帝の頃は、正に六朝佛教文化の黃金時代であつたらしい。孝明帝は洛陽に永寧寺を創建し、武帝は建康に同泰寺を造立したが、斯くして南北兩朝の帝室が、佛教興隆の爲に全力を擧げた。從て諸有佛教文明は、最高潮の域に達したのである。且つ印度西域の風物を稟承して、行像や無遮大會なども盛大に營まれた。無遮大會といふは、古く阿育王時代から行はれた大齋會で、佛教の博愛主義を充分に體現した頗る平民的な會合であるが、其は王者が自から主催者となりて、毎五年是の大集會をなすを恒例とした、般遮于瑟會卽ち五年大會といふ名稱あるはそれが爲である。阿育王が此の大會を開催したことは、王の法誥にも明記されてあるが、其の風は遙に後世まで持續せられた。玄奘が西遊の歸途、鉢羅耶伽國に於ける戒日王所催の第六回無遮大會の大施場に參列して來たことは『慈恩傳』の中に詳記せられてある。西域でも于闐其の他で古くから此の大會が開き催された。支那では梁の武帝が同泰寺の無遮大會に臨幸されたことは、有名な話で、梁書の中にも「輿駕幸同泰寺設四部無遮大會。因捨身公卿以下以錢一億萬奉贖」といふた樣な記事がある。此の無遮大會の齋場に、捨身奉贖の名に依て、億萬錢の大布施を行つた。其は如何なる思想から導かれたものであるかといへば、大乘佛教の慈悲博愛を體した六度の行を修するといふ主意に本づいたものであつた。『廣弘明集』第

二十八には、陳文帝が皇太后の爲に設けた時の『無礙捨身會願文』が錄載されてあるが、其の中に

奉爲七廟聖靈。奉爲皇太后聖御。奉爲天龍鬼神。幽冥空有。三界四生。五道六趣。若色若想。若怨若親。若非怨親。遍虛空滿法界窮過去盡未來無量名識一切種類平等大捨。捨弟子自身。及乘輿法服。五服鑾輅。六冕龍章。玉几玄裘。金輪紺馬。珠交瓔珞。寶飾莊嚴。給用之所資待。生平之所玩好。竝而檀那。咸施三寶。

といふた樣な文がある。猶ほ同書同卷には、梁蕭綸の『設無礙福會敎』、沈約の『南齊南郡王捨身疏』『捨身願疏』等も揭げられてあるが、其の『捨身願疏』の文にも

以大梁天監之八年歲次玄枵日殷烏度夾鐘紀月十八日。在於新所創蔣陵皇宅。請佛及僧。髣髴祇樹。息心上士凡一百人。雖果謝菴園。飰非香國。而野粒山蔬。可同屬饗。兼捨身資服用百有一十七種。徽自損撤。以奉現前衆僧。

などゝ記してある。孰れも捨身といふ名の下に、錢財施捨を行つたことが解る。而して上出の『梁書』や、陳文帝の懺文等で見ると、無遮と捨身といふことが、隨伴して行はれた樣にも見へるが、是は印度以來最初から斯樣な密接な關係を有つて居たものであるか否かは、之と指示すべき明證はない。然し乍ら捨身といふことは、六度萬行を修して阿耨菩提を成ずるといふ思想の主腦をなして居るもので、而も其の思想は本生說話の形式を以て發露されてある。卽ち釋尊が三阿僧祇劫以來、自身を惜しまず、種々苦行を修して成佛せられた。其は一重に國城妻子頭目髓腦等施捨の結果であると解釋され、從て斯の如き大布施を行ふことは、菩提を求むる爲の無上の勝因と考へられて居た。こゝにいふ梁陳時代の捨身は、此の思想を尤も忠實に承繼したもので、名まで捨身の名義其の儘を用ひて居る。而して其の思想の一朝文字に顯はされたもの、卽ち本生說話である。更に繪畫等に寫出されたものは本生圖像である。漢譯佛典中、有數の本生說話集の一なる『賢愚經』は、河西の僧曇學威德等の八人が、嘗て于闐國に歷遊して、彼地の無遮大會に遇ひ、其の會上に於ける諸碩德の講說を筆錄し來りて、後に集輯翻譯せるものなるが、支那の無礙大會も、西域の遺風を踏襲したものであるとすれば、捨身といふ樣なことも、同じく西土の餘風に本づいて居るのかも知れぬ。斯くて于闐にまれ支那にまれ、無遮大會等の施行せらるゝと共に、捨身等の名の下に、本生思想が充分に鼓吹されて居た。從て當代に本生圖像が行はれて然るべき筈であるが、予は未だ僧傳や其の他の史料中に、何等の消息を索め得ぬのである。然し幸にも我國最古の美術品たる玉蟲厨子の臺座繪に、施身聞偈、

投身餓虎の二本生變を殘存せるは、無礙捨身會開催の史實と相待つて、六朝時代の佛教文化史上に、本生圖像の流行てふ一項目を附加せしむるに足ると思ふ。(法顯の錫蘭佛牙祭時の記事の如く大袈裟には行はれなかつたとしても)洛陽龍門山の佛龕中に、亦薩埵王子、及び須大拏太子の二本生變相があるが、是れも今と同じく捨身の意を體した作物であることは、改めて論ずるまでもあるまい。天壽國曼荼羅に就ては、彌陀か兜率かといふて、古來識者間に異論はあるが、一寸圖相から眺めた所では、何かの本生圖の樣にも見える。否卽ち此の繡帳の繪は、たとい本生圖でないまでも、彌陀淨土、彌勒淨土といふた樣な、あまり鹿爪らしい物では無いらしい。

猶ほ『廣弘明集』の中には、前に揭げた捨身に關する諸文の外、梁武帝の『摩訶波若懺文』、『金剛波若懺文』、陳宣帝の『勝天王般若懺文』、同文帝の『妙法蓮華經懺文』、『金光明經懺文』、『大通方廣懺文』、『虛空藏菩薩懺文』、『方等陀羅尼齋懺文』、『藥師齋懺文』、『娑羅齋懺文』、梁簡文の『四月八日度人出家願文』、『八關齋制序』、『千佛願文』、『爲人造丈八夾紵金薄像疏』、沈約等の『南齊僕射王奐枳圓寺刹下石記』、『齊竟陵王題佛光文』、『彌陀佛銘』、『瑞石像銘』、『釋迦文佛像銘』、『千佛頌』等を始め、其の他諸種の六朝の佛教文化に對する好資料を收めて居る。言葉を換へて言へば、此等の諸文に依て、その信仰狀態より、布ては當時の風教文物の一般を推知し得るのである。今飛鳥期の佛教は、這種の梁陳時代の佛教と同系同樣のものであることは、今日零細の史實の中からでも、略或程度までの判斷を加ふることが出來るのである。曩に無遮大會のことを一言したが、是會も早く既に推古天皇第四年に法興寺の慶讚に際して催されたのであつた。それより更に遡つて、用明帝の二年には、坂田寺及び藥師佛像、竝に四天王寺の四天王像等が造立せられたが、藥師の信仰は、前に名を列ねた陳文帝の『藥師齋懺文』の文にも

藥師如來有大誓願。接引萬物。救護衆生。導諸有之百川。歸法流之一味。亦能施與花林。隨從世俗。使得安樂。令無怖畏。至如八難九橫。五濁三災。水火盜賊。疾疫飢饉。怨家債主。王法縣官。憑陵之勢萬端。虔煞之法千變。悉能轉禍爲福。改危成安。復有求富貴須祿位。延壽命多子息。生民之大欲。世間之切要。莫不隨心應念自然滿足。故知諸佛方便。事絕思量。弟子司牧寡方。庶績未乂。方憑藥師本願。成就衆生。今謹依經敎。於某處建如干僧如干日藥師齋懺。現前大衆。至心敬禮本師釋迦如來。禮藥師如來。

など云ふて居るが、藥師齋懺とは本朝でも古くから行はれた藥師悔過のことである。藥師の信仰は、今文にもあつた樣に、現世得益を主眼として成立されて居た。彼の

用明天皇の御不豫に當り、勅願に依りて藥師の尊像を造立せしめられたのも、一重に御惱平癒の爲にせられたものであつたに相違ない。推古天皇の十三年には、金銅丈六釋迦像が鑄造せられたが、此の金銅釋迦像の鑄造なども、既に支那に於て盛に行はれた其の餘習を受けたものである。又此の時代、佛像を造立せらるゝに當り、其の光背等に施主發願の旨を銘記した、推古朝第十五年鑄造の藥師佛、同第三十一年鑄造の釋迦佛、共に其の銘文を存して居るが、斯く光背に銘文を記す等のことも、決して邦人の始めたものでないことは、さきに其の題目を擧げた『齊竟陵王題佛光文』等を讀まんものゝ一目して推知し得る所である。

聖德法王が『勝鬘』、『法華』、『維摩』、『安宅』の諸經を講說し玉ひしことも、國史に明かな事蹟であるが、王侯貴人の講經といふことも、六朝佛教の黃金時代に於ける其の盛儀の一であつた。梁武帝が、屢同泰寺に行幸せられて、『涅槃』、『般若』、『三慧』等の諸經を講說せられたことは、『梁書』などにも、具に記載されてあるが、其の大通五年二月に、帝が親しく同泰寺に幸して『大般若經』を講ぜられた當時の消息は、蕭子顯に依て『御講金字摩訶般若波羅蜜經序』の中に詳細に說明されてある。如何に當時の佛教が、彼土の上下に勢力を持つて居たかと云ふことを知らしむるに足る一證ともなることゆへ、左に其の一節を抄出しよう。

以中大通五年太歲癸丑二月己未朔二十六日甲申。鑾駕出大通門。幸同泰寺。發講設道俗無遮大會。萬騎龍趍。千乘雷動。天樂九成。梵音四合。震震塡塡。塵霧連天。以造于道場。而建乎福田也。旣而龍袞輟御。法眼尊臨。殿華紫紺。座疋高廣。上界莫之擬。新學不能昇。天容有穆。降詔音旨。弘捷疾之辯。騁無畏之辭。炎輦無窮。連環自解。恣所請問。渙然氷釋。滯義同遣。疑網皆除。亦猶懸鏡之不藏。衢樽之俟酌。加以長筵亘陛。冠冕千群。充堂溢霤。僧侶山積。對別殿而重肩。環高廊而接坐。錐立不容。棘刺無地。承法雨之通潤。悅甘露而忘歸。如百川之赴巨海。類衆星之仰日月。自皇太子王侯以下侍中司空袁昂等六百九十八人。其僧正慧令等義學僧鎭座一千人。晝則同心聽受。夜則更述制義。其餘僧尼又優婆塞衆。優婆夷衆。男官道士。女官道士。白衣居士。波斯國使。于闐國使。北館歸化人。講肆所班。供帳所設。三十一萬九千六百四十二人。又二官武衛宿直之身。植葆戈駐金甲。並蒙道饌。別錫泉府。復數萬人。不在聽衆之例。外國道人沙呵耶奢。年將百歲。在檀特山中。坐禪。聞中國應有大講。故自遠而至。機感先通。咫尺萬里。言語不達。重譯乃宣。三藏之解。聖情懸照。又波斯國使主史拘越。荒服遠夷。延參近座。膜拜露頂。欣受未聞。多種出家。聞義爲貴。卽有四人。同時落髮。先是保誌法師者。神通不測。自有別傳。天監元年。上始

光有天下。方留心禮樂。未遑汾陽之寄。法師以其年九月。自持一塵尾扇及鐵錫杖奉上。而口無所言。上亦未取其意。于今三十餘年矣。其扇柄繫以小繩。常所綰楔。指迹之處。宛然具存。至是御乃鳴錫昇堂。執扇講說。故知震大千而吼法者。抑有冥府。是時歳云芳春。毎夕雨注。法鼓晨鳴。輙便清朗。時過兩旬。日盈三七。陽和協度。雲景禎祥。

梁帝が錫を鳴して塵尾扇を執て講說せられたといふ、我國にも果して夙に塵尾扇等も傳へられた。

之を要するに、推古朝及び其の以前の佛教は、梁陳時代の佛教其の儘のものであつたらうと云ふことは、略之を推測し得るのである。佛教渡來の當初より、三韓朝貢の都度、如何なる經教と、其の本尊像等が賚らせられたか等と云ふことに就きては、一一明確なことは解らぬとするも、彼我の信仰及び文明狀態の類似よりして、其の稟承の次第を推案することが出來る。卽ち我國に於ける此の時代の佛教は、主として現世得益の意味をも含むだ祈禱教の一種、『灌頂經』、『金光明經』、『安宅經』などの思想に基づいたものだらうと思はるゝ古密教の信仰が行はれた。斯の如き思想も、無論彼の土に充分に行渡つて居つたものだらうといふことは、先に說明せし如く、藥師齋懺、竝に金光明經懺等の盛に修せられてあつたに徵しても明瞭である。六朝の佛教は、其の末期には大に思辨的學風を惹起して、諸論宗の蔚興を見るに至つた樣なものゝ、大體より云へば、羅什、曇無讖等の諸三藏が翻傳せられた『般若』、『法華』、『金光明』、『涅槃』、『無量壽』等の諸經が、常に信根培養の根柢となつた。而してかゝる大乘佛教の流傳の間に、自から微少ながらも密教的分子が含まれて居たが、それが陳隋の頃に至り、西竺の諸三藏に依て、『孔雀王呪經』の類なる古密教經典が、比較的多數に傳翻せられた。わが此の飛鳥期の佛教も、表面は『法華』、『勝鬘』等の大乘經典が行はれたが、實は大部分比較的初心の祈禱教の勢力が潛在して居たのである。

三初唐の文物の傳來と其の影響　推古天皇の二十六年には、隋亡びて唐朝新に興り、其の後十二年を經て、欽明天皇の二年、卽ち唐の貞觀四年には、唐に對して直接交通を開くに至つた。皇極天皇、天智天皇の時代に於ては、盛に唐朝の制度文物を輸入し、大化の革新は行はれ、推古朝以前に於ける三韓風の文明をして、其の面目を改めしむるに至つたのである。然し乍ら其の佛教文化に就きては、形式の方面に於て幾分の發達はあつたにしても、內容としては大なる變動は無かつた。信仰其の他凡てに於ても前代と大差なく、引き續きて繡像、織成像等の流行せらるゝと共に、彌陀、藥師、釋迦、彌勒等の崇信大に行れて、上記諸佛の淨土變も屢作造されたのであつた。尤

も此の時代にありては、唐朝其の物に於ても、陳隋時代の壇力的佛教以外に、特筆すべき佛教文化は起らなかつたのである。而して現存の古美術中、橘夫人廚子繪、法隆寺金堂の壁畫などは、此の時代の遺作だとのことであるが、其の中、法隆寺金堂の壁畫に就ては、其の畫相の說明に異說がある。『古今目錄抄』の記者は、西壁阿彌陀、東壁寶生、北浦戸東脇壁藥師、西脇壁釋迦の四佛淨土だと說明して居る。十方諸佛に關する記述は、大乘經典の中には、非常に澤山あつて、從て東、西、南、北の諸佛淨刹の說なども、必しも一定でない。今法隆寺金堂の壁畫は、果して如何なる四佛が圖せられたものであるか、『古今目錄抄』の說は、其の解說當を得居るや否や等の問題に就きては、予はこゝに批判解說すべき何等の材料も有たぬ。從て獨斷にて甲乙是非する程の妄說も加へ度はないが、前記の『古今目錄抄』の說が、後代祕密曼陀羅中金剛界五佛の一尊たる寶生如來の名を擧げて、東壁の淨土圖として說明したるは、聊か穩かでない。四佛竝べて畫くとすれば、何等かの意義を備へた據り處のあるものを畫くべき筈である。それは『金光明經』壽量品所說の四佛、東方阿閦、南方寶相、西方無量壽、北方微妙聲などの諸佛が、先づ最初に畫かれて然るべきかとも思ふ。『金光明經』は、大乘經中密敎とは比較的緣の深い經典で、今の四佛や鬼神品所列の諸神將など、あれこれ合せると、極く幼稚な曼荼羅見たいなものは組織が出來相だといひ得る程のもの、北凉曇無讖の傳譯以來、隨分盛に流傳されたもので、梁眞諦譯は亡逸せしも、其の大部分は隋の寶貴が合會せる合部金光明經中にあり。此の經の信仰は、我朝佛敎渡來の初期時代から入つて居るらしい。四天王に對する信仰なども、餘經に其の說あるにしても、此の經より導かれたるもの、其の直接原因をなして居るだらうと推測さるゝのである。斯くの如く此の經の信仰の古來盛なりしを思ふと共に、若し此の時代に四佛の淨土が一時に畫かれたとしたならば、此の經所說の四佛等であらうと思ひ浮ばれぬでもないが、退て考くて見ると、此の四佛の中には藥師の一尊が在さぬ。此は金堂の本尊が藥師如來であるから考へて、少し不釣合な感じもする。文武天皇の二年藥師寺建立の際等にも、其の講堂に淨瑠璃世界の曼荼羅、卽ち藥師淨土變が畫かれたことから推測するも、右法隆寺金堂の壁畫も、其の一者は必ず藥師の淨刹でなければならぬ筈であるが、就ては『七大寺巡禮記』の說が、或は當を得て居るかとも思ふ。『巡禮記』の作者は、東壁は藥師淨土、西壁は彌陀淨刹、南北壁は、他の佛菩薩であると記して居る。元來藥師の信仰は、何經を根底として流布されたものかといふに、予はまだ詳細のことは調べぬが、それは帛尸羅蜜多羅譯の『灌頂經』等で

あらうと思ふ。卽ち彼の『佛說灌頂拔除過罪生死得度經』卷第十二には「佛告文殊師利。東方去此佛刹十恒河沙世界。有佛名曰藥師琉璃光如來」といひ、藥師如來の十二微妙上願を明し、其の下に

佛告文殊師利。此藥師琉璃光佛本願功德如是。我今爲汝略說其國莊嚴之事。此藥師琉璃光如來國土清淨。無五濁無愛欲無意垢。以白銀琉璃爲地。宮殿樓閣悉用七寶。亦如西方無量壽國無有異也。有二菩薩。一名日曜。二名月淨。是二菩薩次補佛處。諸善男子及善女人。亦當願生彼國土也。

と說き、更に藥師佛の功德を補說せる中に、

佛言。若四輩弟子。比丘比丘尼。淸信士淸信女。常修月六齋年三長齋。或晝夜精勤一心苦行。願欲往生西方阿彌陀佛國者。憶念晝夜。若一日二日三日四日五日六日七日。或復中悔聞我說是藥師瑠璃光佛本願功德。盡其壽命。欲終之日。有八菩薩。其名曰文殊師利菩薩。觀世音菩薩。得大勢菩薩。無盡意菩薩。寶檀華菩薩。藥王菩薩。藥上菩薩。彌勒菩薩。此八菩薩。皆當飛往迎其精神。不經八難。生蓮華中。自然音樂。而相娛樂。

などの文がある。東方藥師、西方無量壽の說は、古くから斯く明瞭に傳へられ、經證もしつかりして居る。金堂の壁畫なども、無論此等の經證に依て畫かれたものだらうと思はれる。また今文中に、八菩薩迎接のことを明して居る。此は少し穿鑿にすぐるかも知れぬが、天智朝に繡八菩薩像が大安寺に納められたといふ、其の八菩薩は、今の八大菩薩では無かつたらうか。次に少し話しが遡るが、孝德天皇の白雉元年に、漢山口直大口が、詔を奉じて千佛像を刻した。是も六朝の遺風を稟けたものであることは申すまでもない。淨秀尼が千佛織成像を作つたことは、前章にも一言したが、『廣弘明集』には、梁簡文の『千佛願文』等が錄載せられ、文中に「弟子某甲。久沒迷波。長流苦沫。不生意樹。未啓心燈。而善生一念。敬造千佛」などと記してある。

之を要するに、飛鳥期の佛教は、六朝の文明其の物を承纏したもので、凡てに於て梁陳時代の文化と交涉關係を有して居る。孝德、天智朝以後、漸く唐初の風俗を帶ぶるに至つたと云ふ樣なものゝ、大體に於て差したる影響は蒙らなかつたのである。但し造像等の形式的方面に於ては、多少の發達を遂げた。橘夫人厨子繪、竝に法隆寺金堂の壁畫等が、其の手法に於て、從來の六朝三韓風以上に、一種特異の形式を加えた。該圖像等が、印度のアジャンター窟殿の壁畫に酷似して居るといふことは、先輩諸氏の間に既に唱說せらるゝ所であるが、此は唐の貞觀、永徽、顯慶の頃、再三印度に來往して、考古的大探險をも行つた王玄策の收集した材料に本づくもの、其の直接の

原因を爲して居るのだらうと思ふ。王玄策が印度鹿野苑の轉法輪處から模寫して來た佛足の圖が、當時いちはやく其の模本が我朝に寫し傳えられたこと等は、一面には、當時他の印度畫の模本も同時に傳えられたに相違ないといふ立證を爲さしむるに足るものだと思ふ。

四、奈良時代の佛教文化　飛鳥期の佛教は、略上記の如きものであるが、奈良期に入つては、其の文化の長足の進歩と共に、新たなる文明も輸入せられた。換言すれば前期飛鳥時代の佛教は、三韓を介して傳えられた六朝の文明である。此の奈良期に入つてからは、純粹唐朝の新文運を傳承して、我朝に於ける佛教文化の黄金時代を形作つたのであつた。此の時代に於ける佛教は、無論前朝の開明を稟承し、彌陀、釋迦、藥師、彌勒の諸尊、及び『金光明經』の崇信に由來する四天王其の他の諸天等の信仰も行はれ、造寺造像等も依然として盛に行はれたが、新來の唐朝文明と共に輸入せられた華嚴、律等の新宗教の興起は、從來の信仰及び其の藝術に正に一大變遷を促したのであつた。此等新宗の蔚興は、東大寺の建立となり、かつは諸國國分寺の建立となつた。觀音の信仰を一層盛ならしめ、補陀淨土變等が流行さるゝに至つたのも、華嚴教の致さしめしものらしい。又一面法相宗の流傳と同時に、新譯諸經論も大に攻究せられた。教學の發達も、昔日の三論成實などゝは同日の論でなかつたのである。

略言すれば、奈良朝の佛教は、唐玄奘及び其の門下、其の他道宣、賢首等の諸龍象に依て興隆せられた新文運の賜である。天平十四年に、僧道慈等に依て、大般若四處十六會圖、華嚴七處九會圖等が作られたことなどは、唐朝新興の佛教文明と、奈良朝の佛教との交渉關係の一端を揣摩せしむべき好箇の題目であるが、此等の點に於て、奈良朝の佛教は、飛鳥期の佛教に比對して、全く其の面目を異にして居るのである。

次に奈良朝の佛教に於て、猶ほ忘るべからざるは、古密教の流行である。四天王、藥師十二神、八部衆、僧愼那藥叉大將、吉祥天、大辨才天等の信仰は、『金光明經』や『灌頂經』から承け繼がれた思想であるから、別に異とするにたらぬが、不空羂索觀音、十一面觀音等の諸尊の尊信が行はれたるに就ては、此は通途の六朝系の信仰、及び唐代慈恩、賢首等の教系とは、別系統の佛教として論究する必要があるかも知れぬ。尤も支那に於ける古密教の歴史は比較的に古く、『灌頂經』、『金光明經』なども、其の一分に屬すべきものであるが、こゝにいふ奈良朝古密教の流行に就ては、六朝末に東土に流傳された密乘諸經典、例せば隋闍那崛多譯の『十一面觀世音神呪經』、『不空羂索經』といふた樣な諸經が、其の信仰の根底をなして居るのであらう。兎も角も奈良朝時

代に於ける此等古密教の流行は、一種特異の佛教として、予等の研究に多大の注意を拂はしむるに足るものである。

第四章　奈良朝の密教に就て

一、奈良朝の佛教と六宗　南都六宗と呼ばるゝ宗派別の上より見る時は、飛鳥時代三韓風の佛教は、宗派としては僅に三論の一宗に限られて居た。尤も道昭等は孝德帝の白雉四年（唐大宗永徽三年、皇紀一三一三）、智通等は齊明帝の第四年（唐高宗顯慶三年、皇紀一三一八）に、既にそれ〳〵入唐し、親しく玄奘等に謁して、早くも新來の法門を傳へたのであつた。其の他學問僧往來の都度、絶えず彼の土の新文運を傳へたには相違ないが、まだ此の時代には、玄奘が其の新傳の諸經論を翻譯してゐた而已であつて、法相宗と呼はれ、華嚴宗といふた樣なものは、無論其の基礎すら固まつて居らなかつたのである。新羅の義湘は、唐太宗の龍朔元年（我齊明天皇七年、皇紀一三二一）に、入唐の本懷を達して、長安終南山に到り、智儼に就て華嚴の敎を稟けた。（楞云、義湘に關する『宋高僧傳』の記事は全然誤つて居る。卽ち宋傳では、義湘の入唐を總章二年にして居るが、若し然らば智儼は既に其の前年に示寂して居るのであるから、之に師事して得る筈がない。此は『三國遺事』の記述の方が確かである。遺事の記事は、義湘が儀鳳元年に開創した「浮石寺所傳」の碑文の說を傳へて居るのであるが、それによると義湘は武德八年に出家し、永徽元年に元曉と共に唐土に入らんと欲して果さず。此の龍朔元年始めて彼地に到り、總章の初年智儼の遷化に遇ひ、咸亨二年に至つて新羅に還つた。そして大周則天武后の長安二年、我文武天皇大寶二年に年七十八にて入寂したと云ふことである。猶遺事には、彼の『無量壽經疏』等の作者として有名な新羅の義寂を悟眞、智通、表訓、眞定、眞藏、色圓、湘源、能仁と共に、其の義湘の弟子の一人に數へてある。但し義湘の弟子としては、表訓などが一番傑出して居たものと見えて、興輪寺の金堂に安置せられた十聖、卽ち我道、帙觸、惠宿、安念、義湘、表訓、虵巴、元曉、惠空、慈藏の中、其の名を擧げられてある。賢首大師法藏は、實に湘と同學であつたのである。義湘歸國の後、法藏が『搜玄疏』の副本を湘師の許に送つたとの消息もある。又法藏に就いて敎を稟けた新羅僧に勝詮といふ人があるが、此の人も、仲々海東の華嚴宗の爲に力を竭した。斯くて夙に圓融の敎法は新羅にも傳へられたのであるが、恰も此の時代の長安には、玄奘門下の英才、窺基、圓側、神泰、普光等、竝に其の末徒等に依て、俱舍、法相の宗義が盛に顯揚されつゝあると共に、一方には、道宣律師等一派に依て、四分律宗の法門が開闡され

て居た。即ち法相、華嚴、律等の諸宗が、同時に其の基を開いたのである。然し其の勢力は、まだ餘り充實しては居らなかつた。

而して唐初に於ける法相、華嚴、律等の新宗派の蔚興は、從來の六朝佛教の面目を一新せしめたのであるが、愈其の影響が我國にまで及んだのは、奈良朝に入つてからであらう。即ち法相宗の如きも、早くから流傳されて居たものには相違ないが、謂ゆる初唐佛教で、我國で十二分の勢力を振ふに至つたのは奈良朝である。奈良朝といへば、我國佛教の黄金時代であつて、從て其の時代の文明と佛教との交渉關係も非常に深い。否奈良朝の文明は、其の全部を擧げて佛教の精華其ものであるから、凡てに於て佛教文化の遺蹤を語る必要がある。特に其の美術的方面に就て論究すべき事項も、甚だ少くはないのである。細かいことは到底其の説明を下すことは出來ぬが、已下次を逐ふて、一通りの卑見を述べて見よう。

正倉院古文書の厨子帳に依ると、其の六宗厨子の繪には、各宗に屬する主要なる諸尊竝に列祖の像が畫かれてあつたといふ。即ち六の厨子とは「第一厨子（花嚴宗、判大稻村）普莊嚴童子、普賢菩薩、文殊師利菩薩、善財童子、主夜神、海童比丘、堅慧菩薩（僧）、海雲比丘、主晝神。第二厨子（法性宗、贊秦麻呂）梵天、勝義生菩薩、觀自在菩薩、無盡意菩薩、無着菩薩（僧）、羅刹、雪山童子、世親菩薩（僧、大老）、護法菩薩（僧、釋迦菩薩（王形）阿私仙（老人）。第三厨子（三論宗、秦堅魚）琉璃光菩薩、文殊師利菩薩、維摩詰（居士形）師子吼菩薩、清辨菩薩（僧、劣）分別明菩薩（僧、壯）提婆菩薩（僧、老）龍樹菩薩（僧、老）大須菩提（僧、壯）常啼菩薩（僧、中）。第四厨子（律宗、息長豐穗）阿難（中老）迦葉（大老）優婆離（老）末田地（壯）彌沙塞（老）薩婆多、曇無德（老）優婆掬多（大老）迦葉遺（老）摩訶僧祇。第五厨子（薩婆多宗、赤染沙彌万呂）提婆設摩（壯）尊者世友（老）尊者世親（大老、比丘）尊者妙音（壯）法護論師（老）衆賢論師（壯、比丘）迦多延尼子（老）大目揵連（壯）舍利子（老）富樓那（老）。第六厨子（成實宗、勝人足）舍利弗（老）師子鎧菩薩（壯）達摩陀羅（老）羅睺羅（劣）阿說者（老）放牛難陀（劣）難陀（壯）阿難（中老）和加利（老）弗迦沙王（中老）等である。以上の外、各厨子に梵天、帝釋、四天王があり、なほ第六厨子の阿說者、弗伽沙王の二名は抹殺されて、其の處に力士、金剛の二が傍書されてある。此の列名は、其の諸尊竝に祖師の撰み方と云ひ、之に老壯の別を附けた處など、仲々振つた遣り方で、予等には一寸譯の解らぬものがある。歴史とか、教説とかいふた樣な、嚴密な學術的意義に於ての價値は尠ないとしても、當時此等華嚴已下の六宗が、立派に一般社會から公認されて居たものであるといふことを知るには屈强の好史料である。

二、眞言密教の混入

却説奈良時代の佛教と云へば、華嚴等の六宗であることは、更めて繰返すまでもない、其の藝術に及ぼせる現象としては、前の飛鳥時代の遺風を

受けて、阿彌陀淨土變、藥師淨土變、靈山淨土變といふた樣な、種々の淨土變が行はれた。又『大安寺資財帳』に「一張大般若四處十六會圖像。一張華嚴七處九會圖像。右以天平十四年歲次壬午奉爲十代天皇前律師道慈法師寺主僧敎義等奉造者」とある二個像の如きは、一は玄奘譯（唐高宗龍朔三年、天智天皇紀一三二九出）の『大般若經』、他は實叉難陀譯（唐中宗嗣聖十六年、文武帝大寶二年皇紀一三五九出）の新譯の『華嚴經』に基づいて作製されたもの、是は純然たる唐朝新興の佛敎に據れる奈良朝特有の作物の一に算すべきものである。東大寺盧舍那佛像の造立、さては其の大佛華趺の刻畫の如き、天平勝寶八年六月廿一日の『東大寺本願聖朝施藥御願文』に謂ゆる「遂便命終之後。往生華藏世界。面奉盧舍那佛。必欲證得遍法界位」の文などと相對して、其の信仰の一端を揣摩することも出來るし、其の他前章にも一言した樣に、『金光明經』を中心とした吉祥天、辯才天、僧愼那藥叉大將等の類の諸天等の信仰も行はれたが、概して云へば、前朝の遺風を承繼した上に、華嚴、法相等の初唐新興の文明をも併せ合して鍛へ上げられたものである。換言すれば奈良朝の佛敎は、三論華嚴、法相等の六宗のみが流布されて居た。從て之が產物たる藝術も、大體はそれと順應しては居たものゝ、更に剋實して論究する時は、其の實際の歷史は、寧ろ予等の豫想以上の史實を殘して居るのである。卽ち表面から見た奈良朝の佛敎は、六宗、別しては東大寺を中心として華嚴大敎の全盛時代であつた。但し是れは表面に現はれた事實と云ふのみで、細かく云へば、充分に潛勢力を有ちつゝ、而も世に知られずに居た敎學及び信仰もある。彼の天台の經卷の如きも、鑑眞大和上東遊に際し、既に我國に傳へられたのであるが、最澄が出世するまでは、まだ一宗を形成するに至らなかつた。眞言祕敎の如きも、早く夙に此の土に流傳されたもので、是れ亦無論宗門の體系をなさなかつた。然し乍ら奈良朝に於ける眞言祕敎の流通は、仲々大きな勢力を有つて居たものであると云ふことは、遺物竝に文獻の存在に徵し奪ふ可からざる事實であつて、予等は之に就き或程度までの研究材料を有するのみならず、進で之を考察することは、顯敎と密敎との相關、及び其の發達的關係の研究上、非常に重要なことである。何故かと云へば、奈良朝の密敎は、純然たる『灌頂經』、『金光明經』一系の古密敎でもなければ、又『大日經』、『金剛頂經』流の新密敎でもない。而も其の間に自から古密敎の一分も包該して居るし、新密敎の何物かをも收容して居る。卽ち新古兩密の中間的思想にあるものとも言へるが、其の實は此の時既に善無畏、金剛智の經敎も傳へられて居たので、奈良朝の密敎が、空海、最澄の所傳に對しても全然沒交涉ではないからである。

斯の様なことをいふと、予等は好んで異を立つる様に思はるゝかも知れぬが、然し乍ら事實は矢張り事實である。試に『東大寺要錄』第四諸會章の初にある。

當伽藍者。常行佛事。殊營功德。鴻鐘六時響。永息六道苦。梵唄四季唱。速招四德果。是則恒轉法輪之砌。進修不退之地者也。春開華嚴大會。各轉八十軸之眞言。秋展般若法莚。悉讀六百卷之妙文。夏捧一萬蓮華。持供千葉臺之舍那。冬挑十千燈明。用獻大遍照之母駄。如是殊勝廣大事業。唯限寺家。他寺他處非有此事。

の文を讀むに、其の大遍照の母駄とは何であらう。華嚴の教主たる毘盧遮那と、大日の教主との間に、どれ程の差別があるか、是は既に教理史上の問題であるが、誰しも東大寺の盧舍那大佛と、曼荼會上の大日如來を併せ拜して、直に之を同一尊と見做す人は無いにしても、然も此の尊は、姉妹的關係を有する思想上の產物といふよりは、寧ろ同一佛陀に對する其の思想發達の歷程に於ける一異稱に過ぎぬものと思ふのである。是は此の章で細談する餘裕は無いが、兎も角も大遍照の母駄なる語は、『華嚴經』の教主毘盧遮那に局られたものでなく、轉て其の名の示す如く、『大日經』教主にも通ずべきものなる事丈は、豫め記憶して置いて欲しい。猶ほ同書第八雜事章には、大佛殿東西曼荼羅の左右の緣の銘文を載せてあるが、其の西曼荼羅東緣の文には

遍周法界。能化形質。博愛群生。必濟諸願者。其唯觀自在菩薩乎。觀自在菩薩者。往古正法明如來也。以其本願。化形菩薩。拔濟一切世間之苦。其住也在西方極樂世界。奉侍阿彌陀佛。其神也隨無量無數生品。布延大慈大悲。或現一十一面。或現千手千眼。乃名觀自在。乃名觀世音。又稱馬頭。又稱不空羂索。所以有至願則無所不感。有至信則無所不應。隨緣雖異其實一也。維不空羂索觀自在菩薩大織像者。我日本國皇帝陛下。奉爲欲令平安皇太后所造也。

とある。觀音が、梵王、帝釋、居士、宰官等の種々の身を現じて、普く衆生を化益すとの說は、『法華經』其の他古來よりの說であるが、今の如く「或現一十一面。或現千手千眼。乃名觀自在。乃名觀世音。又稱馬頭。又稱不空羂索」など云ふは、決して普通顯教の說にない處のもので、此は既に純然たる祕密教の諸尊の一に數ふべきものである。而して奈良朝に於ける此等の祕密佛教の思想は、抑も那處より承繼されたものであらうか、『華嚴』『法華』『般若』『涅槃』等の普通の大乘教中に說示されてない諸尊が、如何にして斯く深く奈良朝佛教界に、大きな信仰上の勢力を有つて居たのであらうか。此の疑問を解決する爲めには、表面に現はれただけの史實、卽ち單に華嚴宗等の諸宗

が行はれて居たと云ふのみの說明では、到底其の眞相を穿ち難い。如何しても、猶ほ一歩進で、當時の敎勢を詳かにする必要があるのであるが、然らば其は果して孰れから稟承したものであらう歟。

三、密軌に契へる佛像の製作　當代の遺物たる大和東大寺三月堂本尊不空羂索觀音、法華寺本尊十一面觀音、唐招提寺金堂の千手觀音等、孰れも密軌に契ふて居る。祕密佛敎は、最澄空海等に依て、始めて將來されたものと、單純に考へて居る人の目からは、幾分異樣に考へられるかも知れぬが、其の實は此の時代に此の種の諸觀音の信仰は盛に行はれて居た。鑑眞大和上なども、彌陀藥師等の諸佛像と共に、彫白旃檀千手像一軀、繡千手像一鋪、救世觀世音像一鋪等を將來して居るのである。且つ其等の諸菩薩の造像に就きては、相當に遺品もあるし、史乘の記載も尠なくない。元來此の時既に這種の諸尊に對する密軌も成立され、又我朝にも傳來されて居たので、餘り古い所まで遡つた話は、此の處で述ぶる必要はないが、例へば十一面觀音の如きも、北周の耶舍崛多の譯した『十一面觀世音神呪經』(成十二右三)の中に、

須用白旃檀作觀世音像其木要須精實不得枯篋身長一尺三寸作十一頭當前三面作菩薩面左廂三面作瞋面右廂三面似菩薩面狗牙上出後有一面作大笑面頂上一面作佛面面悉向前後著光其十一面各載華冠其華冠中各有阿彌陀佛觀世音左手把澡瓶瓶口出蓮華展其右手以串瓔珞施無畏手其像身須刻出瓔珞莊嚴

と云ふた樣な記事がある。猶同書の奥書に「此經名金剛大道場神呪經十萬偈成部略出十一面觀世音一品」とある。而して彼の『金剛大道場神呪經』なるものが、彼の『西域求法高僧傳』等に云ふ十萬頌の明呪經と同一書であるか否かは解らぬが、孰れにしても、六朝の末期に當て、印度に於て、祕密儀軌の幾分が成立して居たものであることは、おぼろげ乍ら其の消息を認め得られぬでもない(楞云、但此の十一面、千手等の思想は、あまり古く遡れぬと云ふことは、梁代に撰錄された『陀羅尼雜集』等から考へて、其の推測が出來る)。闍那崛多が陳後主の禎明元年(我用明帝二年皇紀一二四八)の五月に譯出した『不空羂索經』なども、亦今の『十一面經』など〻其の類を同じふして居たかもしれぬ。爾來唐に入つてからは、相次いで單本儀軌の翻傳を見た。其の中特筆すべきは唐高宗永徽五年(孝德天皇白雉五年、皇紀一三一四)四月、阿地瞿多が『陀羅尼集經』十二卷を翻出したことである。卽ち該經には、釋迦佛頂已下、諸佛、諸菩薩、諸忿怒、諸天の印呪像法等の說明が、して居る。又陀羅尼都會道場の說もある。堅實に成立された大日如來に對する思想は見出されぬが、略當時の祕密佛敎の內容を知るには、彼の『陀羅尼雜集』などと相

幷で屈强の良書である。玄奘などですら、『十一面神呪心經』、『不空羂索神呪心經』等を翻譯したが、引續き地婆訶羅、阿儞眞那、菩提流志、義淨等、亦多數の祕密儀軌を譯出した。中に就て、比較的大冊の者としては、中宗の神龍元年（文武天皇慶雲二年、皇紀一三六三）五月、中印度の僧、般刺密帝の譯出した『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』十卷同景龍三年（元明天皇和銅二年、皇紀一三六九）菩提流志翻傳の『不空羂索神變眞言經』三十卷なるが、前者は古來多く禪家の間に愛誦され、密軌としては、殆ど世の識者の注意を拂はれなかつたのであるが、是れこそ實に當時中印度那蘭陀寺大道場所用のもので、其の第七卷（成一五右）には、

> 於壇室中。四壁敷設十方如來。及諸菩薩所有形像。應於當陽張盧舍那。釋迦。彌勒。阿閦。彌陀諸大變化觀音形像。兼金剛藏。安其左右。帝釋梵王。烏芻瑟摩。幷藍地迦。諸軍荼利。與毘俱知。四天王等。頻那夜迦。張於門側。左右安置。又取八鏡。覆懸虛空。與壇場中所安之鏡方面相對。使其形影重重相涉。

と云ひ、所謂那蘭陀寺に於ける曼荼羅灌頂金剛大道場の作壇の法を說いて居る。此は善無畏所傳の『大日經』及び其の感見の胎藏曼荼羅などゝ合考して、祕密佛敎史の研究上、特筆大書すべき一大事項である。善無畏三藏の譯經と因緣淺からざる無行禪師は、嘗て此の那蘭陀寺の祕密壇場に入つて明呪を稟けたことのあるもの、其の他、善無畏、金剛智等も、亦此の那蘭陀寺に遊學したことのある人に相違ないが、何故今の『大佛頂首楞嚴經』の說が重要であるかと云へば、其の壇場の中尊として盧遮那佛を安置した、是は四方佛の事を明かせる從前の諸大乘經に比し、實に破格の事であつて、且つは諸大變化觀音形像云々といふ。是れ卽ち胎藏曼荼羅成立の原底をなすものである故である。

四、奈良朝に於ける祕密儀軌の將來　而して金剛智譯の『金剛頂瑜伽中略出念誦經』は、玄宗の開元十一年（元正天皇養老七年、皇紀一三八三）善無畏譯の『大毗盧遮那成佛神變加持經』は、同開元十三年（聖武天皇神龜二年、皇紀一三八五）に傳翻されて居るのであるが、上來述べた樣な陳隋以降所傳の祕密儀軌は、奈良朝佛敎は、無論之をも傳承し居つたものに相違ない。予等は今何某が何時何經を賚して來た等といふことは、指示することは出來ぬが、彼此來住の序、多少づゝ傳來したものもあらうし、殊に天平七年（唐玄宗開元二十三年、皇紀一三九五）に歸朝した玄昉の如きは、佛像經論五千餘卷を請來して還つた。それは恐らく當代現行の開元大藏經を悉皆引き纏めて賚して來たものであらう。且つ此等の密軌をも餘さず將來したらうと思はるゝことは、同十三年七月に、昉自から『千手經』一千卷を書寫し

た事實に徴しても、其の他を推案することが出來る。されば今奈良朝の佛教が、華嚴、法相、律等の顯教諸宗の盛行の裏面に、此等祕密宗教が格外な潛勢力を有ち、現に幾多の其の信仰上の遺品を存する如きも、決して偶然の事實では無いのである。

『金光明經』、『灌頂經』流の古密教は、既に飛鳥時代から行はれたものだらうとも考へられるが、今奈良朝に於ける、十一面、千手、馬頭、其の他の諸大變化觀音形像の流行は、是は顯教竝に古密教の教系を離れて、純粹祕密佛教の一尊に分屬すべきものである。彼の『東大寺要錄』諸會章の序文の如きも、今『大佛頂首楞嚴經』第六(成一右三)に

故我能現衆多妙容。能說無邊秘密神呪。其中或現一首三首五首七首九首十一首。如是乃至一百八首。千首。萬首。八萬四千爍迦囉首。二臂四臂六臂八臂十臂十二臂十四十六十八二十。至二十四。如是乃至一百八臂千臂萬臂。八萬四千母陀羅臂。二目三目四目九目。如是乃至一百八目。千目萬目。八萬四千淸淨寶目。或慈或威。或定或慧。救護衆生得大自在。

とあるものと、其の思想を同ふするもの、法隆寺九面觀音の製作の如きも、是等の經說に本づかれたものであることは、決して疑惑を挾む必要はないのである。且つ當時既に『大日經』等も流傳されて居ることは、大和西大寺所藏の稱德天皇の天平神護二年(唐代宗大曆元年皇紀一四二六年)吉備由利書寫の『大毘盧遮那成佛經』の存在に依て明曰である。猶淳仁天皇の天平勝寶八年(唐代宗廣德元年皇紀一四二三年)の『勅封藏施入帳聖武天皇四十九日御願文』中には「七條褐色細袈裟一領金剛智三藏袈裟」の目がある。亦以て當時に於ける祕密佛教弘通の事實を認めしむべき傍證を爲すものである。之を要するに、奈良朝に於ける此の種秘密教の流行、及び其等の美術的作物の存在は、我朝文明史上藝術史上の問題である許りでなく、一般佛教發達史の上から考ふるも、仲々重要なことゝ思ふ。次章已下猶少しく此等の錯綜した顯教、古密教、新密教に亙つた種々の作物竝に其等思想の淵源に就き、一通りの卑見を述ぶる心組である。

第五章　法隆寺金堂の壁畫と東大寺の盧舍那佛

一、四佛と五佛　法隆寺金堂の壁畫に就きては、前章中に一言したこともあるし亦他にも之に關して記述したこともあるゆゑ、こゝに再說するのは、如何にも徒勞の樣にも考へられるが、然し彼の壁畫の四方佛は、佛陀其ものが、顯教の諸尊であるからといふて、普通の說明丈でよいかと云へば、決してさうでない。飜て兩界曼荼羅の五佛を案ずるに、其の中尊を除きて、餘は今の四方佛と同一である。卽ち佛教神話發

達體系の上から見た兩界曼荼羅の四佛は、今の四方佛の移し安置せられたものに過ぎぬ。而して中央の大日如來は如何かといへば、是には名の示す如く太陽神話の産物であらうとの說もあるが、其の實は釋迦に對する佛身觀の發達した結果、斯樣な理想佛の說示を見るに至つた次第であつて、前身はと云へば、『華嚴經』の敎主毘盧遮那佛である。卽ち金堂壁畫の四方佛と、東大寺の盧舍那佛とを合する時は、差當り曼荼羅會上の佛尊に不足はない。斯樣なことをいふと、敎權に囚はれて居る一部の學者や、餘りに儀軌などの一部の典籍にのみ眼を曝して居らるゝ諸氏の耳には、多少は異樣に響くかもしれぬ。成程華嚴宗、法相宗、及び眞言宗等は、各別の宗派である、一は密敎で他は顯敎である。金堂の壁畫と、盧舍那大佛と、兩界曼荼羅の五佛とは、形像等に於て、何等の一致を持たぬといふ。凡てに於て此等の兩者の間に、何等かの區劃を設くべきは、誰にても異論のない所であらう。去り乍ら其の歷史的系統的發達の上に於て、那處まで顯敎であり、那邊からが密敎であるか。果して祕密儀軌なるものが、幾何の軌範を示して居るかと云ふ樣なことは、淺薄な一往の宗派別位な表面に顯はれた皮相の觀察で批判し得べきものではない。

二、盧舍那と大日　佛敎の發達體系は、非常に複雜で、其から其へと網が張られて居る。其の網の本綱を捉へて、能く其の大獻を得るといふことは仲々の難事である。例へば今祕密佛敎などにしても、佛敎中の如何なる經敎から發達して來た歟。祕密の經典は大日如來の所說である、牟尼の說法ではないといふ一片の語を聞きて、其まゝ盲信して、恰も其の敎主まで異あるものと考ふる如きは粗忽千萬である。又密敎が印度敎の影響を蒙ることが多いからと云ふて、大部分は印度敎より轉變したものであらうと推測する如きも、又輕卒の議論たるを免れぬ。普通の學者は、大日といふ新たな一佛名に驚きて、祕密佛敎を別物扱に爲るが、大日なる名は、『華嚴經』の敎主盧舍那の翻名で、其には毘盧遮那と記すべきもの、祕密聖典に至て、始めて顯はれた名でも何でも無い。此の意味に於て、祕密佛敎の本尊たる大日如來は、大陽神話でも無ければ、釋迦敎以外の佛陀でもない。卽ち釋迦牟尼佛陀に對する佛身觀の發達した結果、其の本身は法界に周遍するものと認むるに至つた、是れ毘盧遮那如來と名づけらるゝものである。是が何時の間にやら、四方佛の中央に安置せられて、祕密敎の本尊となつた。諸經典所說の佛、菩薩、諸天神が雜集せられて、曼荼羅の成立を見、同時に大日經の樣な祕密經典の編纂を見るに至つたのは、比較的後代の事であるが、是等經典竝に曼荼羅の作者は、漫然と此土出現の釋尊をも竝べて置いたのが抑

も誤りで、遂には毘盧遮那如來は、釋尊とは全然別途の佛であると誤認せしむるに至つてしまつた。それはまだよいが、盧舍那卽ち毘盧遮那なる梵名と、大日なる譯名とが、際い所で戸惑をして、二の佛陀の樣に考へられて居るのは、甚だ以て沙汰の限りである。華嚴宗と眞言宗とは、發達の歴程か一足蹈み違へて、居るが、本尊は本と一つである。卽ち問ふまでもなく東大寺の盧舍那佛は、後の祕密佛教の本尊たる大日如來に相違ないのである。

四、祕密佛教の發達　一體佛教が此の樣に發達し來つたに就ては、種々の徑路がある。一般には佛滅後、幾十百年の間、佛德を欣慕するものが、鑽仰又は思索の結果、佛身觀等に於て、漸次高尙なる說を唱ふるに至つたのであると信ぜられて居る。事實はそれに違いないが、今日の大乘佛教の如きは、唯單に理論上の發達のみに依て、現在の狀態に到達したのではなく、此には又色々な附帶事項がある。原始時代、小乘異部諸家の佛身觀より、馬鳴、龍樹、無着、世親等諸大論師の辨證、續いて支那並に我が日本に於ける諸先德の大乘辨護は、肉體現身の釋尊を賞め讚へて、立派に三身圓滿の佛陀にしてしまつた。去り乍ら大乘佛教の發達は、悉く此等論證思辨の致す所とは云へぬ。其の原因に就ては、外部の思想の混入したものもあるし、又思索以外、神話的寓語の間に變入したものもあり、且は醇粹宗教的實踐の上に發達したものもある。改めて說明する迄も無いことであるが、帝釋、梵王、乃至那羅延、毘紐諸天の如きは、在來の印度諸神が、佛教外護の神天として崇敬せらるゝに至れるものであつて、特に大乘佛教の發達に際しては、色々と思想の混入せる痕跡がある。大乘が必ずしも小乘から發達したものでないと云ふことは、二者の內容に餘程の徑庭あると、今日に於て、此の二者を結び付ける充分な材料が無いに依て、略明かな事實である。

而して大乘佛教の發達に就きては、理論の方面から發達したものよりは、說話の上で形を換へたものが多い。之に就きては、本生說話の變化發達といふことが、其の主要な原因となつて居る。大乘神話が、大部分は此の本生說話から發達して居るものであることは、苟も經典を讀むだことのあるものゝ、直に首肯し得る事實で、大乘經典の成立と、本生說話との間には、殆ど離る可からざる關係がある。此の種の消息を尋ねずして、一途に大乘教は其の學徒の論證思辨に依て發達したものであると考ふる如きは、非常な謬見である。或學者の如きは、阿彌陀佛の如きも、之を純哲學的思想上の產物であるかの樣に考て居る人もあるが、此は全く見當違な話である、畢竟經論も披見せず、獨斷で議論をするから、そんな大膽な說も吐けるが、大乘神話は大

乘神語として、多少の脈絡もあり系統もある。其の最初は說話として發達して居たものであることは、奪ふべからざる事實で、即ち經典に顯はれたる諸佛菩薩は、孰れも父母もあり妻子もある。それが修道して覺者となり、一切衆生を度すると云ふのであつて、頭から覺行圓滿の佛陀を說いて居るのではない。大乘所說の多佛思想は、頗る其の關係が複雜ではあるが、其の間に充分に糅氣がある、所謂本生を譚じて、父母妻子眷屬の存在を說くは、原始說話の痕跡を止めて居る次第である。唯之に附せる其の絢爛な詩的修辭は、此等人間的佛陀を厭迄崇高森嚴な神祕的佛陀にして終い、從て思想上に於ても、多少の變化はある。然し法身だの報身だの應身だのと云ふて、矢釜しく言ひ立つる樣になつたのは、其より後の話で、何も立派に三身說等が成立してしまつてから、それから阿彌陀等の大乘思想が出來たといふ譯ではない。又佛教は、其の哲學的思辨や、神話的寓話以外、純粹宗教的實踐の上に於て、其の學說にも大に變化を及ぼして居る。即ち古來佛教徒の間に行はれ來つた種々の禪觀中、大に教理の發達を助けたものも少なくはないのである。就中佛身を觀想する如き、即ち『觀佛三昧海經』『觀無量壽經』の類は、佛の相好等を觀する方法を明すに於て、委曲を極めて居るが、此の種の禪觀の非常に能く發達したものが祕密佛教にも入つて居る。而して此等觀佛等の法が、如何なる順序で佛教發達を助けて居るかと云へば、其の觀佛者の觀念作用が、一段一段と向上するに連れて、其の對象が益複雜となる。其と正比例して、之を說明すべき經典等にも、幾分づゝ新提供を爲しつゝあるのである。羅什の『思惟要略法』の中には、四無量觀法、白骨觀法、觀佛三昧觀法、生身觀法、法身觀法、十方諸佛觀法、觀無量壽佛法、諸法實相觀法、法華三昧觀法等の目が列ねられてあるが、此の樣な佛教徒の宗教的實踐として主要なる部分を爲せる種々の觀法は、佛教の教義を高遠ならしむるに於て、偉大なる原動力を爲して居たのである。其の實際の力は、寧ろ龍樹、世親等の辨證以上にあるかも知れぬ。唯觀法といふ樣なものは、行者其自身の內證の德に屬するものであるから、兎角表面に表はれて來ぬ樣な感じもするが、それが又隱約の間に種々の方面に發作して居る。即ち理觀としては遍法界身といふ樣な廣大な思想を生み、事觀としては極樂報土といふ樣な莊嚴世界の存在を想定せしむるに至つた。其の主因はと云へば、恐らく諸種の觀法であると思ふ。予は先頃三十五佛の事を一寸調べて見たが、其の節『決定毘尼經』や、『觀虛空藏菩薩經』などを繙讀して、非常な教訓を得た。即ち諸種の觀法は、佛教の發達に多大の影響を與へて居ること、此等の觀法は、古くから發達して居て、而も其が後代の

祕密佛教に迄も密接な關係を有して居ること等である。

斯の如くにして佛教は、種々なる原因、種々なる助緣に依り、複雜なる事情の下に發達を遂げて居るのであるが、今毘盧遮那佛が、華嚴教主より一轉して祕密教主になつたに就ては、こゝに說明の順序上、普通に顯教と稱せらるゝものと、及び祕密佛教との發達關係に就きて一言する必要がある。然し此の事を論ずる爲には、猶ほ少しく具體的に佛教發達の事實に就き詳述しなくてはならぬのであるが、今は其の餘裕もなきことゆへ、唯私に考へて居る卑見の一端を述べて置く迄に過ぎぬ。

元來祕密佛教は、佛教中尤も發達した佛教であると同時に、其の成立も一番新しく、內容も甚だ雜駁である。兩界曼荼羅の諸尊の如きは、能くも〳〵是程まで諸佛菩薩諸天神等を集會されたもの哉と感歎の外ないが、此等は何處から拉し來られたかと云へば、弘くは大小乘の經典中からと云ひ得ぬでもないが、大體は『金光明經』『灌頂經』『孔雀王呪經』等、元來が密教に親緣のある諸經典から採られてある。金胎兩部の中で、胎藏界の方には、多少印度教の影響を受けた、諸觀音竝に忿怒尊等が安置されて居るが、金剛界の方は、十二供養等の假托的諸尊を除けば、阿閦等の四佛は勿論、賢劫千佛等、みな原籍の明瞭なる大乘佛教の諸尊である。胎藏界曼荼羅が、前記の如く印度教の影響を受けた諸尊をも包容して居るのは事實であるが、是れも諸大變化觀音等として、或時代に成立し、既に各一尊として崇敬されて居たものを、偶『大日經』等の其等經典の編纂者が、之を綜合して自家藥籠中のものとしてしまつたまでの話しで、必ずしも『大日經』等に於て、悉く始めて說き出されたものだと云ふ譯でない。而して祕密經典中の大立物たる大日如來と金剛薩埵とは如何かといへば、一は前から繰り返し說明する華嚴教主毘盧遮那如來で、他の一は、何ぞ計らん是れ密迹金剛が菩薩として安置さるゝに至つたのであつて、本はと云へば、佛在世中、常に佛を影護して居たと傳說せらるゝ執金剛神密迹力士である。此の間の消息は『大寶積經』中の密迹金剛力士會、『華嚴經』、『大日經』、及び『金剛頂經』等の諸聖典を對讀すれば、大抵推察し得らるべきことゝ思ふ。何しろ此の樣な研究となると、曼荼羅の組織並に密教經典成立の根本問題に入る譯で、片言半紙の能く竭すべき處でない。予に猶ほ多少の卑見は無き譯でもないけれど、此は是で何時かまた詳論する機會もあらう。此の章では、兎も角も華嚴の教主と大日の教主とが、本來一尊であることを述べて、東大寺の大佛が、思想發達上、一足遲れたる爲に、大日如來に成り損じて居るものであることを說明するに止めて置く。是も通途の說に從ふならば、華嚴宗の本

尊として、又顯教の一尊として、大日如來とは、全然無關係のものとして說明するのが當然であるかも知れぬが、古密教を論ずるといふ立場から云へば、如何しても此の尊を見逃す譯には行かぬのである。

五、顯教の四佛と密教の四佛　次に四方佛のことは、經論の所說に異說もあり、金堂壁畫の四佛に對する古先德の所說、亦區々として一定せぬので、何とも確と定め樣もないが、先づ大體の處、『金光明經』所說の阿閦等の四佛であると云ふて居いて、差したる過誤は無からうと考へる。是れ卽ち曼荼羅會上の四佛其ものである。陳文帝の『金光明懺文』に「於是四佛世尊百千菩薩俱會信相之室顯說釋迦之壽明稱歎之妙偈出懺悔之法晉是曰法王微妙第一」云々とあるが、彼の金堂は、今文に謂ふ「四佛世尊百千菩薩俱會信相之室」なるものでは無からうか。假令然らざるまでも何等かの意義を有するものに相違ない。

後世は五重塔婆內等に、多く此の四佛の像が安置せられた。卽ち『東寶記』第二には、同寺五重塔婆のことを記せる下に、尊像安置次第と題し、

佛壇四方安金剛界四佛。坐像　印相如常。左右各安二菩薩。八菩薩皆二臂立像也。不詳尊號。或云。八大菩薩曼荼羅經所說八菩薩云云。件佛菩薩像悉大師御作也。度度炎上之時。每度奉取出。遁火難畢。但塔婆。大師御在世被造畢否不分明。若其成風。不終功者。本尊安置。後代長者之時有沙汰歟。或記云。件塔。陽成天皇之代。元慶年中造之云云。委細如次下注。

矣。阿閦東北隅左尊左手大頭二指相捻、餘指舒揚掌向外手大指中指相捻、餘指舒揚掌。右手施無畏勢揚掌。右手金剛拳押腰。右手持蓮華。當左乳邊。西南右尊左金剛拳舒堅頭指舒揚掌。右手持三股棒。彌陀西南左尊左手大中相捻。无名指少屈餘指開。左手持鈴押腰。右手持五股。橫當右乳邊。寶生南東左尊左手施無畏勢揚掌。右手持蓮華。當左乳邊。不空北西左尊左手頭中二指並舒以大指捻無名小頭指屈臂仰掌向上。右手持劒。當腰。北東右尊左手施無畏勢揚掌至肩。邊。右手金剛拳押腰。

猶ほ此の次下には大菩薩名號異說事といふ項下に、金剛藏菩薩等の八大菩薩の名號、經軌によりて同じからざることを說き、其の終りに「今塔中所安尊名不詳其所據矣」といひ。又『興福寺濫觴記』五重塔婆の下には、

光明皇后御願。表天地和合君臣合體陰陽不變之理。天平二年四月二十八日發願。自持資運土。夫人命婦。大臣納言。文武百官。四部衆共下杵築基。一歲之內造功終矣。東方藥師如來。脇士日光菩薩月光菩薩南方釋迦如來。脇士文殊菩薩普賢菩薩西方彌陀如來。脇士觀音菩薩勢至菩薩北方寶生如來。脇士金剛幢菩薩金剛光菩薩中尊各御長二尺五寸。脇士各御長一尺五寸。四方各坐像。作者不知。

とある。斯く三說竝べると、名前等も一寸違ふ樣に見へるが、其の實ほやはり同一の

四佛である。俠侍の八大菩薩は、金堂の壁畫も、東寺五重塔のものも、尊名未詳である。唯興福寺塔の八菩薩のみ尊名を明かにして居るが、是れは少々如何はしいものかの樣にも思ふ。

第六章　十一面千手不空羂索等蓮華部諸尊の崇信

一、奈良時代の密教流傳　平安朝の密教、卽ち空海等所傳のものが、大成された密教と云はるべきならば、其の以前に行はれた奈良時代の古密教は、未だ發達の道程にあるものにて、之を完全な密教と稱するとは出來ぬ。兩界曼荼羅なども將來されず、經軌は既に流傳されて居ても、識者の攻撃する所とならなかつた時代、其の當時流布の密教の內容が、完璧を期し難きは、寧ろ當然の結果である。否奈良朝の密教は、密教としては實に疎漏なもので、中尊の大日、阿閦等の四佛、孰れも顯教の佛尊として崇拜せられて居た譯であるから、特に之を密部の尊として說明するのは穩かでないと云ふ人があるかも知れぬ。然し乍ら密教思想の起原を研究するといふ立場からすれば、勢ひ前章の樣な說明を加へざる可からざるに至るは、必然の結果である。

形像等が儀軌の說に合はぬからとて、最初から之を顯教の部に攝屬せしめてしまつて顧みぬと云ふも、決して穩健な考ではない。既に事實上、其の思想の根柢をなし、兩者の差が、單に發達の半途にあると、完全に發達を遂げたものとの別に過ぎぬといふ。其故に予等はこゝに古傳の密教を究明する必要があるのである。

密教專門の諸君から見たら、予等の言議は如何にも亂暴なものと考へらるゝかも知れぬが、學術的研究の上には、宗派といふ觀念や、祖師に對する敬虔の念慮等を去つて、公平な立脚地で議論がして欲しい。祕密宗の門戶は未だ開放された譯ではないが、今後若し此等の祕密の法門が批評的に研究されて、其の祕密の黑幕が切落された場合があるとしたら、如何なる結果を生ずるであらう。一宗を愛するといふ嚴護法城の爲ならば、口傳の教權も必要であり、字句を倒にして置いて、素人を護摩化すも差支はないが、苟も生きた人間の學問としては、そんな事は無用である。此は予の僻目かは知らぬが、眞言の法門は、口傳相承といふ樣な顯露にすべからざる部分が多いと同時に、却て異端も偏執も尠くない樣である。予は此の意味に於て、密教學者が、自から第三者の地位に立つて、其の經教を研究せんことを望むものである。

今世の識者は、密教に就て誤解する所多いと共に、密教學者自身も亦自から悟らざ

る所少なくない。それには猶ほ少し歴史的事實に重きを置て欲しい。若し一往の議論で濟ますと云ふことならば、平安朝以前に密教なしと云ふても濟むかもしれぬ。頗はしく古密教の何のと騒ぎ立つる必要もあるまい。たゞ一歩すゝんで、密教は何時成立したか、儀軌なるものに何程の價値がある乎と云ふ樣な問題になると、感情や信仰で解釋を付せられては甚だ迷惑な譯である。宗教としての眞言祕教が、其の教義に於て、森嚴雄大殆ど各宗に冠たるものあるは、予等とても全然之を知らぬと云ふのではない。併し人間を標準にして、有の儘の事實を述ぶることになると、理想佛なる大日如來は、先づ第一に抹殺されてしまうし、鐵塔相承の談も眞赤な荒唐不稽な一虛談である。『大日經』や『金剛頂經』を正依經典とした祕密佛教は、西紀第七世紀以後の產物で、兩部曼荼羅も、亦同一の運命の下に生れたものである。諸儀軌の如きも、其と前後して成立された。此の點から云へば、密教は佛教中の最年少者である。去り乍ら現在の密教が成立さるゝに至るまでには、永い歴史を有して居るので、忽然と空華の如く生じたとは譯が違う。其の萠芽は既に阿含經中にも認められ、大乘は勿論のこと、純粹の密乘經典も、三國西晉頃から、斷片的な零細な者は譯出されて居た。西晉懐帝の永嘉三年に洛陽に來た佛圖澄の如きは、既に祈禱者の一人であつた。東晉元帝代、帛尸羅蜜多羅は『大孔雀王神呪經』を譯出した。『灌頂經』亦同人の手に依て翻傳せられ、爾來引き續き、『七佛八菩薩所說大陀羅尼神呪經』（晉代失譯）を始め、『觀虛空藏菩薩經』（劉宋曇摩密多譯）、『觀藥王藥上二菩薩經』（同代畺良耶舍譯）等諸大乘經典と共に、幾分づゝ絶えず傳來されたが、六朝末に至つて、其の數は漸く多きを加へた。梁代扶南國の三藏僧伽婆羅は、『孔雀王呪經』二卷を譯出したが、是れは義淨並に不空所譯のものと同翻異譯である。隋闍那崛多、耶舍崛多に至つて、『不空羂索呪經』、『十一面觀世音神呪經』、『大雲輪請雨經』の類を翻傳した。唐になつてからは、更に多くの祕密經典が陸續として傳譯されたのであるが、今密家で依據として居る諸儀軌も、大抵は、此等單行の密典、並に大小乘諸經中の密教的分子に其の源を發して居るので、嚴密に經典批評を遂行すると云ふことになれば、渡邊海旭氏が哲學雜誌第二百三十一、二號に公にせられた『眞言祕經の起原及發達の實例』の樣な有益な研究は、他の諸經軌に於ても、同じ方法を以て、其の論究の歩を進め得べきものと思ふ。唯『灌頂經』、『金光明經』、『孔雀王呪經』等の三五の經典を播讀した丈でも、祕密佛教は如何にして發達しつゝあつたかといふ疑問は、自然に胸中に湧き起るが、孰にしても、『大日經』等が成立さるゝに至るまでには、既に永い時間があつたと云ふことは確かである。

二、大日經の成立と本邦渡來の年時　『大日經』は何時誰人が編纂したか、此は仲々の大問題である。兎も角も餘り古く遡れぬと云ふことは、經自身が示す所の內容に依つて明かである。曼荼羅の成立も、そう古い時代に數へることは出來ぬ。則ち現圖曼荼羅は、善無畏三藏が健馱邏國の金粟王塔下で、空中に示現したものを圖し留めて流傳したのだといふ。東土に胎藏曼荼羅を傳へたのは、善無畏三藏が最初であるが、經といひ曼荼羅といひ、先づ善無畏三藏を去る餘り遠からざる時代に成立したものと見て、大なる誤察はなきことゝ考へられる。支那に於ける眞言法門は、不空三藏に依て大成された形であるが、之を其の儘傳へたのが空海等所傳の密教である。之に就きては、世人が一般に聞き傳へて居る通り、完全な眞言密教は空海等に依て將來されたものには相違ないが、然し奈良朝の佛教界に於ては、唯新傳の不空譯のものが少き許りで、『大日經』、『大佛頂經』を始め『千手千眼經』、『不空羂索經』、『十一面經』等は勿論、其の他『隨求卽得陀羅尼』、『大佛頂尊陀羅尼』、『般若陀羅尼』、『佛頂尊勝陀羅尼』、『如意摩尼陀羅尼』、『大通方廣經陀羅尼』、『八名普密陀羅尼』、『大般涅槃經陀羅尼』と云ふ樣な陀羅尼類は、屢坊間に寫傳されたものである。天平寶字八年、『無垢淨光大陀羅尼經』等の經旨に本づき、百萬小塔の造立せられた事などは、有名な事實である。斯くして奈良朝に祕密佛教の行はれて居たのは隱れも無きことにて、遡つては、役の小角が孔雀法を修し、越の泰澄が十一面法を修したと云ふ傳說なども、强て其の史實を否定する譯には行かぬ。更に尅實して論ずる時は、天平十一年二月十三日の寫經司啓に「合依開元目錄應寫一切經伍仟肆拾捌卷」云々とある。卽ち『開元錄』所載の經典は、當時既に悉く將來されて居た。(是れ此の時代の大藏の全輻である。卽ち『開元釋敎目錄』第十九入藏錄上に「合大小乘經律論及賢聖集傳見入藏者總一千七十六部合五千四十八卷成四百八十帙」とあるものに當る。而して恐らく天平七年四月、玄昉の賫せるもの乎)其の中には、『陀羅尼集經』や、『不空羂索神變眞言經』、『金剛頂瑜伽中略出念誦經』、『蘇悉地羯羅經』等を始めとして、開元以前に翻譯された有ゆる祕密經典は、大抵寫傳されて居たのである。

是等の實狀を知らぬ人は、奈良朝佛教が、密軌に契應する諸尊像等を有するを見て、寧ろ不思議の樣に思ひ、又儀軌其ものゝ性質、竝に此等儀軌の成立、傳翻、將來等の消息も討ねず、密軌と云へば、必ず平安朝空海將來以後のものに限ると早合點して、奈良時代或は其の以前の佛像に對しては、一も二もなく、之は軌前の像であると說明する如きは、甚だ以て疎漏至極な話しである。唯奈良朝に於ては、密軌を有して居て

も、それが廣く一般に實用さるゝに至らなかつた。從て造像、修法、其の他一々の事相に就き、巨細に儀軌の說に照合して矢釜しく言ひ立つる樣になつた平安時代に比較すると、大勢上立派に一時期を劃して居る。此の點に於て佛教美術史に時代的區劃をするのは差支ないが、其の概念を惡用して、奈良時代の遺作の全部を悉皆軌前の像と解釋する如きものあらば、其は非常な謬說である。

三、古密教新密教　却說此處に奈良朝の密教を論ずるに就きて、前章に說明した盧舍那佛竝に阿彌陀等の四佛の如きは、其の思想が、何分にも顯密二教の中間にあるから、純粹の密教の佛尊にして終うのは、聊か困難である。然し乍ら、十一面、千手、不空羂索、如意輪、馬頭等の諸觀音の信仰に至りては、是れは、『法華』、『般若』、『華嚴』、『涅槃』、『無量壽』等の孰れの顯說大乘經典にも、其の名を見ざる所の薩埵であつて、唯密教中の一尊として、單本の諸經軌、竝に『大日經』、『陀羅尼集經』等、純粹の密乘經典にのみ說示され、胎藏界曼荼羅中には、蓮華部院、虛空藏院、蘇悉地院等に列位せられてある。此は毫末の疑を容るゝ必要のなき祕密佛教の諸賢聖で、而して寧樂時代の密教は、此等の諸尊に對する信仰の流布に依て、其の旗幟を鮮明にして居るのである。若し進んで此等諸尊の說明の出で居る諸經軌の根本研究、及び、其等の信仰の由て來る所を搜索すると、普通顯教の薩埵として發達した而已でなく、婆羅門神話の影響をも稟けて居ると云ふことになる。尤も顯教に於ける觀音薩埵には、無論今の樣な、千手等の尊容のものは無い。『無量壽經』、『觀無量壽經』、『觀世音菩薩授記經』、『阿彌陀鼓音聲陀羅尼經』等に明かせる彌陀挾侍の觀音、『大方廣佛華嚴經』入法界品等に說ける補怛洛迦淨刹の薩埵、竝に『法華經』普門品所說の三十三應化身など、直接には何等の交涉關係は見出すことは出來ぬが、隱約の間に、此等の諸大變化觀音の思想を成さしむるに至つた助緣的分子は充分に含まれて居た。其は普門品所說の種々の身を現して各類の機を悉く化益すとの思想が主なるものであるが、斯くて此の菩薩の信仰が、眞言法門に結び付けられたのは、可なり古い時からである。東晉竺難提譯の『請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼經』を筆頭とし、『七佛八菩薩所說大陀羅尼神呪經』にも、既に此の菩薩の神呪が明されてあるが、此の外にも觀音救世の神呪は、猶ほ數多く說かれてある。今『陀羅尼雜集』から其の目次を集めて見ると、觀世音說除熱病邪不忤陀羅尼、觀世音菩薩心陀羅尼、請觀世音自護護他陀羅尼、觀世音說求願陀羅尼。觀世音說治五舌喉塞呪土塗之陀羅尼、觀世音說諸根不具呪草摩之陀羅尼(以上卷第五)觀世音說燒華應現得願陀羅尼、觀世音說散華供養應沒陀羅尼。觀世音說滅罪得願

陀羅尼。觀世音說一切眼痛陀羅尼、觀世音說能令一切顛狂魘魅鬼神陀羅尼。觀世音說除種種怖畏陀羅尼。觀世音說一切腫陀羅尼。觀世音說除身體諸痛陀羅尼。觀世音除卒腹痛陀羅尼。觀世音說中毒乃至已死陀羅尼。觀世音說卒病悶絕不自覺者陀羅尼。觀世音說除五舌若喉基若舌縮陀羅尼。觀世音說除種種癩病乃至傷破呪土陀羅尼。觀世音說呪澗底土吹之令毒氣不行陀羅尼。觀世音說呪藥服得一聞持陀羅尼。觀世音說呪五種色昌蒲服得聞持不忘陀羅尼。觀世音說除病肌生陀羅尼。觀世音說呪土治赤白下痢陀羅尼。觀世音說呪草拭一切痛處卽令愈陀羅尼。觀世音說隨心所願陀羅尼(卷第六)。觀世音。音說滅一切罪得一切所願陀羅尼(卷第七)。觀世音菩薩說陀羅尼呪(卷第八)。觀世音說隨願陀羅尼(卷第九)。觀世音說應現與願陀羅尼。觀世音現身施種種願除一切病陀羅尼。散華觀世音足下陀羅尼。念觀世音求願陀羅尼、觀世音除業障陀羅尼。觀世音陀羅尼。(卷第十)等を列ねて居る。如何に觀音の信仰が陀羅尼宗門と親緣を結で居たかと云ふことは、此等に就ても一目して解るのであるが、其の『請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼經』に依りて修せられた素朴な呪願法は、夫の金光明懺などゝ共に、六朝末から行はれて居た。章安大師の『國淸百錄』に載せる觀音懺法と云ふが卽ちそれである。觀音菩薩三十三應入國土身の說は『法華經』が根基を爲して居るが、それが源泉になりて、一方祕密神呪の法門と結び付きて、混然たる大思想系統となり、遂に諸大變化觀音の思想を生み、其が更に祕密佛敎中に攝入せられて、悲智具足の大悲を顯はすものとして、胎藏蓮華部中に攝屬せらるゝに至つたのである。其の十一面、千手等の思想は、六朝の末期に成立されたものかの樣に考へらるゝが、始めは婆羅門神話等の影響を稟けて單獨に發生したものらしい。之を『大日經』等にては、旣に立派に此等の諸觀音を自家藥籠中の物にしてしまつた。『大佛頂首楞嚴經』等では、三十三應入國土身の說と、諸大變化像の說とを併せ說いて居るが、此の經の說は、『法華』、『大日』兩經所說の觀音を併說して居るとも云ふべきもので、思想發達の上では、『大日經』などの前番に位置すべき、甚だ重視すべき一說である。此の『大佛頂首楞嚴經』などゝは時代は少し下るが、同じく應化身と變化像とを併說せるもとして、不空の譯本中に『補陀落海會軌』なるものがある。千手觀音を本尊とし諸大變化像、三十三身等に就き、一々像容等をも說明して居るが、這種觀音思想の研究に就きては、同尊關係の單本諸密軌、竝に『不空羂索神變眞言經』、竝に『陀羅尼集經』などと相竝んで、珍重すべき資糧の一である。而して此等の諸大變化觀音思想の發生及び發達に就きては、婆羅門神話が充分に其の影響を爲して居ると云ふことは、夙に先輩諸氏の間に

提說せらるゝ所であつて、大村西崖氏の如きも、數年前の『宗教界』に前後十二回に亘り『觀音の神話』と題し、這般の消息に就き、殆ど遺憾なく詳悉せられた。諸大變化觀音の崇拜が、純粹佛教思想上の產物でないと云ふことは、聖典比較研究上、殆ど疑點を挾むことの出來ぬものである。

四、祕密諸尊像の造顯　予は前々章に奈良時代の密教佛尊の遺作として、三月堂の不空羂索觀音と、唐招提寺金堂の千手觀音等を擧げたが、孰れにしても此の當時大藏經の將來と共に、諸密軌も流傳され、同時に亦尊像等も輸入せられた樣である。鑑眞大和上の千手像將來のことは、是れ亦前々章にも一言したが、養老二年に二丈六尺の十一面觀音像を造つた大和長谷寺の開基道明上人は唐僧であつた。法隆寺の九面觀音像なども、唐朝佛であらうとの事であるが、唐招提寺の千手觀音等も、鑑眞將來の千手像が、其の藍本をなして居たのであらう。猶ほ『東大寺要錄』第四には、天平勝寶七年十一月廿一日、天朝の御願に依て、壁千手像一體が造立されたことが記されてある。三月堂の不空羂索觀音は、天平五年聖武天皇の勅により、良辨僧正羂索院創立の際に造立せられたるもの、又東大寺大佛殿建立の後、天平寶字二年七月に至て、四天王と共に二鋪の繡大曼荼羅が作られたが、其の左右の緣の銘文は『東大寺要錄』第八に錄載されてある。此は大殿に懸けられたものらしいが、東は聖觀音、西は不空羂索觀音像であつた。銘文に依ると、其の不空羂索觀音像の高三十五尺、其の闊二十五尺とある。亦以て其の規模の如何に雄大であつたかゞ想像されぬでもないが、前々章に引載した馬頭、千手等の諸觀音の事を書いた要文は、此の繡帳の銘文中の一節である。又天平勝寶四年、實忠和尙は二月堂に於て十一面悔過を行つた。是れ東大寺修二會の濫觴であるが、此と相竝びて恆例として行はれた修正會には、如意輪悔過が修せられたのであつた。又現に正倉院御物中には、密具の一たる三鈷金剛杵等も納められてあるといふ。要するに奈良朝の祕密佛教は、文書の上から云ふても、遺物の上から見ても、充分に現證があるので、何人と雖も到底其の事實を否定することは出來ぬ。而も此の時代に於ける是等密教諸尊の像容は、立派に密軌に依て作られたものであつて、佛師の胸臆から割出されたものでもなければ、偶然の發作でもない。從來は平安以前の造像と云へば、一も二もなく、軌前像であると說明して居たが、實際の上に於ては、奈良朝佛教が有して居た祕密儀軌も、平安朝以後將來のものも、內容には毫末も變りはない。唯奈良朝の密教は、不空所翻の經軌を缺いて居たのと、曼荼羅等の圖像の傳承に不足があつたと云ふに過ぎぬ。此の種の問題に對

する從來の先輩諸氏の見解は、概ね根本的に間違つて居るのである。彼の法隆寺に傳へた御物金銅觀音菩薩像の如きも、一概に軌前像として、汎爾に斷定を附すべきものではなく、恐らくは寶思惟譯の『觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經』か、或は實叉難陀譯の『觀世音祕密藏如意輪陀羅尼經』等と關係を有するものであると思ふ。

上來記述する所、徒に餘談にのみ走りて、本問題に就きては究明する所甚だ尠なく、而も一往茲にて擱筆すべきことになつたのであるが、這種の問題を本式に論究することゝなると、多少の時日と勞力を要する。千手なり、不空羂索なりの一尊を提げ來つても、なほ五頁や十頁では易く完全な說明が出來る譯でもなし、又事實目下の予自身の力の及ばぬ所であるから、今は奈良朝密教は不完全ながら、それが必ずしも軌前の密教と云ふのでは無く、即ち當時の密教も、平安時代の密教も、唯部分と全分との相違で、此等の諸大變化觀音諸尊の信仰は、孰れも皆立派に密軌に依準して造られたものであることを論結するに止めて置く。猶ほ終に臨んで、一言予が世の密教學者竝に同好の諸君に望む所は、唯率直に儀軌だの何だのと喧く前に、猶ほ少し儀軌其者の內容に就き、成立、傳承等に對して、可成嚴密な系統的研究を遂げて置いて欲しい。如何しても其の發達體系につきて充分な討究を盡して置かぬと、自然と其の說明が獨斷又は偏見に陷いる恐れがある。其の教學に於ても、上下三千年、東亞の天地を通じて發達した佛教、其の幾千卷の經教は、例へ雜然たる乍らも、其の間に自から亦條然たる變遷の歷吏を有して居る。單に教學ばかりでなく、其の藝術の上に顯はされたものにしても、亦遡て辿り得べき發達の徑路はある。若し例を出せとならば、觀音の如き色々の變化像が行はる樣になつても、頂戴化佛の事は、彌陀挾侍の時代の面影を殘して居る。同じ軌前の尊として取り扱はれてゐる阿彌陀佛像にしても、法隆寺金堂の壁畫、金銅押出佛、(此兩者は圖像殆ど相同じ)及び法如の淨土變等は、孰れも印相、坐相等を同じうして居る。此等にしても餘り輕々しく見捨て置くべきものではないと思ふ。即ち此の樣なことは、祕密儀軌に一致するからドウ、相違するからコウ等と早合點せずに、弘く一般に涉つて、能く綿密に研究されたものである。

第七篇　長谷寺藏金銅版千佛多寶佛塔像考證

第一章　弘福寺道明上人作の千佛多寶佛塔を論じて長谷寺開創の事に及ぶ

大和長谷寺所藏の金銅板千佛多寶佛塔像は、豐山開創の當初に、弘福寺道明上人が、飛鳥淸御原大宮治天下天皇(天武帝)の奉爲に製作せられしものに係り、竪三尺、巾三尺、厚一寸許のものにて、サ程大きからざる作物なれども、本邦上古の遺物として、屈指の靈像であつて、夙に國寶に指定されてある二ツと得られぬ重寶である。此の像造立の古と作柄の優秀なるとは、我國藝術史上重要な位置を占むるのみならず、佛教教理研究上の問題として、法華一乘の信仰流傳の遺蹤を尋ぬ可く、又歴史上の論議として、豐山長谷寺の草創建立の年代を決定すべき好箇の材料である。仍て予は茲に此の千佛多寶佛塔像を議題として、此の像の圖相が示す所の『法華經』信仰の流露、及び其の思想の淵源竝に變遷を考へ、兼て銘文記載の事實を基礎として、長谷寺創立の年代に論及して見たいと思ふのである。

一、圖相及び銘文の説明　先づ第一に研究すべきものは、此の銅板千佛多寶佛塔像の圖相と、及び圖の下段に鐫刻せられたる銘文である。圖は、中央に三重佛塔を鑄出し、其の上層は舍利、中層は佛釜身、下層は釋迦、多寶二佛竝座の相を表し、又塔の第二層より左右に界線を以て二段に區分せられ、其の下の部分の左右には、各一佛あり、菩薩聲聞相圖繞せる相を示し、其の上の部分は、二の小さき四角の廓内に、前顯の佛菩薩の略相を鏤出せるを除き、餘は一面に小佛像を取付けたり。而して下段三重佛塔の臺座の下に當る所に銘文ありて、いはゆる千佛多寶佛塔造建の緣起文を鐫刻せり。銘文の左右には執金剛神の像あり。(但し右方は缺損して無し)是れ此の金銅板圖像の大體である。

銘文は、十二字詰二十七行三百一十九字あり、其の中初の下の部分四十九字は缺滅して不明である。其の全文は

惟夫靈佛□□□□□□□　立稱已乘□□□□□□□
眞身然大聖□□□□□□□　不圖形表刹福□□□□□□
日夕畢功慈氏□□□□□□　佛說若人起窣堵□□□□□
阿摩洛菓以佛駄都□□□□　安置其中樹以表刹□□□□

上安相輪如小棗葉或造佛□　下如穠麥此福無量㝵以奉爲
天皇陛下敬造千佛多寶佛塔　上厝舍利仲擬全身下儀並坐
諸佛方位菩薩圍繞聲聞獨覺　冀聖金剛師子振威伏惟聖帝
超金輪阿逸多眞俗雙流化度　无央庶冀永保聖蹟欲令不朽
天地等固法界无窮莫若崇據　靈峯星漢洞照恆秘瑞巖金石
相堅敬銘其辭曰
遙哉上覺至矣大仙理歸絶妙　事通感緣釋天眞像降茲豐山
鷲峯寶塔涌此心泉負錫來遊　調琴練行披林晏坐寧杌熟定
乘斯勝善同歸實相壹投賢劫　俱値千聖歳次降婁漆菟上旬
道明率引捌拾許人奉爲飛鳥　清御原大宮治天下天皇敬造

右銘文は已に缺滅の處もあり、頗る難讀の文字もあるが、今覺束なげ乍ら此の銘文を讀み下して見るに、「惟夫靈佛□□□□□□□立稱已乖□□□□□□□眞身然大聖□□□□□□□□□日夕畢功慈氏□□□□□□」是迄は缺字多くして殆ど其の意を得難きも、「日夕畢功」の四字より推察するに、今茲に像か塔かの何物かゞ造功成りたるとを記せしもの、慈氏已下の八字は、恐らくは彌勒の出世に遇はんとの意を述べしものであらふ、「佛說若人起率堵□□□□□阿摩洛菓以佛馱都(馱都は舍利を云ふ)□□□□□安置其中樹以表刹□□□□上安相輪如小棗葉或造佛□(恐らくは像字)下如穠麥此福無量」とは、佛の教說を引き來りて、若人已下數句は造塔の次第を說き、次に或造已下三句は其の功德を記せしもの(第四章第二節參照)「粤以奉爲天皇陛下敬造千佛多寶佛塔上厝舍利仲擬全身下儀並坐諸佛方位菩薩圍繞聲聞獨覺翼聖金剛師子振威」とは、天皇の奉爲に千佛と多寶佛塔を造建せること、及び其の塔の造樣を明せしもの、上厝舍利云々は上段の圖相と相照合して、能く其の意を得て居る。「伏惟聖帝超金剛阿逸多眞俗雙流化度无央」は、聖帝卽ち天武天皇の德を讚歎せしもの、「庶冀永保聖蹟欲令不朽天地等固法界無窮莫若崇據靈峯星漢洞照恆秘瑞巖金石相堅敬銘其辭曰遙哉上覺至矣大仙理歸絶妙事通感緣釋天眞像降茲豐山鷲峯寶塔涌此心泉負錫來遊調琴練行披林晏坐寧杌(杌は機字なれども義意未審し、枕字を配するも中らず、恐らくは梲字歟)熟定乘斯勝善同歸實相壹投賢劫俱値千聖」とは、今點定したる此の聖蹟を永保して、相俱に練行熟定以て賢劫の千佛に値遇し、龍華三會の曉を待たんとの志願を述べしもの、「歳次降婁漆菟上旬道明率引捌拾許人奉爲飛鳥清御原大宮治天下天皇敬造」とは、讀で字の如く道

明上人が歳次降婁(戌)添蕖(七月)上旬に、八十許人を引率して、天武天皇の奉爲に、此處に千佛と多寶佛塔を造建せしことを記したものである。

而して茲に一つ研究を要すべき問題は、此の銘文に所謂多寶佛塔とは、此の金銅板の千佛多寶塔像を云へるものなりや、はた他に別に千佛多寶佛塔造建の事ありしや否やの疑問である。然るに銘文中の上層舍利云々已下の文と、其の上段の圖像とが、全く吻合するよりして、學者大抵此の金銅板を以て、直に千佛多寶佛塔其の物なりと解釋すれど、此は甚だ不條理千萬である。如何に完全に鑄出せられあるにしても、金銅板と佛塔其の物とは、混一にして論ずべきものでない。捌拾許人を引率す云々の語に徴するも、道明が建立したのは、佛塔其のものであつたに相違ない。卽ち道明上人が此の豐山の地をトして、靈山の法華開會に擬して、多寶佛塔等を建立した、塔とは恐らく西崗上の三重佛塔を指すべきもので、銘文中に「日夕畢功」とあるは該佛塔の造建功終たるを言ふたのであらふ。然らば今日の金銅板千佛多寶佛塔像は、何の爲に造りたるものであるかといへば、彼の塔造建に付きて、緣起文を鐫刻するに際し、因に其の塔樣(否靈山淨土の變相)をも圖出せしものでは無からうか。傳嘗原道眞作の『長谷寺緣起文』に「是天武天皇更勅弘福寺道明上人。建精舍於此矣。彼金銅佛像下。有天皇御筆緣起文」と云へるもの、是れ固より今の金銅板千佛多寶佛塔像に擬すべきものに非ざるべけれど、或は又何等かの由緣を存するものであるかも知れぬと思ふ。

二、靈山淨土變と法華曼荼羅

多寶佛の名は、數千軸の漢譯の大藏經中、唯一『法華經』にのみ說示されある佛名である。されば多寶佛塔の造立が『法華經』の說相に本づきて、初めて草創さるゝに至りしものなることは、殊更說明するまでも無きことなるが、今此の金銅板多寶佛塔像は、彼の『法華經』中何卷何品より來れりやと云はゞ、予は同經第四卷の見寶塔品(盈一右三)の說より出でたるものと考ふるのである。頗はしき樣であるが、左に其の要文を抄出する。

多寶塔の起源に就きて

爾時。佛前有七寶塔。高五百由旬。縱廣二百五十由旬。從地踊出。住在空中。種種寶物。而莊校之。五千欄楯。龕室千萬。無數幢幡。以爲嚴飾。垂寶瓔珞。寶鈴萬億。而懸其上。四面皆出多摩羅跋栴檀之香。充徧世界。其諸幡蓋。以金銀琉璃硨磲瑪瑙眞珠玫瑰七寶合成。高至四天王宮。〇爾時。佛告大樂說菩薩。此寶塔中有如來全身。乃往過去東方無量千萬億阿僧祇世界。國名寶淨。彼中有佛。號曰多寶。其佛行菩薩道時。作大誓願。若我成佛。滅度之後。於十方國土。有說法華經處。我之塔廟。爲聽是經故。踊現其前。爲作證明。讚言

善哉。彼佛成道已。臨滅度時。於天人大衆中。告諸比丘。我滅度後。欲供養我全身者。應起一大塔。其佛以神通願力。十方世界在在處處。若有說法華經者。彼之寶塔。皆踊出其前。全身在塔中。讚言。善哉善哉。大樂說。今多寶如來塔。聞說法華經故。從地踊出。讚言。善哉善哉。是時大樂說菩薩。以如來神力故。白佛言。世尊。我等願欲見此佛身。佛告大樂說菩薩摩訶薩。是多寶佛有深重願。若我寶塔。爲聽法華經故。出於諸佛前時。其有欲以我身示四衆者。彼佛分身諸佛。在於十方世界說法。盡還集一處。然後我身乃出現耳。大樂說。我分身諸佛。在於十方世界說法者。今應當集。〇爾時。釋迦牟尼佛。見所分身佛已來集。各各坐於師子之座。皆聞諸佛與欲同開寶塔。即從座起。住虛空中。一切四衆。起立合掌。一心觀佛。於是釋迦牟尼佛。以右指開七寶塔戸。出大音聲。如却關鑰開大城門。即時一切衆會。皆見多寶如來。於寶塔中。坐師子座。全身不散。如入禪定。又聞其言。善哉善哉釋迦牟尼佛。快說此法華經。我爲聽此經故。而來至此。爾時。四衆等。見過去無量千萬億劫滅度佛。說如是言。歎未曾有。以天寶華聚散多寶佛及釋迦牟尼佛上。爾時。多寶佛。於寶塔中分半座。與釋迦牟尼佛而作是言。釋迦牟尼佛。可就此座。即時釋迦牟尼佛。入其塔中。坐其半座。結加趺坐。爾時。大衆見二如來在七寶塔中師子座上。結加趺坐。各作是念。佛座高遠。唯願如來以神通力。令我等輩俱處虛空。即時釋迦牟尼佛。以神通力。接諸大衆。皆在虛空。以大音聲。普告四衆。誰能於此娑婆國土。廣說妙法華經。今正是時。

已上の文を以て、彼の金銅板千佛多寶佛塔の圖相と對照するに、全然相一致して居るのである。即ち塔を挾める四位の佛菩薩像は、他方國土に於ける分身諸佛說法の相を示し、空間全面の佛身像は、分身諸佛來至集會の樣を顯はし、中心の佛塔は、寶塔開顯、二佛竝坐の儀を圖出したものである。而して予の私に考ふる所では、此の圖こそ古書に云ふ所の「靈山淨土變」なるものであらうと思ふ。何となれば、娑婆世界が、釋迦牟尼佛の國土であると云ふことは、大小の諸經に廣說せらるゝ所なるも、靈山即ち耆闍崛山其の地に於て、直に淨土の相を現せしことを說けるものは、『法華經』の此の品を措きて、他に有力なる經證を見出しかぬるからである。(楞云、更に皐見あり第五章第二節に之を略述す)然れば此の靈山淨土の相を圖し表はせるもの、即ち今圖の如きは、靈山淨土變と說明して、決して間違は無いのである。

夫の『觀無量壽經』の十六觀相の文が、後代極樂淨土變の起因を爲せし如く、今『法華經』見寶塔品の說が、靈山淨土變の原本となつた。是れ元より有り得べき事實である。然し道明作の此の變相が、果して道明自身の獨創の作物であるか、或は唐以前に彼地に流布して居た圖相か何かゞあつて其を模倣したものであるか否かは、尙ほ多

少疑を存すべき餘地がある。殊に『東大寺要錄』の說に依るに、道明は唐僧であると云ふことである。此の點から見ても、此の像が純日本人の考案に成る作物でないと云ふ事丈は見當が付くのである。予は阿彌陀淨土變が、觀佛三昧の助緣の爲に製作されあるが如く、今の靈山淨土變は、法華三昧觀法と何等かの由緣を結んで作製するに至つたものではなからうかと推定するのであるが、古來行はれた法華三昧法が、今の圖と一方ならぬ親緣を有することは事實である。試に一二の例證を擧ぐれば、先づ羅什三藏譯『思惟略要法』の中の『法華三昧觀法』(暑六三)には、

三七日一心精進如說修行正憶念法華經者、當念釋迦牟尼佛於耆闍崛山與多寶佛在七寶塔共坐。十方分身化佛遍滿所移衆生國土之中。一切諸佛各有一生補處菩薩一人爲侍。如釋迦牟尼佛以彌勒爲侍。一切諸佛現神通力。光明遍照無量國土。欲證實法出其舌相。音聲滿於十方世界。所說法華經者。所謂十方三世衆生若大若小乃至一稱南無佛者。皆當作佛。惟一大乘無二無三。一切諸法一相一門。所謂無生無滅畢竟空相。唯有此大乘無有二也。習如是觀者。五欲自斷。五蓋自除。五根增長。卽得禪定。住此定中。深愛於佛。又當入是甚深微妙一相一門清淨之法。當恭敬普賢。藥王。大樂說。觀世音。得大勢。文殊。彌勒等大菩薩衆。是名一心精進如說修行正憶念法華經也。此謂與禪定和合。令心堅固。如是三七日中。則普賢菩薩乘六牙白象來至其所。如經中說。

とあり。又『廣弘明集』第廿八(露六一七)に載する陳文帝の妙法蓮華懺文の中にも

今謹於某處。如干僧如干日。法華懺。見前大衆。至心敬禮釋迦如來。多寶世尊。禮妙法華大乘經典。禮普賢菩薩。妙光法師。願多寶如來。從地涌出。普賢菩薩。乘象空來。竝入道場。證明功德。

などゝ云ふて居る。而して後世眞言敎に於て修する法華經法なるものは、夫の六朝時代に行はれた法華懺法の一轉進したるもの、同時に台上に多寶佛塔を居へ、八葉に八大菩薩を布列して建立せる法華曼荼羅は、今の靈山淨土變を、一種の密敎曼荼羅の鑄型に當てはめたものに過ぎぬのである。卽ち『覺禪鈔』諸經部法華法諸流の卷、曼荼羅事の條には、

形色經云。妙法白蓮華經王。八葉蓮華上踊出。寶塔中兩足婆誐鑁。○紺瑠璃地黃金界場。微妙蓮華普散其上。八葉蓮華王。鮮白如雪。葩間三鈷寶塔高妙五百由旬。縱廣正等二百五十由旬。五千欄楯。千萬龕室。塔中師子座上釋迦多寶半跏趺坐。同坐於彼八葉從東北隅右旋布列八大菩薩。初彌勒。次文殊。藥王。妙音。常精進。無盡意。觀音。普賢菩薩。

其の道場觀の條に、

石藏次第云。壇中ニ觀鷲峰山ニ釋迦說ニ妙法ヲ處。頗梨ヲ爲ル地ト。〇妙寶塔ノ中二佛坐ス。內ニ聖賢衆圍遶。八方佛身在ニ樹下ニ。〇供養諸ノ雲海ヲ。又自見ニ己身塔前供養ニ。一一皆如ル是。自己身在ニ釋迦前ニ。聽ニ聞法華經眞實義ヲ。

と記し、又『阿娑縛抄』第七十一法華法本に

次道場觀用ニ定印ニ

軌云。於ニ山峯上ニ。卽當ニ一心專注觀想ニ。釋迦牟尼如來。宣ニ說妙法蓮華經ニ處。頗黎爲ル地。種種妙華遍ニ布其上ニ。寶樹行列開ニ敷寶華ニ。諸枝條上垂ニ妙天衣ニ。微風搖繳出ニ微妙音ニ。其聲諧韻猶如ニ天樂ニ。妙香普薰ニ三千世界ニ。又於ル中想多寶世尊舍利寶塔種種莊嚴。釋迦牟尼如來及多寶佛。於ニ寶塔中ニ同ル座而坐ス。無量菩薩聲聞緣覺天龍八部聖賢衆會。圍繞聽ル法ヲ。周圍八方。釋迦牟尼如來諸分身佛。於ニ寶樹下ニ各各坐ス。於ニ衆寶莊嚴師子之座ニ。乃至無量微塵數佛。多寶塔前。賢瓶闕伽。八功德水。悉皆盈滿。妙寶香爐燒ニ無價香ニ。摩尼寶玉以爲ル燈燭ニ。菩提妙華香。普散ニ諸佛及諸大衆ニ。天諸美饌。芬馥香潔。塗香末香。珠靈瓔珞。供ニ養雲海ニ。諸波羅蜜供養菩薩歌ニ讚如來眞實功德ニ。自見ニ己身ヲ。於ル中供養ニ。於ニ其八方ニ諸分身佛一一佛前。悉皆如ル是奉獻供養。又想自在ニ釋迦牟尼如來前ニ。聽ニ聞宣ニ說妙法蓮華大乘勝義ニ。文

とある。斯くて新古對照して見た所で、其の觀法に於て、圖相に於て、氷炭相容れぬと云ふ程の徑庭はなしい。但し後者に於ては、特に他の諸尊法と共に一種の型に籍めてしまつたものであるから、祕密臭味を帶びて居ると云ふに過ぎぬ。千佛多寶佛塔像と、法華曼荼羅とを比較するに、靈山淨土の景趣は、後者に於て全然沒却せられた觀がある。然し中臺の多寶佛塔、是れ卽ち靈山湧出の寶塔の相であつて、畢竟するに二者共に同一變相であると云ふ判斷に歸着するのである。

茲に注意すべきことは、道明作の多寶塔は、三重佛塔であつて、上層は舍利、中層は全身、下層は竝坐に儀して居るが、法華曼荼羅中の多寶塔は、一重で唯二佛竝坐の一相のみを圖出してある。而して後代云ふ所の多寶塔とは、寧ろ曼荼羅中の多寶塔樣である。話しは餘事に亘るが、後世釋尊の脇侍として文殊、普賢を安じ、其の普賢菩薩が白象に乘じ給へる相を圖するは、恐らくは法華三昧成就の時、普賢菩薩白象に乘じて、其の道場に來至し、爲に證明を作すとの說に本づいたものであらふと思ふ。

三、長谷寺草創年代の研究　簡略ながら金銅板千佛多寶佛塔圖に就きての考は一通り述べ終りし故、進で右銅板に鐫刻されたる緣起文の記事を原として、長谷寺の創立年代を攻究して見たいと思ふのであるが、說明の順序上、最初に古史所載の諸異說を列ね、次に予一箇の卑見を述べよう。

長谷寺の創立に就きては、諸說區々として一定せぬ。今重なる異說を擧ぐれば、

(一)養老五年辛酉(皇紀一三八一)說

『日本紀略』朱雀天皇天慶七年の條

甲辰七年正月九日壬午。夜半風雨。大和國豐山寺長谷寺也。堂舍皆悉燒亡。驗佛同燒失。建立之後二百二十四年。

天慶七年(皇紀一六〇四)より二百二十四年前は、卽ち養老五年である。伴友翁が養老四年と換算せるは未審し、或は滿數を用ひたるものか。

『七大寺年表』養老五年條

建長谷寺願主弘福寺沙門道明。近江國高島郡有浮耀靈木。所至之處必有疾疫。隨水漂流。至山城國宇治河。道明曳之至長谷。無力造佛。專勤禮拜。良久大臣藤原房前申請朝廷。賜稻三千束。令造丈六十一面觀音像。安置之。雷公降臨。摧磐石爲其座矣。

或云。六人部氏云々。佛師稽文會稽主勳。

(二)神龜二年乙丑(皇紀一三八五)說

『古事談』第五神社佛寺篇

長谷寺觀音は、神龜二年三月二十一日庚午供養。行基菩薩爲導師。伴寺者弘福寺僧道明、沙彌德道播磨國住人、二人相共所建立也。下略

古事談の說は緣起記、竝に德道(此の道字、扶桑略記には遣に作る)緣起文を引く、大抵是れ『扶桑略記』の說に同じくして、而も其の略なるものである。唯年號中二年の二の字を異とすべきのみ。

(三)神龜四年丁卯(皇紀一三八七)說

『扶桑略記』第六聖武天皇神龜四年の條其一

三月卅日庚午。供養大和國城上郡長谷寺。請僧六十口。行基菩薩爲導師。義還法師爲呪願。一云。呪願玄昉僧正。夫伴寺者。弘福寺僧道明。俗姓六人部氏。竝沙彌德道。播磨國揖寶郡人。辛矢田部氏。二人相共所建立也。其佛木者。自近江國高島郡三尾前山流出霹靂木也。所至之處。有疾疫災。隨人漂流。遂至大和國葛木郡神河浦。爰沙門道明。沙彌德道。控引此木。企造佛思。有志無力。專勤禮拜。於是。正三位行中務卿兼中衞大將藤原朝臣房前。奏聞公家。依勅。下行大倭國稻三千束。因茲奉造十一面觀世音菩薩像一體。高二丈六尺。雷公降臨。破作方八尺盤石。令爲其座矣。佛師稽主勳。稽文會兩人之作。已上緣起文

此の緣起文は、傳菅公作の『長谷寺緣起文』とは同じでない。則ち彼を新緣起とすべ

くば、此は古緣起と呼ばるべきものであらう。

同上其二

爲憲記云。長谷寺佛木。元者。昔辛酉年洪水之時。自近江國高島郡三尾崎流出橋木也。所至之處。火災病死。卜筮所告。此木祟也者。于時大和國葛木下郡住人出雲大滿。來行此國。傳聞此木凶靈之由。心發願。吾以此木奉造十一面觀音像。昕儲少粮。雇求人夫。然木大人少。徒見欲返。試付綱曳來。輕如走。見人奇駭。上下合力。遂至大和國城下郡當麻鄉。只有發願之心。全無造佛之力。然間。大滿卽世矣。靈木空歷八十餘年。其郡其里。疾病盛發。村人同心。曳寄於長谷川之上。又經三十年。爰沙彌德蓮。有造佛志。養老四年移置峯上。德蓮無力。悲泣積年。朝暮向木。禮拜流涙。於是藤原朝臣房前大臣。俄蒙綸旨。下行造料。仍神龜四年造畢高二丈六尺十一面觀音像。德蓮夢見神人告言。此北峯在大巖矣。堀顯奉立此像。覺後昇見。有方八尺大石。面平如掌。出天平五年德蓮記

緣起等文

同第二十五朱雀天皇天慶七年の條

正月九日夜半。長谷寺燒亡。歷二百十八年。有此火災。佛像同爲灰燼。

天慶七年より二百十八年前は、卽ち神龜四年である。

『東大寺要錄』第六末寺章

長谷寺神龜四年三月廿日供養。請僧六十口。興福寺。元興寺。大安寺。藥師寺。法隆寺。導師行基。呪願義運法師

右寺沙彌道德沙彌道明唐國僧姓六部之建立也。飲高天皇賜稻三千束道明。十一面像高二丈六尺。道德夢有神。指大和國城上郡長谷鄕。土下有大石。掘顯奉立此觀音。夢覺之後。掘得長石八尺。面如掌。仍立其像。天慶七年正月七日燒失之後。但取出頂上佛面一體。切取取出。時別當東大寺長救禪師也。僧興運奉作十一面半金色。增本定二尺奉作也。件願主道德良辨弟子之以彼寺渡進本師良辨僧正。僧正次付實忠。如此代代相承。爲寺家之末寺。東大寺寺僧。次第相繼。寺務執行。而正曆元年。時別當仁和寺眞永之後。興福寺平傳律師。橫押取。件平傳者眞永之父。

注云。道德者。良辨之弟子。道明死去後。道德奉良辨律師。

又云。養老二年。唐僧道明。姓六部。飯高天皇朝廷賜稻三千束。令造觀音像高二丈六尺。安置無處。而雷公降擂盤石。爲其座。神龜四年。沙彌道德造堂。道明造佛。

『今昔物語』第十一德道聖人始建長谷寺語

今昔、世の中に大水出たりける時、近江の國高島の郡の前に大なる木流て出寄たりけり中略其時に僧あり、名を德道と云ふ。此事を聞いて心に思はく、此木□を

聞くに必ず靈木ならむ。我れ此の木を以て、十一面觀音を造奉らむと思て、今の長谷の所に曳移しつ。而るに德道力无くして輒く造奉らむに不堪ず。德道哭々七八年が間、此の木に向て禮拜して、此の願を遂むと祈請す。其時に飯高の天皇自然から此事を聞し食て恩を垂給ふ。亦房前の大臣力を加へ給て、神龜四年と云ふ年造り給へり。高さ二丈六尺の十一面觀音の像也。下略

『元亨釋書』第二十八寺像志

長谷寺者。比丘道明。沙彌德道乃法道仙人也戮力建。下略

『釋書』の說は、大體に於て『扶桑略記』所載の二說を要略したものである。

(四)天平五年癸酉(皇紀一三九三)說

『長谷寺緣起文』(傳菅公作)

天平五年癸酉歲五月十八日。房前臣奉勅付長谷寺。同二十日捧法味調音樂奉開眼供養。請僧百口。興福寺。元興寺。大安寺。法隆寺也。導師行基上人。呪願義遲大德。

右は『長谷寺緣起文』中から、本尊十一面觀音開眼供養の一段を抄記したのである が、同緣起文には、其の他なほ種々の事歷を列ねて居る。其の中主要なる年月を記せば左の如し。

繼體天皇卽位十一年丁酉(皇紀一一七七)洪水。大木從谷流出。
用明天皇卽位元年丙午(皇紀一二四六)挽置大木於八木衢。
推古天皇卽位二十六年戊寅(皇紀一二七八)葛下郡當麻鄕挽移。
齊明天皇卽位二年丙辰(皇紀一三一六)德道產矣。
天智天皇卽位七年戊辰(皇紀一三二八)指城上郡長谷鄕北神河浦挽捨去。
天武天皇卽位四年乙亥(皇紀一三三五)春二月五日、德道得度。
天武天皇(皇紀一三三三—一三四六在位)勅弘福寺道明上人建精舍於此(西谷)矣
文武天皇卽位十年丙午(皇紀一三六六)長谷鄕大木撿案。
元正天皇養老四年庚申(皇紀一三八〇)佛木引上東峯。
同　六年壬戌(皇紀一三八二)七月、房前臣爲狩打立此峰。
聖武天皇神龜元年甲子(皇紀一三八四)正月一日解狀。
同　六年(天平元年己巳(皇紀一三八九)四月八日辰時加持御衣木奉造十一面觀音。
天平元年八月十五日山崩石破。有金剛寶盤石。
同　五年癸酉(皇一三九三)五月十八日觀音像開眼供養。

天平七年乙亥(皇紀一三九五)五月十七日佛殿上棟。
同　十九年丁亥(皇紀一四〇五)九月二十八日堂舍供養。
孝謙天皇天平勝寶五年(皇紀一四〇九)十一月十六日天皇臨幸。

(五)寶龜年中(皇紀一四二〇―一四四〇)說

『日本三代實錄』第二十八淸和天皇貞觀十八年五月の條

二十八日甲辰。勅令『山城國毎年米三十二斛充石淸水八幡宮護國寺。永以爲例』先是。律師法橋上人位長朗申牒偈。大和國長谷山寺。是長朗先祖川原寺修行法師位道明。寶龜中率其同類。奉爲國家所建立也。靈像殊驗。遐邇仰止。請毎年安居。令居住僧等講演最勝仁王兩部經。誓護朝延。其布施供養。用寺家物。大政官處分。依請。

上記諸說中、年代の異錯を別問題として、開創者其ものに就きても、多少記載を異にして居る所がある。即ち

道明上人を開基とする說

『七大寺年表』、『日本三代實錄』

德道上人を開基とする說

『扶桑略記』中第二說(爲憲記所引天平五年德遵記緣起文)

『長谷寺緣起文』、『今昔物語』

道明、德道、戮力して造建せりとの說。

『扶桑略記』中第一說(緣起文說)、『古事談』、『東大寺要錄』

道明佛を造り、德道堂を造れりとの說

『東大寺要錄』又說

の如き、四種ほどもある。又同じく開創といふも、其の事實の記載に於て、多少趣きを異にして居るものがある。即ち第一には單に本尊十一面觀音菩薩の造顯竝に之が開眼とするもの(多く是の說に依る)。第二には先づ佛像を作り、後に堂舍を建て、慶讚供養せりと明す。例せば『東大寺要錄』の又說には、像は養老二年唐僧道明の造る所とし、堂は神龜四年德道の建つる所と明して居る。要するに諸說區々として、何れを甲とし何れを乙とする譯には行かぬが、其の創立の次第としては、先づ像が出來、後に殿堂僧坊等が出來、順次供養せられたるものと推測することを得る。而して自分一箇の考としては、『扶桑略記』所引の古緣起文、竝に『東大寺要錄』の記事あたりを標準として說明したら、大した過誤はなからうと思ふ。

長谷寺の草創の年代に就きて、主要なる史傳の說は、略上記の如き次第であるが、然

らば今千佛多寶塔銅版銘文が、長谷寺草創當時の史料として、如何なる證券を爲すであらうか、道明が此の金銅銘文の作者であり、又德道上人の先輩として同時創立の協贊に與つたことは事實であらう。然し乍ら觀音像造顯の事實より塔像製作の年代を定めんとし、又は長谷寺開創年代よりして、此の銅板の製作年代を決せんとする如きは、恐らくは早計と云はざるを得ぬ。其の故は多寶塔の造建と、十一面像の造立とは、別に其の間に何等の關係史實を認め得られぬからである。

四、千佛多寶佛塔銅板製作の年時（伴信友翁の所說を駁す）　弘福寺の道明上人が、豐山の地を點して天武天皇の奉爲に多寶佛塔を造建した。此は長谷寺の開創に無關係とは云へぬが、本尊十一面像の造建とは、全く史的交渉がない。否實は直接關係が無い。從て該銅板銘文の記事を以て、直樣長谷寺創立の年代問題を解決せんと企つるは、固より無謀な注文である。然るに此の重要な事項に就きて深き注意を拂はず、一途に道明が長谷寺開創に關係ありと云ふ所から、此の兩者を混同して結び付けて論斷せんとするものであるから、どうしても其の說明が徹底しない。即ち伴信友翁の所說の如き牽强附會の說を爲さねばならぬことにもなるのである。

金銅板多寶佛塔像の製作年代等を決定せんとするには、先づ其の銘文に考へて、造建の目的其の他に就きて、十二分の考案を廻す必要がある。若し信友翁の說によると、翁は第一に此の金銅板の多寶佛塔圖を以て直に實物の多寶塔其物なりとし。第二に、銘文の首九行の處は佛像を造りたる由を記したりげに見ゆとし、第三に此は道明が天武天皇追薦の爲に造りたる物と推定せられたれど、是等の考は、悉く當を得て居らぬ。抑も此の銅板の圖像は、靈山淨土變として、其の中に多寶佛塔圖をも存在すとは云ひながら、其を銘文に記せる多寶佛塔と早合點してはならぬ。即ち銘文の文を熟讀するに、道明が造立したのは、明かに三重の多寶塔其ものである。信友翁は首九行の文、佛像を造りたる由に見ゆと云はるれど、像に非ずして寧ろ塔を以て主なるものとせしこと、初九行の文字中にある表刹の二字、並に銘文全體の文脈から見て明瞭である。換言すれば「奉爲天皇陛下敬造千佛多寶佛塔」の文、「鷲峯寶塔涌此心泉」の文、及び「奉爲飛鳥淸御原大宮治天下天皇敬造」の文は、實に明々白々道明が天武天皇の奉爲に三重の多寶塔を造建したことを告白して居る。されば苟も此の銘文を讀みたらんものは、直に其の事實を認め得るのである。若し之を便宜『長谷寺緣起文』に依て說明することゝならば、是れ寧ろ本長谷寺草創の事實に當るのである。

此豐山有二名。一者泊瀨寺。又云本長谷寺。二者長谷寺。其差別者。十一

面堂西有レ谷。自レ其西岡上有二三重塔並石室佛像等一。是泊瀬寺也。得レ號者。泊瀬河上瀧藏現坐。其所勝地。而往古以來諸天影向砌也。脇二彼社一在二天人所レ造之毘沙門天王一。古人喚爲二天靈神一矣。雷取登レ空之時。御手寶塔流而泊二此山麓三神里神河瀬一。武內宿禰卜筮曰。斯授二天德一表二地榮一也云云。則自手崇而北峯西北隅納レ之。仍改二舊號三神將一。泊瀬豐山一矣。其後經二三百餘歲一。道明聖人移二之石室一。自レ爾以降繁昌有二於此山一。故提二里名一。尙安二寺號一矣。是天武天皇更勅二弘福寺道明聖人一。建二精舍於此一矣。彼金銅佛像下有二天皇御筆緣起文一。其聖人六人部氏人矣。次谷東岡上有二十一面堂等一者。長谷寺也。從二大悲利生之谷長一而稱者。專答二德道聖人之願一。而北家曩祖房前臣。奏二元正天皇一。奉二聖武詔勅一以所二建立一也

『長谷寺緣起文』が、菅公の作であるか否かは、予も疑を挾んで居らぬ譯では無いが、此邊の史實の記載は、比較的今の金銅版銘文の說に契應しで居るのである。信友翁は『三代實錄』の長朗の申牒を本として、寶龜年中(特に元年と定む)說を主張せらるけれど、其れには他の史料全部を否定し得る程の證券が無くてはならぬ。しかし今の銅版の銘文は、翁の解釋する如き都合のよい傍證たる譯には行かないのである。から、結局翁の說は成り立たぬのである。今『東大寺要錄』の說に依るに、德道は道明の後輩、而して道明寂後、德道が良辨僧正に此の寺を付屬したと云ふ史實年代より推考するも、道明が大抵天武天皇時代頃の人なりしは事實として認むることが出來る。(尙ほ養老寶龜の頃迄生存し居りて十一面像造建の事業に携はりたりと考ふるも大したる妨げなかるべし)。而して道明が天武天皇の奉爲に三重多寶塔並に今の金銅板等を造立した年代と云へば、銘文の文相より見て、天武天皇御在世となすべく、歲次降婁漆菟上旬より勘算する時は、天武天皇卽位第二年甲戌(皇紀一三三四)或は同第十四年丙戌(皇紀一三四六)の兩說、孰れかの年の七月上旬であらふと思ふ。之を要するに、予は本長谷寺三重佛塔造立者を道明とし、後長谷寺十一面觀音像の造像者を德道上人とし、三重塔は天武天皇の奉爲に道明上人の創建する所なりと說明すると共に、今の右佛塔造建の次第を記せる緣起文を鐫刻せる金銅板の靈山淨土變も、塔と同時に製作せられたるものと推定するのである。

第二章　長谷寺創建年代並に千佛多寶塔銅版銘に關する喜田博士の說を駁す

文學博士喜田貞吉氏は、去月二十二日發行の佛敎雜誌『妙智力』第三十七號に『長谷寺創建と千佛多寶塔銅版の銘』なる一文を公にし、長谷寺創建年代並に千佛多寶塔

銅版に關する新研究を發表せられたり。氏の所說によれば、養老五年長谷寺成り、翌六年多寶塔建立せられ、神龜四年に十一面觀世音像成りて盛なる開眼供養行はれたるものなるべしとするものにして、同時に今の千佛多寶塔銅版の製作も、彼の養老六年壬戌の歲にあるべしとの結論を得らるゝなり。引證該博にして論議巧妙を極め、殆ど至理を竭せるの觀あり。されど黴て之を考ふるに、氏の斷案は不幸にして予の卑見と一致せざるもの多し。予曩に大正元年九月豐山大學密敎研究會發行の『密敎』第二卷第三號の誌上に『弘福寺道明上人作の千佛多寶塔を論じ長谷寺開創の事に及ぶ』と題して、之に關する一往の管見を披陳したり。當時予は『諸寺緣起集』所載の『長谷寺緣起』を參考せざりしを以て、其の後多少の補記を試みんと欲して、今日まで未だ其の意を果さゞりき。こゝに喜田氏の論文を讀むに及び、圖らずも之につきて一言せんとする思念起れり。但し喜田氏の高說と予の卑見とは全然相容れざるものあり。從て予が卑見を開陳すれば、自から喜田氏の論議を相駁することとなる。敢て非禮を顧みず、左に卑見の一端を記して、喜田氏竝に世の同好諸君の示敎を仰がんと欲す。

予は說明の順序として、第一に本長谷寺と後長谷寺との別を論じ、第二に觀音像竝に堂舍造建の年代を論じて、道明對德道の年齡の關係を考へ、第三には千佛多寶塔銅版銘文の記事を證として、道明の多寶塔造立の事實が、必ずしも像竝に堂舍の建造と史的關係を有せざるものなるを辯じ、併せて右多寶塔創建の思想を論じて、喜田氏の誤解を明にし、最後に如上の論證を基礎として、多寶塔竝に同銅版の寧ろ天武天皇當時の作とするを穩當なりと結論せんと欲す。去り乍ら論證に用ゆべき史料としては、予は別に新に珍貴の材料を得たるには非ず。且つ大體の說明は、既に『密敎』誌上に縷說せるを以て、此處には、一途に喜田氏の論文の要所を牒し、簡明を主として、予と所見を異にする所を明記すべし。

第一　本長谷寺と後長谷寺との辨別を明にし此の二者を混同せんとする喜田氏の說を駁す

長谷寺とは、本後兩者を合したる總稱なることは云ふまでも無きことなれど、此の本後の長谷寺の起原が、道明の本長谷寺、德道の後長谷寺造立に本づくか、將た此の二者の別は後人の假託に出づるものなるかとの言議は、やがて、長谷寺の創立者竝に創建時代に關して異論の分岐點となる所なり。卽ち本後の二者が最初より別なりとする時は、其の開創者の如きも、自然二者各別なりと判せざる可からざるも、若

し其の當初に於ける二者の別を認む可からずとせば、其の結果は、喜田氏の説の如く道明德道共同の造立とし、而も彼の多寶佛塔の造建をも、强て觀音像竝に堂舍建造の一部と解せざる可からざるに至る。但是れ恐らく事實の眞相に非ざるべし。

喜田氏の曰く、「こゝに辯せざるべからざるものあり。前記障子の文に所謂本長谷寺なる三重塔及び石室佛像は道明之を造り、後長谷寺なる十一面堂舍等は道德之を營むとあること是なり。此の事必ずしも兩人協力營造といふことゝ矛盾せず。何となれば本後兩者を合して之を長谷寺と稱し、兩人之を建立するに當りて、其の重なる所を分擔せりとも解すべければなり。然るに菅公執筆と稱する緣起は則ち云ふ、天武天皇道明に勅して本長谷寺を建て、養老、神龜の頃に至りて、德道後長谷寺を建つと。斯くて兩者を全然別物とし、道明、德道建立の古記を個々別々に存立せしめんとす。事は則ち巧なるに似たれども、所謂後長谷寺なる十一面觀世音の靈像が、亦道明によりて成されたりといふ七大寺年表の記事と相容れざるを如何せん。天武天皇朝に長谷寺が造られたりとの事、はた道明が其御代頃の人なりきとの事は、菅公執筆と稱する緣起の外、一切の古緣起古記錄の毫も言はざる所なるのみならず、七大寺年表等、最も信すべき古記錄には、道明が同じく養老神龜の頃に事を成せしを明言する以上、所謂本長谷寺なるものが、道明によりて天武天皇朝に營まれたりとの事は到底信ずべからざるなり。本長谷寺の名は後世に現存す、文明元年八月二日夜長谷寺炎上す。大乘院寺社雜事記に其の燒失の建物を列記したる中に、本長谷寺、同く三重塔等の目あり。而も是右の緣起によりて唱へ出せし說なるべく、必しも以て證となし難し。長谷寺の名の古く物に見ゆるは、前引七大寺年表養老五年條、扶桑略記神龜四年の條を始として、續日本紀の神護景雲二年條には、天皇が長谷寺に幸せられし事を載せ、靈異記には、沙門辨宗が泊瀨上山寺の十一面觀世音に祈請して現報を得たることを錄す、共に稱德天皇の御代なり。而して是等の古書皆共に長谷寺に本後の別あるを言はず。思ふに、其の本後兩寺の別を云ふは、其の創建者に道明德道二人の傳あるが爲に、其の雙方を存立せしめんとして起れるものにあらざるか。要するに長谷寺は、扶桑略記所引緣起の如く、養老神龜の頃、道明德道等によりて創建せられたりといふを正しとせん」と。之に依るに、喜田氏の意見は、飽迄本後兩長谷寺の別を認めず、道明、德道共同の創造なりと定めんとするものにして、說は巧に立てられたりと雖も、氏は最初より强て自家の新說を立證せんと企てられし爲め、自明の文證に對して、故意に自分に都合善き解釋を下されたる點なきに非ず。例せ

ば『長谷寺縁起文』を貶黜し乍ら、『諸寺縁起集』所載の『菩薩前障子文』の明文を解釋するに、此事必ずしも兩人協力の營造と云ふとゝ矛盾せずと云ふに至ては、曲解も亦甚だしと稱すべく、而も其の下に『大乘院寺社雜事記』の文を援引して、本長谷寺の名の後世に存すと證せる如き、予等不幸にして遂に其の何の意たるを解することを能はざるなり。予が說明する迄もなく『諸寺縁起集』は、見行の本は康永四年(皇紀二〇〇二)の古寫なるも、其の原本は、更に之を清水寺上綱清範(長保二年寂皇紀一六六〇)の筆記なりと傳ふ。此の說固より信ず可からずとするも(或は多分の竄入ありと解釋するも)孰れにしても其の內容の比較的古材なるは疑ふ可からざる事實なり。而して予今『諸寺縁起集』の長谷寺關係の諸縁起と、彼の傳菅公作の『長谷寺縁起文』とを對讀するに、後者は前者を原材として潤色加筆せしものに過ぎざるとは事實なり。何ぞ喜田氏の如く二者各別に相竝べて都合善き解釋を下し得るものならんや。且つ喜田氏は、何の理由も無く『長谷寺縁起文』を蔑視せらるれど、唯だ之を菅公作とすることは聊か躊躇せざる可からずと雖も、既に此の縁起を菅公作として傳ふることは中世鎌倉時代より爾り。即ち正和三年(皇紀一九九三)二月二十八日橘寺法空上人の撰出にかゝる『聖德太子平氏傳雜勘文』上一に、北野天神御作として、此の縁起文を引載せり。

而も其は本長谷寺云々の明記ある所たり。然らば則ち此の『長谷寺縁起文』を措きて煩はしく足利末期の史料たる『大乘院寺社雜事記』の說を尋ぬる如きは、寸毫も其の引證の必要なきものなり。

予は喜田氏と同じ文證を引據とするも、寧ろ本後長谷寺の二者を認め、同時に西崗の三重佛塔と、東崗の十一面菩薩竝に堂舍の造建との間に、多少年代の相違あることを認めんとするものなり。其の證據卽ち左の如し。

第一『諸寺縁起集』所載『長谷寺縁起』中の菩薩前障子文

菩薩前障子云。於長谷寺有二名。一本長谷山寺。二者後長谷寺。其差別者。十一面堂西方有谷。其谷西岡上在三重塔幷石室佛像等。是本長谷寺也。是弘福寺僧道明建立也。彼石室佛像下在之縁起文。其道明。六人部氏人矣。谷東岡上在十一面堂舍等。是後長谷寺也。依沙彌德道之願。藤原北臣未拜大臣時。奏聞朝廷奉勅建立也。其德道播磨國揖寶郡人。辛矢田部造米麿也。後名子若。初來着斯寺。生長之後。成私度沙彌。驗殊異也。彼本長谷山寺。雖有少堂舍等。無修理人。今倒失。石室佛像等。只在木下。其三重塔者。十一面寺之所□治今尙有也。十一面菩薩本縁起者。高市郡人。八木少井門子之夫居住近江國資賀郡大津村人也。少井門子。夫死以後。爲父母幷夫爲奉造佛像。從近江國高

島郡三尾前山流出霹靂之木伐取挽致八木衢而依彼木祟□□□并父母死去矣。爰沙彌德道長谷里古老刀禰向請取件木長谷山東岑挽置經多年雖求造佛像難得之。然間藤原氏北臣被大和國班田勅使具披申造佛像勅使親見佛料木奏聞聖武朝廷申下官物奉爲聖朝造立斯像山寺也子細之狀具在障子文也因茲知本緣也。

此の文を讀みたらんものは、明々白々本後兩長谷寺の別を認むべし、喜田氏の如く自由の解釋を許さゞるなり。文中「彼石室佛像下在之緣起文」とあるは、現存の千佛多寶佛塔銅板の銘に當れり。

第二『諸寺緣起集』所載沙德道上表文奥書

附『扶桑略記』所引爲憲記文

天平五年九月十一日　後長谷寺沙彌德道

此の沙彌德道上表文の事に關して、喜田氏は實に左の如く云へり。「天平五年の德道上表の文と稱するものに至りては、過去の因緣を說く頗る詳なるに拘はらず、自己の出家の次第を述ぶる前記障子文と稍盾矛あり(中略)現存長谷寺緣起の最も古しと認むべきは、阿闍梨皇圓の撰にかゝる扶桑略記收むる所のもの是れなり。文に曰く、件の寺は、弘福寺僧道明並に沙彌德道二人相共に建立する所なりと。かくて本長谷寺後長谷寺の別を云はず。同書又爲憲記を引きて、長谷寺本尊の木像は、沙彌德蓮が養老四年に著手し神龜四年に成ると爲すところは、天平五年德蓮記緣起等の文に出づとあり。德蓮蓋し德道と同人にして、其の天平五年德蓮記と云ふものは、前記諸寺緣起集所收の德道の上表なるべく、古くより道を蓮と誤り寫しゝ本ありしと見えたり」云々と。尙ほ長谷寺創建年代を考證せる下には「さて長谷寺創建の年代に就きては、前記天平五年德道上表と稱する書に、養老四年靈像に著手し、神龜四年になるといふものはほゞ從ふべきに似たり。」と述べられれり。然し乍ら喜田氏は實際に於て巨細に此の德道上表文を讀み居られざる證據には、此の上表文中の字眼なる「後長谷寺沙彌德道」なる「後」の一字を讀み落されたり。此の間に「後」の一字を讀み落されたる喜田氏の論證は、畢竟して沙上の樓閣に過ぎず。當然の結果として全部根底より瓦解さるべきものなるべし。卽ち後長谷寺の名は、前記『菩薩前障子文』と照應して、此の上表文が後長谷寺十一面觀音幷に堂舍建立の緣起文なるとを明示するものなり。且つ此の上表文の一節が『爲憲記』中に抄出せられ『扶桑略記』に援引せられあるに依れば、假令其の記載は略されたりとも、後長谷寺の名は『扶桑略記』援引『爲憲記』の說の承認する所と見て差支なかるべし。

第三『長谷寺縁起文』

『長谷寺縁起文』は、前記『諸寺縁起集』所載の『菩薩前障子文』、天平五年九月の『沙彌德道上表』、及び神龜六年三月の太政官符等の記文を案配して潤色布演せりと認むべきものにして、前引『障子文』等を離れて別に有力なる一證として獨立すべきものに非ざるべしと雖も、既に鎌倉時代若しくは其の以前の製作に係る古緣起たるは顯然たる事實にして、假令其が菅公作に非ざるにせよ『古事談』、『元亨釋書』等より數等上位にある古史料なり。

以上三證は主として本長谷寺、後長谷寺の明記あるものを擧げたり。次に傍證としては、明瞭なる記文はなきも、而も其の意味を含めるものに就きて一言せんに、先づ確乎として動かす可からざるは、彼の西崗三重佛塔等造立の緣起文たる

千佛多寶佛塔銅版の銘文

なり。此の銘文は、道明が天武天皇の奉爲に『法華經』所說の靈山の淨土に擬して、千佛多寶佛塔を造建せることを記せるものにして、東崗なる大悲十一面觀音菩薩の建立と、直接には史實的連鎖關係なきものなり。換言すれば、此の緣起文は、明に十一面觀音竝に堂舍建立の願文に非ずして、唯西崗三重塔幷に石室佛像創建の次第を記せるものなり。刻實して論ずれば、全然彼の『菩薩前障子文』の記事の一部と一同なるものなり。

次に喜田氏は、『續日本紀』、『日本靈異記』を引きて、文中に本後の別をなさゞるが故にと云ひて、上記『障子文』等の說を否定せられんとすれど、是れ要するに牽强付會の言なり。長谷寺の名は總名なり。故に『菩薩前障子文』にも、明に「於長谷寺有二名」云云と記せり。泊瀨山上の寺に詣して、其の西崗三重塔等を指す時、或は本の長谷寺、其の東崗十一面堂を呼ぶ時、或は後の長谷寺の名あるべきも、通稱は單なる長谷寺なること諸文一致する所なり。

又次に喜田氏は『扶桑略記』に「夫件寺者、弘福寺僧道明、俗姓六人部氏、幷沙彌德道、播摩國揖寶郡人、辛矢田部氏、二人相共所建立也」なりと云へるに付き、文中本後の二字なきを咎めらるといへども、元と長谷寺一山中、其の西崗の三重佛塔は道明之を建て、十一面堂は德道主として(或は道明發願し、德道其の志を襲へるか)之を造建せり。換言すれば、道明の三重塔建立に開基して、德道の十一面堂造建を以て大成せるものなり。此の事業に就きて、今の如き章句を用ゆるも、決して此の道明等が各自塔寺建立の事實と矛盾すとは斷ずべからざるなり。

要するに、本長谷寺、後長谷寺の名に就きても、既に文證あり、又た理證あり。喜田氏は強て之を否定せんと勉められたれど、其は結局無理なる解釋なり。虚心平氣に此等諸文を考察したらんには、道明が三重佛塔造建の事實、德道が十一面堂建立の由緣等、胸中自から分明なるものあるべし。

第二　十一面觀世音菩薩像造立の年代を論じて道明對德道の關係に及ぶ

西圓の千佛多寶塔等(謂ゆる本長谷寺)が、道明の創建なることは、緣起文たる銅版の銘を始め、證據確として動かす可からず。然るに東圓の十一面觀世音菩薩竝に堂舍等(謂ゆる後長谷寺)の建立に就きては、諸說區々として必ずしも一準ならず。但し之に關して、喜田氏は說明して曰はく、「斯の如く或は其の開基を主として德道(或は德蓮)一人に歸し、或は道明、德道の兩人共同の事業となし、或は道明は本長谷寺を造り、德道は後長谷寺を造ると區別するなど、諸說一ならざるが中にも、三代實錄貞觀十八年五月條に見ゆる律師長朗の申牒には、大和國長谷寺は、是れ長朗が先祖川原寺(卽ち弘福寺)修行法師位道明が、寶龜年中其の同類を率ゐて、國家の奉爲に建立する所なりとありて、之を道明一人に期し、殊に其の年代を寶龜年中の事とす。其の寶龜年中といふは、曩に伴大人の據りて主張する所なれども、其の誤たるは明にして、

こは後に言ふべし。之を道明一人に歸することは、現存銅版銘に、道明八十許人を率引し、飛鳥淨御原大宮治天下天皇の奉爲に敬造すとあるものに一致して、最も信ずべきものなりとす。七大寺年表及び僧綱補任(僧綱補任は七大寺年表をもとゝし、之に補筆書き繼ぎせる者なり)記する所、亦道明一人の名のみを擧ぐ。以上の諸書よりは稍後のものと認むべき古事談、元亨釋書等が、道明、德道兩人に歸し、今昔物語が德道一人の名を擧ぐるが如きは、何れも前記諸書に基づきて、或は之を抄錄し、或は之を祖述敷衍せるものなれば、其の數如何に多くとも、敢て前記諸書の說に輕重をなすものにあらざるなり。さて長谷寺創建の年代に就きては、前記天平五年德道上表と稱する書に、養老四年靈像に着手し、神龜四年に成るといふもの、ほゞ從ふべきに似たり。七大寺年表には、養老五年長谷寺を建つ、願主弘福寺沙門道明とし、僧綱補任亦是による。朱雀天皇の天慶七年に此の寺燒亡す。日本紀略に之を記して、建立の後二百二十四年となす。實に養老五年を以て、此の寺建立となすなり。然るに同一事件を扶桑略記は二百十八年を歷て此の火災あり、佛像同じく灰燼となるとあり。二百十八年前は卽ち神龜四年なり。蓋扶桑略記に燒失せる佛像に重きを置き、其の成れる神龜四年より數へて二百十八年となせるなり。卽ち知る、養老四年佛像彫刻の事

に着手し、翌五年寺先づ成り、神龜四年に至りて佛像成りて之を安置せしものなることを。此の年三月行基を導師とし、僧六十口を請じて長谷寺に供養せしことは、七大寺年表、扶桑略記等に見ゆ。當時の事情以て見るべし。果して然らば長谷寺の創建は之を養老五年となすべく、其の本尊佛の竣工は、之を神龜四年なりと斷ずべし。而して貞觀年間に律師長朗が上表せる文の中に、寶龜年中道明之を建立すとある寶龜が、神龜の誤寫、又は長朗記憶の誤に出でしは明かなりとす」と。喜田氏の此の說明中、長谷寺の開基を道明一人とするに就き、銅版の銘、竝に『七大寺年表』の說を以て立證せられたれど、此の場合、銅版の銘と、『七大寺年表』の說とは、同一に之を取扱ふべき史料に非ざるべし。何となれば、銅版銘は、純乎西崗三重塔の緣起文にして、十一面堂造立と何等關係なし。然るに『七大寺年表』等に云ふ所は、東崗十一面堂の造立を云ふものなるを以て、其の事實に於て大に差あるが故なり。思ふに長谷寺の開基を豐山三重佛塔の創建者道明とするは、義に於て妨げなし、又十一面觀音菩薩の造立亦道明の願意に出で、德道之を襲ひしものなるやも知れずと雖も、十一面堂の建立を以て、直に三重塔の創建に一同す可からず。何となれば是實に元來別箇の事實なり。而して道明の事蹟は或は前後二事實共に關係せるやも知らずと雖も、德道に至つては、唯後の一事に關係し前事に及ばず。卽ち本長谷寺三重佛塔の造立に關しては、德道が關係せる史實史料は絕無なり。此の意味に於て、金銅版銘文と『七大寺年表』とは、全然別箇の事實を記せる別箇の史料なればなり。

東崗十一面觀音竝に堂舍が、養老神龜の交に建造せられしことは、兎も角も動かす可からざる事實なるべし。其の間諸說區々として一定せずと雖も、小異を捨て大同に就くに、大體に於て『菩薩前障子文』竝に『天平五年德道上表文』の記事等、略其の事實に近きことを記せるが如し。而も其の造營の任に當れるは、主として德道其の人なりしなるべきか。但し茲に一考すべきは『七大寺年表』の記事なり。卽ち同書養老五年の條には「建長谷寺願主弘福寺沙門道明。近江國高島郡有浮耀靈木」云々とあり。此の記文聊か曖昧なり(且文中道明の造像の事蹟を記しつ、而も一說として或云六人部氏云々とあり。其の記事錯謬あること一目して知るべし)既に道明が、長谷寺を建てしと明言し乍ら、直下に注記する所は、十一面觀音造建の緣由なり。然るに今喜田氏は、此の文を德道上表の文に連結して、養老四年に佛像彫刻の事に着手し、翌五年寺先づ成り、神龜四年に至りて、佛像成りて之を安置せしものならんと說かれたるも、是れ畢竟して無稽の說なり。『七大寺年表』に云ふ「建長谷寺」の語が、漠然と像の

造立を寺の創建に引き直して記載せるものなることは、前後の文並に他の史載に徴して略明了に推察し得らるゝ所なり。假令建寺の字句ありとも、之を率直に堂舍の建造と解する如きは、餘りに陋なり。予、元より『七大寺年表』を以て相當に有力なる古記錄たることを認む。但し今長谷寺の記事の如きは、要するに概略的の一篇の記文にして、之に對して强て嚴正なる解釋を加ふべきに非ざるべし。若し一歩退きて考ふれば、十一面像の造立、卽ち長谷寺(東岡後長谷寺)の開創と見得るが故に、「建長谷寺」と云ふも、「造十一面像」と云ふことゝ同じ事實の記載となるべく、從て『七大寺年表』の如き筆意も生じ來るべし。又道明が泊瀨山寺の開山たる因緣、並に德道の先輩たる關係より、彼此錯綜して、通じて其の開創の功を道明に歸することあるも、必すしも不審には非ざるなり。

而して予は此には一名は後長谷寺と呼ばるべき十一面觀自在菩薩並に堂舍の建立に就きては、單に養老神龜の間に成れりと云ふに止め置くべし。去り乍ら其の建立者の說明に於ては、德道對道明の關係に就きて一言し置くの要あり。蓋し此の寺の創造者を、或は道明一人とし、或は德道一人とし、或は兩人共同とする等、諸說紛然たることは旣に別に說明するが如し。然らば其の中何の說に依準すべきやと云ふに、予は大體に於て、大抵德道一人の功なりとする說に依らんと欲するものなれど、解釋の奈何に依りては、他の二說も各一理あり、無下に取捨すべきものに非ざるべしと思考す。喜田氏曰く、「之を傍例に徵するに、大化年間、宇治橋の成れる、續日本紀道昭傳には之を道昭の功に歸し、而も宇治橋修造碑の文には、大化十師の一なる道登の業とす。碑銘は當時の者、固より從ふべく、續紀の記事亦重ずべし。當時道昭年十八、率先して業を成すべくも非ず。蓋し道登の下に自ら事に當りしかば、當時の碑銘には道登の名のみを錄し、後に道昭更に有名になりしかば、續紀は是によりて道昭を傳するに當り、其の功を道昭に歸せしものなるべし。されば弘安の官符に元興寺の道登道昭二人之を建立すと爲すもの、其の實を得たりと云ふべきか。此の傍例を以て、長谷寺建立の場合を考ふるに、蓋道明、德道兩人の功なるべく、當時道明長者なりしかば、或は七大寺年表の如く之を道明一人に歸し、其の實は德道主として事に當りしかば、或は爲憲記の如く德道一人の功と爲すの記錄も存せしものとすべし。されば之を道昭とするは、主として當時の記錄にかゝり、德道に歸するは、寧後出のものと解せらる。而して扶桑略記所引の緣起、及元亨釋書等に、兩人共に作るとせるものは、弘安の官符に道登道昭二人宇治橋を建立すとせるものに比すべきか」と。此の

說は一往尤もらしく考へらるゝされど傍例は遂に傍例にして是れ要するに想像の說に過ぎず。尙ほ再考の餘地あるべし。予今私に『東大寺要錄』第六末寺章を案ずるに、

長谷寺（神龜四年三月二十日供養。請僧六十口。興福寺。元興寺。大安寺。藥師寺。法隆寺。導師行基。呪願義運法師）

右寺沙彌道德沙彌道明（唐國僧姓六部）之建立也。飯高天皇賜稻三千束道明。十一面像。高二丈六尺。道德夢有神。指大和國城上郡長谷鄕。土下有大石。掘顯奉立此觀音。夢覺之後。掘得長石八尺。面如掌。仍立其像。天慶七年正月七日燒失之後。但取出頂上佛面一體。切取取出。時別當東大寺長救禪師也。僧興運奉作十一面半金色。增本定二尺奉作也。件願主道德（良辨之弟子）以彼寺渡進本師良辨僧正。僧正次付實忠。如此代々相承。爲寺家之末寺。東大寺寺僧次第相繼寺務執行。而正暦元年。時別當仁和寺眞永之後。興福寺平傳律師橫押取。件平傳者眞永之父。

注云。道德者良辨之弟子。道明死去後。道德奉良辨律師。

又云。養老二年。唐僧道明姓六部。飯高天皇朝廷賜稻三千束。令造觀音像高二丈六尺。安置無處。而雷公降擢盤石。爲其座。神龜四年沙彌道德造堂。道明作佛。

とあり。此の文中道德（卽ち德道）が長谷寺を以て良辨僧正に奉れること、及び道德元と道明の資、道明の沒後に於て更に良辨の附弟となりて之に師事せりと云ふが如きは、甚だ重要なる記事にして、是に依りて道明の德道に比し年齡高かりしことを推知すべく、道明の歿後、良辨に師事す云々とある等、前後の事情を考ふるに、長谷寺慶讃の時の如き、道明は恐らく既に物故し居りしならん。又德道の年齒に就きて『長谷寺緣起文』には、齊明帝の第二年（皇紀一六三）の生となす。之に依らば神龜四年（皇紀一八七三）には德道七十二歲なり。案ずるに十一面觀世音菩薩竝に堂舍建立者としての德道は、若年の沙彌なりとは想像の及ぶ可からざる所にして、寧ろ上表等の記事竝に其の他の事蹟に徵し、耆年の長者なりと推定するを穩當とせん。此の處に宇治橋道登道昭の例を援引して、德道の事蹟を道昭と一揆なりと定めんとするは、餘りに揣摩臆測の說にして、反て事實の說明に遠ざかるものと云ふべし。

十一面觀音竝に堂舍の建立に關しては、德道等の事蹟略右の如し。然らば道明對德道の關係は如何と云ふに、要するに道明は德道より先輩にして、前者は專ら三重佛塔を創造し、後者は主として十一面像の造立を勾當せしは諸傳の一致する所なり。設令道明が十一面像建立の發願者なりとするも、差支なきは勿論なり。但し玆に疑難の發するは、三重塔造建の年代なり。之に就きて銘文には明に天武帝の爲に造立する所と云ふ。之に依て道明を天武朝の人とするは、元より當然の事に屬す。然るに

道明が天武朝の人にして而も元正帝の養老頃まで生存せしとせば、過分に時代隔てずやとの說をなすものあり。去り乍らこゝに試に道明を以て德道より約三十歲前後の年長者と見做し、養老四年（皇紀一三八〇）道明年八十五と假定せんに、天武天皇の朱鳥元年（皇紀一三四六）には、道明五十歲なり。されば、道明が天武朝の人にして、當時三重塔の建立をなし、後ち元正帝の時に至りて、觀音造立の事を發願せりと云ふは、是れ實に事實として有り得べきことなり。敢て架空の新說を立つるの必要なきなり。

第三　道明の多寶佛塔創建の事實を述べ其の思想の由來する所を明にして之に對する喜田氏の誤解を辯ず

予は前文に於て既に本後二長谷寺の別を明にし、又後長谷寺十一面觀音靈像造立の事實を論じ了りたれば、茲に進んで本長谷寺三重佛塔創造の次第を明にし、喜田氏の說の妄なるとを辯ずべし。喜田氏の說に曰はく「然るにこゝに道明を以て天武天皇朝の人なりとし、德道と時代を異にするの說の起るは何故ぞ。こは明かに現存の千體佛多寶塔銅版銘の誤解に基づくものなり。此の誤解は、たゞに道明の年代と長谷寺開基の次第とを誤るのみならず、併せて藝術史家、金石文家をして、現存銅版の年代を誤解せしむるものなれば、左に聊か誤解の由來を辯せんとす。銘文に曰く

（中略）此の末文に淨御原大宮治天下天皇即ち天武天皇の御爲に、道明が八十許人を引率して敬造すとあるを直解して、之を天皇朝と爲さんは、一應無理ならぬ事の樣なれど然らず。先づ本銘文のなれる「歲次降婁漆蒐上旬」は、伴大人以下先輩の考證、多く戊歲七月上旬なることは疑ふべからず。こゝを以て伴大人は、長朗が寶龜中云々の語によりて、寶龜の戊歲卽ち元年と推定したれども、其の誤りなることは前に既に述べたり。之を天武朝なりとする論者は、御代の三年若くは朱鳥元年の戊歲を以て之に當てんとす。殊に其の朱鳥元年は、天皇崩御の年なれば、其の不豫の爲めに之を敬造したるならんと說く。事情洵に適切なるが如きも、日本紀に此の際諸王臣等天皇の爲に觀音像を作り、觀世音經を大官大寺に講ずることを記し、其の他數多の佛事供養の擧を說きて、一も長谷寺の事に及ばねば、必しも證となし難し。今つら〳〵本銘文を觀るに、初八行缺損して讀むべからざるも、蓋し造佛造塔の功德を說けるもの〻如く、次に天皇陛下の爲めに千佛多寶塔を敬造すると云ひ、其の德を頌して聖帝金輪阿逸多に超へ、眞俗雙つながら流れて化度つくるなしと說き、以て聖蹟の不朽を冀ふ。其文中天皇陛下とあるは對稱の辭なれば、現代の天皇ならざるべからずとの說一理あるに似たれど、是れ亦必しも然らず、其の德が金輪阿逸多に過給へ

るを說くは可なれども、眞俗雙つながら流れで化度つくるなしとは、現在の天皇に對し奉るの語として解せんよりも、後より之を申すを穩とす。殊に之を朱鳥元年の事とせんには、天皇の延壽を冀ふべき筈なるに、一言其の事に及ばずして、却つて聖蹟の不朽を求めて天地と等しく固く法界と窮りなからんことを請ふ。是れ延壽を冀ふの際に於てむしろ不吉の語なるに似たり。蓋此の塔は、粟原寺の塔と同じく、天皇の崩後に其の冥福を祈り奉て敬造せるものと解すべし。況んや天皇の病五月に起り、七月上旬既に千佛多寶佛塔なれりとは、あまりに早きに過ぎて信ずべからざるをや。人或は云ふ。所謂千佛多寶佛塔とは此の銅版の事なりと。何ぞ知らん、此の銅版は造塔の緣由を記せんが爲の銘版なり。所謂千佛多寶塔とは、古緣起に所謂道明建立の西岡上なる三重塔ならざるべからず。如何ぞ僅に二箇月間に成るものならんや。由つて思ふに、天皇陛下の語、必しも現在の天皇に對し奉りてのみ使用すべきにあらず。過去の天皇に對して其の德を頌し聖蹟の不朽を冀ふ場合に用ふ、必しも妨げざるなり。壬申亂後天武天皇の御系相次いで皇位につき、天皇は實に其祖にましますよりして、奈良朝を通じて、天皇の御爲に造寺造佛の事屢行はる。中臣氏の粟原寺の如き其の一なり。元明天皇養老六年十二月、勅して天武天皇の爲に彌勒像を造り、持統天皇の爲に釋迦像を造る。事は續日本紀にあり。長谷寺に關せずと雖、此の年亦天皇の御爲に佛事供養ありし證とすべく、歳は壬戌即ち所謂降婁に當る。道明が長谷寺に千佛多寶塔を造れる、實に此の年に在りしと解すべし。養老五年、長谷寺成り、翌六年多寶塔建立せらる。事情に於て亦可なり。而して神龜四年十一面觀世音像成り、盛なる開眼供養行はる。願主は言ふまでもなく弘福寺僧道明にして、德道は其の引率の下に事に當る。信ずべき古記錄、古文書の說く所悉く以て解すべし。余輩の見解右の如し。切に大方諸賢の高諭を請ふ」と。此の文に准ずるに、喜田氏は、十一面堂舍の建立と三重佛塔の建立とを漫然混同して、此の西崗三重佛塔を以つて天武天皇追善の爲め、養老六年壬戌（皇紀一三八二）中、長谷寺中十一面堂附屬伽藍の一部として建立せしものと解せらるれど、是れ實に以ての外なる僻說なり。一言にして之を云へば、喜田氏は、多寶塔銅版の銘文を讀み誤られたり。其の結果として攷證全體が悉く詭辯を以て終始されあるは、予等の遺憾とせざる能はざる所なり。

蓋し案ずるに、此の長谷寺山上西崗の三重佛塔は、道明上人が『法華經』の說相に准じ、往昔靈鷲山に於ける釋尊の法華說法の大會に擬し、謂ゆる靈山淨土の聖蹟に倣ひて、天武天皇の奉爲に造立せるものにして、其の事銅版緣起文の記事明々白々たり。

本長谷寺三重佛塔の創建は、此の外に何等の主旨なし、之に對して東崗の十一面觀自在菩薩は、菩薩大悲の利生を仰がんが爲め、更に造立せられたるものにして、卽ち建立の願意、建立の動機、建立の事情竝に事實等、悉く二者各別なり。此は予が辯明するまでも無く、銅版の銘文と、之と何等連鎖なき十一面觀世音菩薩造立の緣起說とを對讀したるものゝ、左右なく首肯せらるべきものなり。

千佛多寶塔銅版の銘文に關し、予は前章に一往の說明を試みたり。今又玆に再說するは、煩しきに堪へざるを以て、唯喜田氏の誤解する文言に就きて一言せんに、氏は天皇の語必ずしも現在の天皇に對し奉りてのみ使用すべきに非ずと云はる。然し乍ら、今銘文に「奉」爲天皇陛下敬造千佛多寶佛塔」と云ひ「奉」爲飛鳥淨御原治天下天皇敬造」とあるは、「伏惟聖帝超」金輪阿逸多」とある聖帝の二字と結びて、今帝天武天皇陛下を指し奉れるものなること確乎として疑ふ可からず。且つ「眞俗雙流化度无央」の語は、喜田氏は現在の天皇に對し奉れる語と解せんよりは、後より申すを穩とすと言はれたれど、眞俗雙流云々とは、例せば『延曆僧錄』(日本高僧傳要文鈔所引)の勝寶感神聖武皇帝菩薩傳中に「聖武皇帝菩薩。眞諦俗諦雙行。皇輪佛輪齊轉」など云へると同意義の語にして、「俗」とは皇化を指すものなるが故に、其の言總じて今帝陛下に對し奉るより他に用ゆる能はざる所の字句なり。此の三重佛塔が天武天皇の奉爲に造立せられたるものなること、秋毫も疑を容るゝの餘地なし。因に云ふ造塔の功德は延命を主とす、文に「此福無量」とあるは、聖壽萬安を祈り奉りしものたるは、恐らく異論なかるべしと雖も、是れ佛事として常時にも行はるゝことなり。必ずしも不豫の爲に敬造すと限る可からず。喜田氏の說の如く天皇の病五月に起り七月上旬既に多寶佛塔なれりとは、あまりに早きに過ぎて信ず可からずと考へらるゝ如きは、全く無用の穿鑿なり。

次に銘文中「冀永保聖蹟」已下「壹投」質劫」俱値」千聖」に至る章句に就きては、之を詳細に說明せんとせば、『法華經』を中心とし、兼ねて彌勒下生成佛の思想の根柢的研究に入らざる可からず。但し是は今の所詮に非ざるを以て、暫らく他日に讓らん。されど此の思想を明にせざれば、此の文章を解釋する能はざる次第なるが、要約して之を云へば、今所修の功德を以て、現世の福德を得ると共に、未來は五十六億七千萬歲の後、龍華樹下に於て彌勒如來に値ひ奉り、同じく共に成佛せんとの意なり。此の思想は、佛教信仰中最も弘く古く世に流布せる思想にして、殊に我が文明思想に甚大なる影響を與へたるものなり。一例を擧げんに、『延曆僧錄』中の近江天皇菩薩傳に

左の文あり。

又云。天皇菩薩臨府萬機。受佛遺囑。王佛兩輪竝化。眞俗二諦俱陳。譬若眞智遍一切處。亦似萬品普陰慈雲。天皇忻尙玄門。稟滿月之盈景。敬恭三寶。承惠日之餘輝。再動仙毫。親搖御札。寫諸經論。遍盈玄寺。弘法之大莫尙于茲。情天宮願生兜率。便於滋賀山門。鑿巖構宇。興建金地。立寶殿一宇。彌勒像一鋪。寫彌勒經上中下十部。香爐十具。花盤十面。食邑五十戶。水田若干。作往生供料。年別夏秋冬三日三夜請十法師。奉爲三天皇讀經禮佛。發願造已畢。卽於次東造講堂一宇。次東附山造僧房十口。次東造食屋厨坊器室高脚。次金堂南越磵造橋。廊二行東西相對。於南崗嶺造殿二宇。殿東建如來塔一區四三級。於二殿中間。竪燈籠一柱。燈籠下。乃天皇菩薩發願截一指在燈籠中。指上燃燈。供養本師釋迦文塔及佛像。又願此燈明明不絕。直至當來龍花會中慈氏調御。盡一住劫。千佛如來。俱受我燈供養。又願以此燈供養未來星宿劫中千佛如來。更願我此指燈供養盡未來劫一切如來。劫有窮盡。此願無盡。又願預我法會者。同昇知足。共赴龍華。自是已來。迄今不絕。

是れ畏くも天智天皇の御事蹟なり。降りて中古に及び、寛弘四年藤原道長の金峯山上に埋納したる經筒の銘文の如き、天養元年僧禪慧が播磨常福寺山上に埋藏せる瓦經の願文の如きも亦其の例なり。一々枚擧に遑あらず。而して此の思想の流衍に關して注意すべきは、其の根本思想が龍華會の成佛にあるを以て、從て其の修善の事は、遡りて冥福を弔ふにあらで、進んで自己が將來の得脫を期するにあり。故に多く願主自から造塔等の善事を修するを例とするなり。摩訶迦葉が雞足山中に入定して彌勒の出世を待つが如き、又南岳慧思禪師が現身を以て當來彌勒尊に値ひ奉らんが爲め、金字大般若經等を作り、練行以て不死の仙道を求めたる如き、亦以て其の思願の存する所を察すべきなり。今喜田氏は「永保聖蹟」の字句に就き、天皇の延壽を請ふべき筈なるに、却て聖蹟の不朽を求むる如きは、是れ延壽を冀ふの際に於て、むしろ不吉の語なるに似たりなどゝ解釋せられたれど、此は全然喜田氏の誤解なり。茲に云ふ所の聖蹟とは、下の偈頌中の「鷲峰寶塔涌此心泉」云々等の句に照應するものにして、換言すれば靈山淨土に擬せられたる豐山の靈地を指す。敢て「先帝の御墳」など云ふ如き珍妙の意解を爲すべきに非ざるなり。

之を要するに、喜田氏は今回問題の根本資料たる此の千佛多寶佛塔銘文を根柢より誤解せられたり。根柢既に誤解されたる爲に、他の史料の取扱に於ても、種々會通の困難を來し、遂に養老六年多寶塔造立說を立てらるゝに至る。其の說巧なりと雖

も、舞文の譏は免るゝ能はざる所なるべし。氏の再考を煩はさゞるを得ず。

以上叙述する所を要約するに、予は長谷寺中西閣三重佛塔の創建と、東閣十一面觀世音菩薩の造立とを二者各別の出來事とし、前者を道明、後者を德道(又は兩人共同)の功に歸し、十一面觀世音菩薩の造立を養老、神龜の頃とし、三重多寶佛塔は、天武天皇の朝に創造せられたるものなりと推定するものなり。喜田氏の意見とは殆ど全部其の所見を異にす。敢て不敏を顧みず、卑見を述ぶること右の如し。閣筆に臨み予は喜田博士に向て、文中往々粗野の言辭を弄せる失禮を陳謝す。

第三章　長谷寺問題に就きて喜田博士の辯駁に答ふ

大和長谷寺の什寶たる國寶金銅板佛塔像は、豐山開創の當初に、川原寺の道明上人が、飛鳥淸御原大宮治天下天皇の奉爲に製作せられしものに係り、實に本邦古代の遺物として海內無比の靈物たり。圖は『法華經』見寶塔品の靈鷲山法華開會の相にして、圖下に銘文を刻せり。是れ啻に我が佛敎藝術上重要なるのみにあらず、歷史上の問題として長谷寺草創年代を決定すべき唯一の根本史料なり。然るに此の問題に就きて、嘗て伴信友翁は『長谷寺多寶塔銘文長谷寺緣起剝僞』と題し、此の銅板銘文の攷證より進むで、菅原道眞公の筆と傳へらるゝ『長谷寺緣起文』の僞作なることを論定せられたり。されど伴翁は、此の銘文に記する所を充分に檢覈するに及ばず、從て此の銘文を以て、十一面觀音像造立にも言及せるものゝ如く誤解し、「養老四年より寶龜元年まで五十一年なり。多寶塔銘文首のかた九行の間、行の下の字滅て文義知らざれど、佛像を造りたる由を記したりげにきこゆるは、いはゆる養老四年佛木引上云々といへる時の事なりしなるべし」と說き、卽ち此の銘文記載の事實を以て、十一面觀音建立と關係あるものとして立說せらる。蓋し伴信友翁が長谷寺緣起文を以て菅公の筆に非ずとすることは、論證精緻にして甚だ傾聽すべしと雖も、銘文其ものに就きては、降婁云々等の數字の外、深く記事の內容を精査することなくして止みぬ。是れ翁の言議の徹底せざる所以の根本原因なり。

之を以て予曩に『弘福寺道明上人作の千佛多寶塔を論じて長谷寺開創の事に及ぶ』と題し、卑見の一端を雜誌『密敎』に開陳したり。是れ他意なし、彼の銅板銘文の記載は、十一面觀音菩薩造立と何等關連を有せざるを以て、此の二事實を更に文其ものの如く率直に二事實として解釋せんと試みたるなり。今玆偶喜田博士の『長谷寺創

建と千佛多寶塔銅板の銘』なる一文を雜誌『妙智力』に公にせられたるを讀むに、喜田氏が長谷寺十一面觀音竝に堂舍に就きて、伴信友翁が寶龜年中とする說を排して、之を養老四年着手、神龜四年落成慶讃の說を唱道されたるは、予等も亦大體に於て異議なき所なりと雖も、氏も亦此の銘文と『七大寺年表』の記事とを連接して、像(十一面像)と塔と同時に造立せらたるべしとすることは、略彼の伴翁に同じく、此の點頗る予等の考と異なるを以て、予は『佛教史學』誌上に一文を寄せて、遠慮なく卑見の存する所を陳述して喜田氏の再考を乞へり。但し予文辭に拙にして、章句往々粗野に流れ、學界の先進に對する禮儀を失ひ、爲に喜田氏の感情を害したるは、予の深く慚謝せざる可からざる所なり。然し乍ら事元と學術上の問題にして、唯徒に無用の言辭を弄すべきに非ざるは勿論なりと雖も、是非の見解は辨別せざる可からず。而して前記予が喜田氏を問難せる『佛教史學』所載の卑見に對し、氏は『歴史地理』と『佛教史學』と『妙智力』との三雜誌に於て、殆ど九十頁に亙る意見を說示せられ、大に予等の蒙を開かれたり。されど予は不幸にして未だ氏の說に首肯すること能はず。且つ氏が辨駁中には、予等の新に答辯を要するものも之れ有るを以て予は不遜を顧みず、更に此の蕪稿一篇を記して氏の一閲を乞ふことゝなせり。

而して予の卑見に對し喜田氏が新に起草敎示せられたる三篇の中、其の『妙智力』に寄せられたるものは、同誌本月號は、未だ發行頒布に至らざるを以て、具に拜讀の榮を得ずと雖も、本誌竝に『佛教史學』に掲載されたる二篇に就きて之を見るに、氏が該博なる引例と緻密なる攷證を以て終始されたる七十頁の雄篇は、予等は予等が自から主張せしものにして誤りとすべきものゝ、氏の今回の論文に依りて是正せられたるを深謝するものなり。唯憂ふる所は、未だ論義の根柢に於て、氏の意見に全同の旨趣を表すること能はざること是れなり。予等固より淺學寡聞のものなり、敢て自から頑强を自說を保守するに非らず。一たび誤說と知らば、直に自から慚謝撤廢せんも、此の問題に就きては、未だ猶ほ大に研究の餘地あるを思へばなり。而して予は喜田氏の辯駁に答ふるに當り、先づ此の問題の研究方針に就きて、自から氏と予との間に多少見方の相違あることを一言せざる可からず。何となれば今回の言論たるや、要するに同じ問題に對し、同じ史料を以て究明するものにして、本來同一歸着點に到達すべきもの、而も其の間に違錯を生ずるは、孰かの誤解に基づくもの、否是れ恐らく予の誤解なるべしと雖も、云何せん喜田氏の說かるゝ所は未だ予が肺腑に治まらざるなり。予は歴史の研究に於ては、殆ど門外漢にして、史料の

取扱の如きは、果して如何に之れを案配すべきものなるやを知らず。但古きものは古しとし、其の文は其の文の如く解し、眞撰と稱せらるゝものと雖も、一途に全分の信憑を爲さず、僞作と唱へらるべきものと雖も、絶對に之を排斥せず。出來得る限り虛心怛懷に諸材料を考察し、且つ人生の出來事として當然出來得可く起り得べきを豫想して、然る後に適從す可きに就く。必ずしも數の多きを採らず、妄りに他の異說を排せず。同異併せ傳へ、數說兼ね存して、唯其の中眞に近きものに由るも、而も確定の說となさず、他日再考の餘地を存し置く、是れ予等の大體の研究方針なり。若し失れ現代史學の研究法としては、厭迄史料の甄別に重を置き、第一に眞僞の解決、材料の批判等、孰れも先決問題なるべしと雖も、而も眞作の中にも贅說浮華の記事あり。僞作の中にも時に眞實確固の傳說あり。古記の中にも後人の竄入あることと俱に、新著の中にも古人の確說を記載するあり。又特殊の場合、特殊の出來事の行はるゝあり。又古代蒙昧の時代と想想しつ、而も其の實は想像已上の開明なりしが如き思惑違を爲すこと往々あり。蓋し歴史的研究の第一要件は、雜多の史料を甄別して、其の中より眞事實を見定むるにあらむも、選擇も一歩誤れば獨斷となり、結論を急がんとすれば、後に至りて更に之を正誤せざる可からざる如き失態を演せざる可からざること往々あり。是れ予等の私に相誡むる所なり。

今長谷寺の問題に就きても、予等の辯ずる所は、虛心平氣に左の如く考へたるに過ぎず。

一、金銅板佛塔像の銘文は、唯單に千佛多寶佛塔造立の緣起文にして、十一面像の造立と何等の關係なし。換言すれば西崗三重塔關係の緣起の文にして、東崗十一面觀音とは全く沒交渉なり。

二、銅板銘の緣起の文には、千佛多寶佛塔は道明上人飛鳥淸御原治天下天皇の奉爲に作る所なりと云へり。故に文其ものゝ如く之を天武朝の作とす。

三、養老神龜の頃に十一面觀音像造立さると云ふ。造立の願主につき、道明とする說と、德道とする說と、二人共同の所造なりとする說と、一人佛を作り、一人堂を作れりとする等の異說ありと雖も、年次の說明は略大差なきを以て之に從ふ。但し千佛多寶佛塔を作るとの事は、諸記錄に文證なきを以て、且らく此と別箇の事實とす。

是れ予の長谷寺草創問題に對する根本慨念なり。此の慨念を基礎として、諸種の史料を觀察する時、

一、銅版銘の緣起の文の千佛多寶佛塔造立の記事は、說明として菩薩前障子文の文、德道上表の文等に載せたる西圓三重塔竝に石室佛像造立の記事に一致す。故に西圓三重塔竝に石室佛像造立の史料として、其の說を採用す。

二、東圓十一面觀音像造立に就きては、異說の是非を判決すべからざるも、其の中比較的有力なるものに依り、他は一說として之を保留し、小異を捨て大同に就く。

時代は養老神龜の間、願主は德道、又は道明、又は二人共同の說の孰れかを用ゆ。

諸種の史料は、俱に此の二項の史實の說明を爲すに、各部分的に一方の史料となる。

更に一步を進めて、尅實して之を論ずる時は。

一、金銅版の緣起文は、長谷寺開創の根本史料として絕對の價値を有するも、其は要するに千佛多寶佛塔卽ち西圓三重塔等關係の緣起の文にして、

二、十一面觀世音造立に就きては、根本的第一史料と認むべきものなく、唯『七大寺年表』『扶桑略記』已下後代の史料のみ。

予等斯の如く論じ來る時、虛心平氣に考へて、長谷寺の草創は、道明上人の千佛多寶佛塔の造建に始まり、德道沙彌の十一面像造立に成ると考ふると俱に、一長谷寺中に、西圓の佛塔と、東圓の佛像とが、前後して成れりとするものにして、諸種の史料を史料其まゝに配案して、尠しも憶說を交へざるものなり。予等は世の歷史家なるものに非ざるが故に、所謂史料の取扱を知らずと雖も、自己の立說に於て、史料に明記なき說明を下すを好まず。今喜田氏が『七大寺年表』と銅版の緣起の文とを結び付けて、養老五年に佛像彫刻の事に着手し、翌六年多寶塔造立せられたりとする說の如き、說として巧なりと雖も、『七大寺年表』(扶桑略記等も元より同樣なり)と、金銅版緣起の文とは、內容に於て全然無關係なるもの、之を確實に結付けんには、少くも左記二條件の內

一、銘文の緣起の文中に十一面像造建の記事ある場合

二、『七大寺年表』其の他孰れかの史料中に養老年中千佛多寶佛塔造立の記事ある場合

の孰れかを具せざる可からず。而るに今の場合に於ては、銘文は單に天武天皇の奉爲に千佛多寶佛塔を建立せしことを記するに止まり、『七大寺年表』等は、養老神龜の間に十一面像竝に堂舍が造立されたりと云ふに過ぎず。但發願者が、同一人なりと云ふよりして、同代の出來事と見做さむことは、必らずしも不可能に非ずと雖も、之が年次の確定は、銘文の歲次降婁の文の解釋云何に依る。既に銘文其ものが、天武天

皇の奉爲と云ひ、且つ文中追考云々等の言並に意味なき以上、强て之を養老六年の出來事に引直して說明せんことは、予等の取らざる所なり。予は銘文を根本史料として、後代製作の史料を觀察す。此の故に一面に菩薩前障子文等の說を採りて、三重塔建立の史料として參考採用すると同時に、一面には十一面觀音造立に就きて『七大寺年表』等の說を參考依憑するや勿論なり。

喜田氏の高見を案ずるに、氏は銅板銘に現はれたる道明と、十一面像造立の願主たる道明とが同名同人なるべきより、之を同時代の出來事なりと推定せられんとす。是れ固より一往當然の推論なるべきものならんと雖も、今此の銘文と『七大寺年表』との二史料のみにては、單に年表の紀年より推算して、三重塔の製作等をも、之と同時なりと確定するは、聊か速斷を免れざるものならむ。若し夫れ『七大寺年表』なるものが、史料として喜田氏の說明する如く有力貴重なるものにして、之に依りて直に銘文の降婁の文字を解釋し、養老六年となし得可きものならば、以て大に信賴の意を强ふすべきも、是れ實は平安朝中期以後の編纂物にして、之を第一史料として銘文の說を解釋せんは、予等の躊躇せざる可からざる所なり(此の事は後に至りて辯ずべし)而して喜田氏と予と意見を異にする所は、喜田氏が『七大寺年表』を主として、長谷寺十一面觀音像並に堂舍の建立を說き、之に依りて銅版の年代を定めて同時の出來事なりとするに對し、予は先づ銅版の銘文を基礎とし、兼て他の史料を參照して、三重多寶塔等と、觀音像の建立とを別箇の事實と認め、長谷寺の開創としては、寧ろ千佛並に多寶塔の造建を以て始原とし、之に次で十一面像造立の事ありしとするものにして、言議の衝突する根本問題は、畢竟して銘文の解釋如何にあり換言すれば、道明の千佛多寶佛塔(千佛と多寶塔とは別箇の成語なり、千佛多寶佛塔なるものなし、此の事は別に說く可し)造立の事實を以て、道明が天武朝の爲にせるか否やにあり。卽ち文中の「奉爲天皇陛下乃至奉爲飛鳥淸御原治天下天皇敬造」の事實を以て、現在天皇のために爲し奉れるものか、將た過去天皇の爲にし奉れるものなるか否やと云ふにあり。之に就き氏は之を追考の爲めとするに對して、予は現在天皇祈福の爲となす。從て此の事實と十一面觀音造立の說と、年代上の相違を爲すなり。此の意見の根本的相違に由りて、史料の取扱にまで見解の相違を來せるもの、是れ喜田氏と予との間に意見の分るゝ根本原因にして、而して亦研究方針の相同じからざる所なり。予は今次喜田氏が老婆深切に諸種史料に就きて敎示せられたるを感謝す。然し此場合に此の問題を解決する第一の要件は、此の根本史料たる銅

版の銘文を明確に講解して、其の時代を決定するに在り。不幸にして予は之に對する喜田氏の高説を以て、充分に了解する能はず。是れ予が喜田氏に向ひて、再考再説を仰ぐ所以にして、平安末期以後の蒐輯製作に係る傳説諸書の批判の如きは、予等としては寧ろ末節の問題なり。否此の問題を解決しての上、始めて要用なりとす。予が此の際喜田氏に向て切望する所は、猶ほ少しく此の問題を究明せられ、謂ゆる道明の此の事業が追考の爲に造立されたるべきを詳細に立説せられんこと是れなり。何となれば予が疑難の幾多は、之に依りて全部解氷す可ければなり。

若し予をして言はしむれば、予は彼の銅版の銘文を以て、天武天皇の奉爲に千佛多寶塔を造立せる緣起の文となす。是れ元より何人も異論なかるべしと雖も、所謂「奉爲天皇陛下」等の語を以て、之を現在天皇とし奉ると、過去天皇とし奉ると、依りて降婁の年代に差降を生ず。即ち字句としては、喜田氏の説の如く過去天皇を指し奉れることにも通ずべきならむと雖も、普通現在天皇を指し奉れる語なるは勿論なり。而も今之を現在天皇の奉爲なるか、將た過去天皇の奉爲なるかを決せんとせば、必ず其の文中に記載されある事蹟より之を判ぜざる可からず。予は之に就きて、私に現在天皇の奉爲にせる事實と解す。然るに喜田氏は過去追福の爲に造立する所なりとせらる。但し予が喜田氏の説に服すること能はざるは、彼の銘文中に、寸毫も追福の爲に造立するの意味の字句を見出す能はざること是なり。既に銘文中に追福の爲に之を造立すとの意味の章句なしとせば、此の銘文を根據として、過去天武天皇追福の奉爲に造立せりとの説は、直接には成立せざるなり。換言すれば、之を過去天皇の奉爲とするは、當時過去天皇の爲に造像造塔等の事實が行はれたれば、是れも亦然る可しと想定せらるゝが如きも、單に之れのみの推定にては、予等は未だ此の千佛多寶佛塔の造立を養老六年の造立なりと説明するの判斷と勇氣とを有せざるなり。

喜田氏は、此の千佛多寶佛塔の造立を以て天武朝とする説を排して、銘文の誤解又は誤讀に基づくと説明せらる。予等亦實に不敏にして之を天武朝の製作と誤解誤讀せる一人なるが、敢て教示を請ひ度きは、如何なる字句を如何に誤讀し、從て此の如き誤解に陷れるかを明了に指摘せられんこと是れなり。猶ほ此の銘文が、過去天皇の奉爲に造立せられたるものなるべき由に就き、積極的に立證證明せられんことを望まざる能はざるなり。思ふに予等の解する所は恐らくは誤解なるべし、否恐らくは誤讀採るに足らざるものなるべし、但し未だ一々の章句に就きて喜田氏の

指彈を蒙るの暇なかりし故に、自から改むることを知らざるものなるが、試に銘文記載の事實に就き、予の卑見の一端を述べんに、文中

一、惟夫靈佛巳下慈氏□□□に至る迄は、道明が、佛竝に塔を造立せる事蹟を記せり。靈佛とは、下に謂ゆる千佛なり。千佛とは、千體の佛を云ふには非ず。こゝには賢劫の千佛とて、拘留孫佛巳下樓至佛に至る千佛なり。剎とは塔の事なり(喜田氏の引文中には常に剎字に作らるゝも、此は剎の古字剎字の誤讀なること明かなり)

二、佛說巳下此福無量に至るまでは、經說を引き來りて、造塔と造佛の功德無量なることを說く。

三、粤以巳下師子振威に至るまでは、正しく天皇陛下の奉爲に千佛と多寶佛塔とを敬造せるとを記せり。此は前にも一言せる如く、千佛は賢劫千佛、多寶佛塔は多寶佛の在す塔を云へるものにして、二者全く各別の語なり。上層舍利巳下の三句は三重多寶塔の形容なり。諸佛方位巳下五句は、所造の千佛像を指せるならん。

四、伏惟巳下四句は、聖帝は、前の天皇陛下の語と相對して今上皇帝を指す。超金輪阿逸多とは、金輪は金輪聖王にして此の世界の統治者として理想的の王者の意なり。阿逸多とは、當來成佛すべき彌勒菩薩の事なり。今聖帝の德は、此の二者にも超へ給ふと贊じたるなり。眞俗雙流化度無央とは、眞は佛法、俗は皇化の意にして、此の二者雙行して度生央りなきことを述べたるものなり。

五、庶冀巳下金石相堅に至るまでは、此の像塔所立の聖蹟を永久に存せしめんことを述ぶ。文中崇據靈峯云々は塔を指し、恆祕瑞巖云々は瑞石像(塔下の石室佛像)を形容するものなるが如し。

六、銘曰巳下の文中、釋天眞像降茲豐山の二句は、造像の成功を指し、鷲峯寶塔涌此心泉の二句は、多寶塔の落成を云へるものゝ如く、負錫來遊巳下は、此の勝地が來遊し練行し、晏坐し熟定するに適することを述べ、乘斯勝善巳下四句は、此等の造塔造佛等の勝善に乘じて、自他同じく實相に歸し、以て當來彌勒佛(賢劫第五佛)を始め、賢劫出世の千佛に値遇し奉りて成佛せんとの意なり。

七、歳次降婁巳下は戊年七月を以て、今飛鳥淸御原治天下天皇のために八十人許の同僧を率引して、此の千佛と多寶佛塔とを造立せることを記せるものなり。

予等が、銘文に對する意解は、略して右の如し。此の中、間〻予が學解の足らざるために、疑を存する所なきにあらず。否實際に誤讀誤解せるもの多からんことを恐る。但其

の記する所は千佛竝に多寶塔の造立にして、千佛とは寺傳の緣起に云ふ石室佛像、多寶佛塔とは、蓋し三重多寶佛塔に當るなり(但し後世多寶塔と稱せらるゝものは、其の樣式大に之と異るあり。恐らくは密敎傳來後法華曼荼羅等の圖像を採用せるに基づくか)蓋し千佛なる思想は、佛敎研究上の一大問題にして、予等亦多年此の問題の研究に腐心、すと雖も、未だ充分に了解する能はざる所、印度のアジャンター、燉煌の千佛洞、洛陽龍門の諸石龕等、同じく此の思想の產物なるべきこと、予等別に他に一言せることあり。而して今此の銘文は、言辭極めて簡單なりと雖も、結構井然、章句亦一點の申し分なし。是れ凡庸の僧俗の妄りに綴り得る所にあらず。特に大乘佛敎中の『法華經』信仰の粹を拔きて、此の佛事を爲し、是の銘文を草す。苟も此の銘文を讀まんものは、道明が決して市井の凡僧に非ざりしを察知すべく、恐らくは學解俱に高く、一代の師表として川原寺の導首たり、上下の旨を體して、當時此の淨業を成せしものに非ざるか。是れ一片想像の推定に過ぎずと雖も、此の銘文の如何にも立派の出來なるを思ふ時、道明の道容の如何に高かりしかを推測するに難からざるなり。但し茲に一言すべきことは、予等は、十一面像の建立に先ちて、道明が此等の塔像を造立せし事實を是認せんとするものなりと雖も、而も本長谷寺なる名の寺を建てたりと解するに非ず。本長谷寺なる名稱は、十一面堂等慶成の後、何時の頃よりか、後人の勝手に呼び習はしたるものと思惟し居るなり。

而して此の銘文の解釋に就きて、根本的に上記の卑見と一致せざる一說あり。予が平生畏敬せる佛敎美術に精通せらるゝ某氏は、予に對して銅版の圖相と銘文とを對檢するに、銘文に記する千佛多寶佛塔とは、必ずや此の銅版其の物に外ならざるべしと諭示せらる。是れ確に有力なる一說なり。されど銘文の千佛多寶佛塔を以て、此の銅版の圖像なりとする時は、同時に西崗三重塔竝に石室佛像との關係如何等、其の他新なる研究問題も隨伴するを以て、再考の餘裕を存し置かんとす。

之を要するに、予は銘文を右の如く解するが故に、道明の千佛多寶塔を以て天武朝の事蹟とし、之を十一面觀音造立と引き放して說明せんとするものなり。是れ喜田氏と予と根本的に意見の相違を爲せる所、予が喜田氏に對する希望は、一に此の問題の解決に在り。

予が研究の方針は、先づ此の銘文に關する調査を第一の要件とするもの、十一面觀音像の造立に就きては、寧ろ數說の中の孰れかを採用せんとする迄の事にして、此の種の研究は、予が今の所詮に非ず。此は史料其ものが、各自有する相當の價値を認

めて、其に相應して相當の取扱を爲すのみ。予等は『諸寺縁起集』等が、寺傳として縁起として、其れ程無價値なるものなりとは思惟せず。又『七大寺年表』『扶桑略記』等を以て、其れ程依憑すべき史籍なりとは想到せず。何となれば俱に後代の編纂物にして、絶待的證券を爲すべき第一史料に非ざればなり。蓋し此の種問題に對する予等の考は甚だ不得要領なり。否不得要領にせざるを得ざるなり。他なし此等の薄弱なる史料のみにては、孰れに依るとしても輕々に確たる判斷を下すこと能はざるが故なり。

試みに一二の例證を擧げて、且つは喜田氏の辯駁に答ふるの一端とし、且つは予の研究方法の喜田氏と相同じからざるを辯せん。

一、喜田氏は七大寺年表を以て、奈良朝當時より書き繼ぎしものなるべく、其の終末缺損して明かならざれども、蓋し平安朝初世に筆を擱きしものなるべく、之を抄錄して更に後年の事項を書き繼ぎしもの『僧綱補任』なり。

と說明せらる。然し乍ら若し予等の見る所によれば、此の書が奈良朝時代より書き繼げるものならんとは、眞赤な虛言なり。何となれば、今繙きて一二紙を見るに、其の神護慶雲元年の條に『今年傳敎大師誕生』の文あり。又寶龜五年の條に『今年弘法大師誕生』の文あり。今此の二記事のみに就きて考ふるも、此の『七大寺年表』が、氏の說の如く奈良朝當時より書き繼ぎたるものに非らず、亦平安の初期に擱筆せしものに非ざること一目瞭然たり。予が說明する迄もなく、最澄に傳敎大師號の宣下ありしは、清和天皇の貞觀八年皇紀一五二六にして、空海に弘法大師號の宣下ありしは、更に下りて醍醐天皇の延喜二十一年皇紀一五八〇なり。若し當年書繼げる根本史料ならば、如何か二三百年後に附せられたる諡號を用ひて、特に其の生年を記入するの理あらんや。猶ほ此の書中『日本名僧傳』を引用し、又割註中に勸修寺本云々の記載ある等、其の他奇怪の記事往々あり、後代の編纂ものにして原本的のものに非ざるは確乎として動かす可からず。故に予は喜田氏の如く、深く此の書に對して妄信せざるなり。相當に有力なる史料と認むと云へるは、此の長谷寺關係中の諸史料中に就きて、一往相待的に述べたるに過ぎず。

二、『扶桑略記』『七大寺年表』『古事談』『元亨釋書』等、有力なる史料の說が一致すればとて、必ずしも確定議とはなす可からず。障子文等、寺縁起なればとて必ず僞作にして信ずべからずとは云ふべからず。

今一例を擧げんに、大安寺行表の年齡を百四十四歳なりとすることは『扶桑略記』拔

萃』『元亨釋書』、『南都高僧傳』等の說の相一致する所なり。而るに其の說の誤りなる可きことは『天台霞標』に收載せる延曆十三年の房主帳に依り判明するが如し。殊に同一說を甲より乙に、乙より丙に傳へたる場合の如きは、徒に數の多數を以て必ずしも有力なりとの判定は下し難きなり。而して今障子文等の如き、予等元より原本的の史料とは考へざるも、『扶桑略記』、『七大寺年表』等に對しては、異承の傳說として、同等又は同等以上の一說として採用せんとするに過ぎず。寺傳の說には、時々浮誇の說多しと雖も、寺其の物に對する記錄として、多くの場合眞事實を載するも亦事實なり。若し夫れ後代又は其の地を踐まざるものゝ傳聞の說等に對する時は、寧ろ寺傳の說の信ずべき處、間多きに非ずや。

三、予は常識的判斷として、道明が天武朝の人にして而も養老神龜の頃迄生存せしとするも差支なしと推案したり。是は明治維新の元勳が、大正の今日まで猶ほ健在なるに見るも、別に不思議の事實にあらざるが故なり。

而るに喜田氏は是に對して大に予の思慮の足らざるを辯難せられたるが、然し是は甚だ大人氣なき議論なり。兎も角も予が前文は、先づ銘文に依りて道明を天武朝の人とし、是に依りて更に『東大寺要錄』と『緣起文』の說とを參考して道明等の事蹟を豫想して一往の推案を下したり。されど予固より道明が神龜四年に百二歳の老翁として活動したりと云はず。氏が難詰は餘りに穿鑿に過ぎたり。且つ氏は七十二歳の老僧が三十九歳の壯僧の弟子たることありやと反難せられたるが、是は氏に似ざる意外の質問なり。德道は諸文の記する所、孰れも沙彌にして僧に非ず。亦沙彌と云ふは必ずしも年少の小僧を指すに非ず。沙彌に驅烏沙彌あり、應法沙彌あり、名字沙彌あり、名字沙彌と呼ばるゝものゝ中には、八十、九十の老沙彌あること勿論なり。東大寺良辨は、當時の偉材なり。此の傑僧に對し、德道沙彌、如何に老輩なればとて、苟も沙彌の身の、彼の良辨を師とすること、是れ當然あり得べきことなり。沙彌と僧との別の如き、予が說明するまでも無く、氏も充分に熟知せらるゝことなる可し。是れ畢竟氏が一時の誤解と思はるるも、予はさきに痛く氏の指彈を蒙りたるが故に、一言の辯を爲す而已。

四、菅公御作と稱する緣起の取扱に就きて、是れ亦重要の懸案の一になり居る如きも、予亦最初より此の書を重要視せず。

予は『障子文』『緣起文』を一具の傳說と認め、之を銘文記載の道明の事蹟に對し、其の說の一部を參考採用すと雖も、之を以て無上の證左となすには非ず。法空上人の『平

氏傳雜勘文』に援引(拾遺記も同人の著作なるも、此の書物に正和三年著作の奥書あるに依る)されあるより、鎌倉以前の文書なりと推定せしのみ。而るに今同氏は此の緣起文を『元亨釋書』以後の作なるべき由新に提說せられたるも、予等は法空上人作の前顯二書の製作をも疑ひてまで、僞作僞作の文字を重疊して立說するに及ばざるが如し。法隆寺藏本の前記二書は、まさかに僞作とは判せられざるを如何。

以上述ぶる所、喜田氏の辯駁に對する答案としては、甚だ其の意を竭さゞるを愧づ。此の外、予の誤解の氏に依りて正誤せられたるものゝ感謝すべきものもあり。又新に提說されたる高見にして、予として辯明せざる可からざるものも有之べきも、今は其の餘裕なきを以て一先づ此に擱筆せんとす。凡そ此の問題に對する根本研究は、銘文の解釋を確定するにあること勿論なり。然りと雖も、文中の千佛多寶佛塔なるものが、別箇の千佛と多寶佛塔なりしか、將た銅版の圖像其のものなるかを決することと是れ亦一說として重大なる研究なり。又翻ては養老の頃に果して十一面像造立の事實行はれたりしや否やと云ふこと、是れ亦確に一問題なり。何となれば、十一面觀音は顯教所說の菩薩に非ず。尤も唐以前に既に『十一面經』翻譯のことありしと雖も、我國にかゝる佛像の製作さるゝとしては、聊か早きに失するなり。若し天平年中、玄昉僧正が開元大藏經を賚持せる以後ならば格別、孰れにしても密教關係佛像の製作として、年代上稍疑を存するの餘地あるものなり。是れ亦甚だ至要なる一研究問題なりとす。

第四章　國寶大和長谷寺藏千佛多寶佛塔銅版の製作年代を論じて銘文中に見ゆる佛教思想の根柢に及ぶ

川原寺の僧道明、天武天皇の奉爲に千佛多寶佛塔を作る。而して其の千佛及び多寶佛塔樣を出し、竝に造立の緣起の文を刻出せし銅版あり。現に國寶に指定せられて大和長谷寺に珍藏するは、普く人の熟知する所なり。然るに此の銅版の製作年代に就きて、銘文緣起中の歲次降婁を以て、寧ろ天武朝以後の或る年次に配せんとする者あり。先にしては伴信友翁の如き、今喜田博士の如き是なり。されど予等は之を長谷寺十一面觀音菩薩造立の事實と一同して、强て此の銅版製作の年代を數十年後の後代に定むるの不條理なるを思ひ、卑見の一端を『佛教史學』及び『密教』の兩誌に開陳し、且は喜田氏の再考を乞へり。而るに喜田氏は、毫も前說を考慮せらるゝ無く、

却て一途に予等の說をも、該銘文の誤讀に本づくものとせられたり。蓋し長谷寺創建問題は、此の銅版の銘を根本史料とするものなるが故に、此の銘文の正讀と誤讀とは、實に論證の成不に關す。但し此の文簡短なりと雖も、所載の記事は、佛教思想研究上の最大難關に遭遇せるを以て、予等の韭才固より能く之を講解し得べきに非ざるも、唯從來這種の問題に對して討究せる結果として、聊か又多少の說なきに非ず。又眞實此の銘文を讀まんには、單に奉爲天皇陛下云々、歲次降婁云々の數句のみの解說にて止むべきに非ざるが故に、茲に進んで銘文中に見ゆる佛教思想の概略を論述し、以て此の銘文記事の綱要を縷說すると同時に、併せて此の千佛多寶佛塔創造の年代をも推定せんとす。是敢て喜田氏に對する辯駁とするに非ず。寧ろ考古學上の一問題として、同好諸君の示教を仰ぎ、以て當代の佛教思想上より、かゝる塔像創建の行はるゝに至れる所以を考へ、假令十全の解釋を得られざる迄も、兎も角も諸般の問題に觸るゝ階梯とせんとす。例せば千佛の一語を擧ぐる時、佛教神話の研究上に於ては、大小乘を貫通しての難究の問題たり。遺物として印度のアジャンタ、西域の龜茲、燉煌、支那の龍門竝に本邦にも亦之あり。多寶佛と云はゞ大藏經中唯法華の一經のみに說示せらるゝものなりと雖も、東洋に於ける法華信仰の旺盛なると俱に、之に附帶せる研究問題も亦尠なからず。壹投賢劫、俱値千聖云々等の記事に至つては、是れ亦難中の難問たり。然し乍ら我國考古學上の參考遺物は、今問題となれる銅版を始めとし、經筒、瓦經、經石等、孰れも此の種信仰の淵源を論究する必要あるや言を俟たず。否此の種の思想の來由を尋討せざるに於ては、我國文明の源泉を知る能はざる次第なるべきを以て、不敏を顧みず、卑見の一端を陳ぶることゝなしぬ。但し說明の順序としては、第一に千佛多寶佛塔銅版製作の年代を論じ、第二に造塔造佛信仰の起原竝に沿革の一般を述べ、第三に當來龍華會成佛の思想の本說竝に其の思想の流傳の跡を尋ねて、聊か諸種遺物存在の由緒を明にせんと欲す。

一、千佛多寶佛塔創造の年代を論ず

千佛多寶佛塔とは銅版銘文中に記載せられたる語なり。卽ち銘文に云はく

惟夫靈佛□□□□□□□　立稱已乖□□□□□□□
眞身然大聖□□□□□□□　不圖形表剎福□□□□□□
日夕功畢慈氏□□□□□□　佛說若人起窣塔□□□□□
阿摩洛菓以佛駄都□□□□　安置其中樹以表剎□□□□
上安相輪如小棗葉或造佛□　下如積麥此福無量粤以奉爲

天皇陛下敬造千佛多寶佛塔　上唇舍利仲擬全身下儀竝坐
諸佛方位菩薩圍繞聲聞獨覺　冀聖金剛師子振威伏惟聖帝
超金輪阿逸多眞俗雙流化度　无央庶冀永保聖蹟欲令不朽
天地等固法界无窮莫若崇據　靈峯星漢洞照恆祕瑞巖金石
相堅敬銘其辭曰
遙哉上覺至矣大仙理歸絕妙　事通感緣釋天眞像降茲豐山
鷲峯寶塔涌此心泉負錫來遊　調琴練行披林晏坐寧梵熟定
乘斯勝善同歸實相壹投賢劫　俱値千聖歲次降婁漆菟上旬
道明率引捌拾許人奉爲飛鳥　淨御原大宮治天下天皇敬造

とされど千佛と多寶佛塔とは、互に何等關係なき二個の成語にして、こゝに云ふ千佛とは、賢劫千佛とて、拘留孫已下樓至佛に至る千佛なり。多寶佛塔とは、多寶佛の全身舍利を收めたる塔の意なり。決して千佛多寶佛塔なる一語一具の物あるにあらず。故に文に「奉爲天皇陛下敬造千佛多寶佛塔」とあるは、當に「千佛と多寶佛塔とを造る」と訓むべし。又千佛像と云ふも、千の佛像の意に非ずして、千佛の像なり。

『日本書紀』孝德天皇の白雉元年の條に

是歲漢ノ山口ノ直ノ大口奉詔刻千佛ノ像

と云ひ、『法隆寺伽藍緣起竝流記資財帳』に

宮殿像貳具一具金塗押出千佛像一具金塗銅像
金泥千佛像一具

と云へる其の例なり。又多寶佛塔と云ふも、道明の所謂多寶佛塔は三重佛塔なりしこと、銘文の記事竝に上段の圖像に依りて明瞭なり。然らば道明が千佛と多寶佛塔とを作りたりと云ふに對しては、銘文上段に掲ぐる所の圖相は、銘文の記事と全然相一致するを以て、此の銅版卽ち千佛と多寶佛塔なりと說明し得られざるに非ざるが如し。さり乍ら巨細に銘文を讀むに、其の千佛と多寶佛塔とを造立すとあるは、必ずや豐山の靈地をトして、千佛と多寶佛塔を創建せしことを意味するが如し。此の意味に於て、『諸寺緣起集』所載の『菩薩前障子文』に、

於長谷寺有二名。一本長谷山寺。二者後長谷寺。其差別者。十一面堂西有谷。其西岡上在三重塔竝石室佛像等。是本長谷寺也。是弘福寺僧道明建立也。彼石室佛像下在之緣起文。

と云へるは、蓋し今銘文の記事に契合する所なり。三重塔は多寶佛塔なり。塔に舍利

を厝くは造塔の通規にして、而も其の一重二重等、亦全身竝に竝座に擬して佛像等を安じ、且つ塔内に例によりて四方淨土等を畫けりとせば、恐らく今銘文の記事に一致すべく、且つ石室佛像とは、銘文に謂ふ千佛なること推測するに難からず。其は印度西域支那の千佛、孰れも石室内に刻畫されたるもの其の例多きを占むればなり。之に就き喜田氏は『歴史地理』誌上に、銘文の庶冀云々の文の説明として、其の銅版は、安固の爲に石室を設け、其の石室内佛像の下に祕藏せられたるものなりきと説明せられたれど、予等は聊か解釋に苦しむなり。何となれば千佛の二字を抹殺すること能はざればなり。

而して今予等の主として研究せざる可からざることは、道明が斯く千佛と多寶佛塔とを造立せることは、其は天武天皇の朝にせられたるや、將た遙か後代に至りて追福の爲に造立せられたるものなるか否やを決するにあり。

予が考ふる所に依れば、予は最初より「奉爲天皇陛下」の語が正しく今上皇帝を指し奉れるものなるべきこと、及び其の造塔造佛倶に祈福の爲に行はれたることより推測して、之を當時の天武朝の事なりと説明せんとするものなるが、銘文中の佛教の思想上よりの考は之を後章に讓り、單に普通の章句上より考ふるも、そが天武朝して、其れ以後のものに非ざることは、略想定するに難からざるなり。其の理由とすべきもの略して三箇條あり。第一には、「奉爲天皇陛下」の語は明に當代の天皇の奉爲を云へる語なること是れなり。第二には、唯「歳次降婁」の四字のみ出して年號を記さざること是れなり。第三には、文中祈福の意あるも、追善の義に相當すべき文字なきこと是れなり。予は以上の主旨を敷衍せんが爲めに、少しく此の種關係の文書を援引して參考とせん。

一、法隆寺金堂藥師佛光後銘

池邊大宮治天下天皇。大御身勞賜時。歳次丙午年。召於大王天皇與太子。而誓願賜。我大御病大平欲坐。故將造寺藥師像作仕奉詔。然當時崩賜。造不堪者。少治田大宮治天下天皇。及東宮聖王。大命受賜而。歳次丁卯仕奉。

二、藥師寺塔露盤銘

維清原宮。御宇天皇。卽位八年。庚辰之歳。建子之月。以中宮不悆。創此伽藍。而鋪金未遂。龍駕騰仙。太上天皇。奉遵前緒。遂成斯業。照先皇之弘誓。光後帝之玄幼。道騁郡生。業傳曠劫。式於高躅。敢勤貞金。其銘曰。

巍巍蕩蕩。藥師如來。大發誓願。廣運慈哀。猗歟聖王。仰延冥助。爰飭靈宇。莊嚴調御。亭亭

寶刹。寂寂法城。福崇億劫。慶溢萬齡。

三、法起寺寶塔露盤銘

上宮太子聖德皇。壬午之年二月二十二日。臨崩之時。於山代兄王勅御願旨。此山本宮殿宇卽處。專爲作寺。及大倭國田十二町。近江國田三十町。至戊戌年。福亮僧正。聖德御分敬造彌勒像一軀。構立金堂。至于乙酉之年。惠施僧正。將竟御願。構立堂塔。而丙午之年三月。露盤營作。

四、興福寺彌勒淨土緣起記

竊以。花臺葉座。據彼岸以正基。寶殿珠宮。立中天而啓宇。引四生於苦海。咸濟迷津。道六趣於閻衢。俱登覺路。神力之興。其大矣乎。伏惟。先聖先考正二位右大臣贈正一位太政大臣。日月降靈。輔堯日而重彩。風雲入氣。翼舜風而添薰。方謂山岳齊壽。經乾坤以久存。豈圖龍鶴從驍。躡烟霞而長往。弟子靈祇有犯。罪釁惟深。洒掃之供。終天乖隔。風樹之痛。覽地無邊。故奉爲所天。敬造彌勒彎。不動神祇。珍妙工。而初開。無上尊客。詫良工。正寂。以茲妙福。奉酬尊靈。伏願。蕩塵心於定水。昇彼三天。凝眞跡於禪林。超斯十地。將能忍而合契。與正覺而同符。長垂瓔珞之莊。御瑠璃之殿。傍該有頂。廣被無邊。盡叶芳緣。咸承景福。養老五年八月三日

五、奈保山太上天皇山陵碑文

大倭國御谷郡平城之宮馭宇八州太上天皇之陵是其所也

養老五年歲次辛酉冬十二月癸酉朔十三日乙酉葬

卽ち今前記諸文に就きて之を攷ふるに、太上天皇と云ひ、先皇と云ひ、後帝と云ひ、先聖先考と云ひ、尊靈と云ふが如く、過去と現在と明に書分られありされば今文の「奉爲天皇陛下」の語は、恐らく當代の天皇を指し奉れること以て推す可し。喜田氏は之を以て過去天皇と稱し奉ることに通ずべしと說かるゝも、假りに現に大正の時代に至りて、過去孝明天皇の追福の儀を爲し奉らんとするに、特に今上天皇陛下に對してのみ用ひ奉るべき唯二人稱の天皇陛下の語を用ひる理あらんや。必ず先帝先皇其の他適當の名詞を用ふべきなり。是れ予が此の銘文を天武朝の作とする第一由なり。次に此の銘文の製作にして、若し養老又は其の以後のものならば、當代の年號を記入さる可きなり。何となれば假りに一歩讓りて天皇陛下の語が、過去天武天皇を指し奉れるものと曲解し得るとするも、若し道明にして果して養老六年に此の千佛多寶佛塔を造建せることありとせば、自身が造建の歲月は明記すべき筈な

り。特に養老頃のものには、孰れも年號を使用せるに見るも、年號の之れ有るが當然なり。今此の事無きは此の銘文が養老時代のものに非ざるの反證を爲すものとす。要するに是れ畢竟過去天皇の奉爲の御事蹟なることを明記することなく、又後代の造作なることをも記錄せざる銘文なり。否單に當代天皇陛下の奉爲に造立せるものなることを記せるものなり。是れ第二の理由なり。若し天武天皇御追福の奉爲の作善ならば、其の旨銘文に明記ある可き筈なり。其の他何等かの記文あるべし。而るに今此の銘文の記する所は、正しく天皇陛下の奉爲に現當二世の福祐を祈るにありて、毫も過去の天皇に對し奉りて福を修するの意を見ず、是れ第三由なり。銘文既に斯の如し、而も強て之を過去天武天皇御追善の爲に造立する所なりと說明せざる可からざる理由孰れにありとするや。又之を强て過去天武天皇御追善の爲の造立なりと爲し得る理證文證孰れにありや。是れ予等の伴翁並に喜田氏等の說に贊同する能はざる所以なり

次に予は此の千佛多寶佛塔造立の事實を以て、天武天皇の十四年(卽ち朱鳥元年)に創造されたるを至當ならんと考ふるものなり。殊に道明が川原寺の僧なるを以て推するに、此の種の修善が、此の時に於て道明に依て作されしことは、寧ろ當然の事ならざるか。蓋し天武天皇の川原寺に對する御信仰の格別なりしことは、『日本書紀』の記事既に明なり。

二年三月　是月聚書生始寫一切經於川原寺。

十一年三月丁卯　爲天皇體不豫之三日誦經於大官大寺川原寺飛鳥寺。

十三年八月丙戌　幸川原寺。

同　九月丁卯　爲天皇體不豫之三日誦經於大官大寺川原寺飛鳥寺。

十四年朱鳥元年四月壬午　爲饗新羅客等運川原寺伎樂於筑紫仍以皇后宮私稻五十束納川原寺。

同　五月癸亥　天皇體不安固以於川原寺說藥師經安居宮中。

同　六月丁亥　遣百官人於川原寺爲燃燈供養。

然らば今陛下の御惱留らせ給ふ時に當り、道明が、丹誠を罩めて造塔造佛以て聖壽萬歲を祈り奉るべきこと、當に然るべきなり。道明の此の事蹟『書紀』に記載なしと雖も、『書紀』に出でざればとて、直に其の事實を否認すべきに非ず。『大安寺伽藍緣起並流記資財帳』に依るに、

繡菩薩像一帳

右以丙戌年七月奉爲淨御原御宇天皇皇后竝皇太子奉造請坐者

とあり。是れ亦『書紀』に明文なきも、事實は否定す可からず。思ふに此の年七月は、上下擧りて、天皇陛下の萬歳を祈り奉りしものなるべく、道明の三重多寶佛塔竝に石室千佛像の造建、亦恐らく此の時なりしとするを穩當とすべきが如し。

二、造塔造佛の信仰を述べて道明上人の佛塔建立の事蹟に及ぶ　現時の佛寺建築に於ては、一山の伽藍の中樞たるものは、金堂(佛殿、中堂又は本堂と稱せらるゝもの)講堂(又法堂とも稱せらる)等にして、塔の如きに至りては、頗る大規模の伽藍に非ざれば、之を造立すること無きが故に、寺院の主要建造物と云はゞ、必ず先づ指を本尊安置の殿堂(卽ち金堂)に屈し、之に次ぎては講堂、食堂、庫院等を擧げ、從て塔を以て一種の附屬的の建物として考へられつゝあるなり。今日の佛寺の建物に對する說明としては、是の如き解釋も或は止むを得ざる所なるべしと雖も、若し上古の史實を談ずるに至れば、斯樣なる誤れる觀察は到底用ひらるべくもあらず。

蓋し佛敎興起の初期時代、卽ち印度最古の佛敎に在りては、其の崇拜の對象は、佛形像にはあらで佛舍利を安置せる塔婆たりしことは事實にして、寺院の主要建造物と云へば、佛塔其の物にして、講堂、僧院は、寧ろ之が附屬的のものたりしなり。『摩訶僧祇律』に「僧伽藍を起す時は、先づ好地を規度して塔處と作す。塔は南に在るを得ず、西に在るを得ず。應に東に在り、應に北に在るべし。僧地は佛地を侵すことを得ず、佛地は僧地を侵すことを得ざれ。若し塔、死屍林に近からば、若し狗、食し殘し持ち來りて地を汚さん、應に垣墻を作るべし。應に西若しくは南に在りて僧坊を作るべし。僧地の水をして佛地に流入せしむるを得ざるも、佛地の水は、僧地に流入するを得。塔は應に高顯の處に在りて作るべし。塔院中に在りて、染を浣ひ衣を曬し、草履を著け、頭を覆ひ、地に涕唾するを得ず」と云へるは、正に當代に於ける伽藍建立の通規の一端を述べたるものと云ふべし。佛形像を以て信仰の對象とし、之を寺內に奉安するに至れるは、遙に後代の事なりとす。

然るに近代の學者等は、此の種の事柄を熟知せざるが故に、塔を以て佛寺の一粧飾的建造物かの如く考へ、塔が伽藍の主體なることを察知せずと雖も、元來印度古代の佛寺には、塔、講堂、僧房の名あるも、金堂の目なし。此は前にも一言せる如く、塔は當時の佛徒の信仰の對象にして、換言すれば、塔は佛の代表なり。是れ佛の舍利を安置する處なればなり、塔所在の所を佛地と稱し、僧坊處を僧地と云ふ。以て其の別を知る可きなり。卽ち此の時代にありては、未だ佛形像を以て本尊とし崇拜するの風を

見ず。後ち數世紀を經て、漸く佛像を禮拜の對象とするの俗を爲すに及び、所謂佛殿等が伽藍の一地位を占むるに至れりと雖も、而も猶ほ依然として、塔が伽藍の中樞たりし事は、我國初期の佛寺建築に於ても、亦明に認め得らるゝ所なり。『日本書紀』推古天皇十四年五月の條に、佛工鳥の功を美め給へる勅を載す。其の文に曰はく、

朕欲興内典。方將建佛刹。肇求舍利。時汝祖父司馬達等。便獻舍利。又於國無僧尼。於是汝父多須那。爲橘豐日天皇出家。恭敬佛法。又汝姨島女初出家。爲諸尼導者。以修行釋教。今朕爲造丈六佛。以求好佛像。汝之所獻佛。本則合朕心。又造佛像既訖。不得入堂。諸工人不能計。以將破堂戸。然汝不破戸而得入。皆汝之功也。卽賜大仁位。因以給近江坂田郡水田廿町焉。

と。文の最初に先づ「朕欲興内典。方將建佛刹。肇求舍利」と記す。當時佛塔造立を以て佛法興隆佛寺創建の第一義と爲せることを知るべし。今道明上人が、飛鳥清御原天皇の奉爲に三重佛塔を造建せる如きも、其の間自から這箇の消息を窺ふ可きものにして、單純に後世の所謂七堂伽藍の一として造建されたるものなりとは解す可からざるなり。

若し要略して造塔造佛の起原竝に沿革の一般を說述すれば、塔は佛在世、佛滅當時より引き續き盛に造立せられたるものにして、初代の佛徒は、孰れも塔を以て其の崇敬禮拜の本尊となしたり。佛像亦佛在世より製作ありしと傳へらるゝ。されど現存の遺物に徵するに、初期の佛教界に佛像を雕鏤して本尊となしたる蹤蹟を發見すること能はず。卽ち事實上、佛像が、禮拜の本尊として安置せらるゝに至れるは、確に佛滅後數世紀の事に屬す。爾より以來、佛塔と佛像と相竝で崇拜の對象となりしと雖も、更に後世に及びては、像のみが主として信仰の標的となり、塔は却て一般より閑却せらるゝことゝなりぬ。强て次第を立てゝ一往の說明を加へば、初は塔のみが崇拜せられ、中は塔と像と二つ俱に崇拜せられ、後には像のみが主に崇拜せらるゝことゝなりたるなり。斯くて同じ造塔造佛の信念に就きても、上代と中世と近代とは、其の思想に於て自から相同じからざるものありと爲すべきなり。而して此等の事實に就きては、今一々細說の暇なしと雖も、茲に略して造塔造像の緣由竝に其の規模の大要を述べん。

佛徒が、佛塔を建立して、福佑を求めたるに就きては、造塔の功德廣大なりとの信念に本づくや勿論なり。而して其の功德に就きて、或は現世の福德を求むるあり、或は後世の得脫を求むるあり、其の類千樣萬態にして一樣ならずと雖も、其の要する所

の種々の求願成滿足を得べしと云ふ。諸經律の中に造塔造佛の功德を說くこと、其の文廣多にして一々枚擧に遑あらざるも、其の中三五を抄記せば、

一、『未曾有經』(宙七左八六)

復有善男子善女人。於佛般涅槃後。以如芥子舍利。起塔。大如菴摩勒果。其剎如針。上施槃蓋。如酸棗葉。若造佛形像。乃至如麨麥。此功德滿足百倍不及(中略)如是等無量功德。

二、『甚希有經』(宙七右八八)前經と同本異議なり

復有諸善男子或善女人。於諸如來般涅槃後起窣堵波。其量下如阿摩洛果。以佛馱都如芥子許。安置其中。樹以表剎。量如大針。上安相輪。如小棗葉。或造佛像。下如穬麥。以前福聚比此福聚。於百分中不及其一。(中略)以是當知。造佛形像及窣堵波。所獲福聚。不可思議。不可比喩。

三、『雜譬喩經』卷上(暑七右一九)

昔有阿育王。於境內立千二百塔寺。後得病大困。有一沙門。往省王。王與相見。悲不能自勝。道人曰。王前後所作功德。不可計數。當開大意。莫有恨也。王曰。正使死至。不能有恨也。所以悲者。前爲千二百寺。各織作金鏤幡蓋千二百枚。欲自懸幡散華。於諸寺物。始得辨。而得重病。恐不卒本願。故自悲耳。道人語王。好。叉手一心念。王悉見一界中塔。道人卽現神足。應時千二百塔。皆有王前。見大觀喜。病卽時瘥。取金幡金華。懸諸剎上。塔寺低仰。皆就王手。王得本願。身復病愈。卽發大意。延二十五年。遂作功德。逮得不退轉。

四、『譬喩經』(據覺禪鈔所引)

造塔人。十種勝利。一者不生邊地國民中。二者不受貪。三者不得愚癡邪見之身。四者得十六大國王位。五者得壽命長遠。六者得金剛那羅延力。七者得無比廣大福德。八者蒙諸佛菩薩慈。九者得三明六通八解脫具足。十生十方淨土。成佛無疑。

五、『造塔功德經』(宙七左七五)

善男子。若此現在諸天衆等。及未來世一切衆生。隨所在方未有塔處。能於其中建立之者。其狀高妙。出過三界。乃至至小如菴羅果。所有表剎上至梵天。乃至至小猶如針等。所有輪蓋覆彼大千。乃至至小猶如棗葉。於塔內藏掩如來所有舍利髮牙爪間至一分。或置如來所有法藏十二部經。間至於一四句偈。其人功德如彼梵天。命終之後生於梵世。

六、『造塔延命功德經』(閏十五右一四)

佛告言。大王善自安慰。勿得憂怖。諸佛如來有善方便。能令大王獲殊勝利。近延壽命。當得阿耨多羅三藐三菩提。(中略)乃往古昔有一小兒。此地牧牛。有諸相師。來共占相。謂言。

此牧牛兒。却後七日。必當壽盡。是牧牛兒。又於異時。與諸小兒。聚沙爲戲。中有小兒。擺沙爲塔。言作佛塔。高一磔手。或二或三至四磔手。時此小兒戲聚沙塔高一磔手。却後更延七年壽命。(中略)若有善男子善女人。以決定心。如法造塔。乃至一肘量一磔手一指節一穰麥。所得功德無有限量。常有諸天雨花供養。(中略)若自作。若教人作。若復讚嘆。若當信受。所得功德。與造佛塔等無差別。當知是人於此一生不爲一切毒藥所中。壽命長遠。無有横死。究竟當得不壞之身。(中略)若有女人。欲求男者。卽生勇健福德之男。四大天王。常隨擁護。造塔功德。其福如是。

七、『無垢淨光大陀羅尼經』(餘五四ウ)

城中有大婆羅門。名劫比羅戰茶。有善相師。而告之曰。却後七日必當命終。聞此語已。心懷愁惱。卽往佛言。此迦毘羅城三岐道處。有古佛佛塔。於中現有如來舍利。其塔崩壞。汝應往彼重更修理。及造相輪檀。寫陀羅尼。以置其中。興大供養。依法七反念誦神呪。命汝命根還復增長。(取意)

已上七證の中、第二の『甚希有經』の文は、今道明上人作の金銅板の銘文中に引用せらるゝ所にして、卽ち佛說若人の四字は別として、「起窣堵波」より「下如穰麥」に至る四十八字は、正しく此の經の文なり。而して現銘文中に缺けて讀過し能はざる十二個の文字は、今や經文に依りて正確に之を補充するを得たり、卽ち左の如し。

、、、、 起窣堵波	其量下如
阿摩洛果 以佛馱都	如芥子許
安置其中 樹以表剎	量如大針
上安相輪 如小棗葉	或造佛像
下如穰麥 、、、、	、、、、

而して其の造塔の功德に就きては、現世竝に後世に對する種々の利益に通ずと雖も、特に延命を以て、其の主眼となすと云ふも大なる過誤なきが如し。彼の阿育王が一千二百の塔寺を作りて二十五年の壽を延べたりと云ふが如き、其の他波斯匿王延壽の因緣の記事等、例して察すべし。現に造塔法、無垢淨光經法等は、專ら延命延壽の爲に勤修せらるゝ所の祕法たり。されば、道明上人が豐山の高顯處を卜して、天武天皇の御惱留らせ給ふに當り、現當二世得益の爲に、陛下の奉爲に塔を作り佛を造れるとは、允に機宜の事蹟にして、其の間に秋毫も疑惑を挾むの必要なきものなり。因に予が此の銘文中にある「敬造千佛多寶佛塔」の語を「敬て千佛と多寶佛の塔とを造る」と訓む可きものなりと云へるに對して、喜田博士は、予が此の讀方を以て誤讀

とせられ、千佛多寶塔は一具にして二物に非ずとなし、今道明上人の建造に當りては「寶塔其の物に於ては、法隆寺玉蟲厨子に於て見る如く、其の壁面に千佛を現せしか、或は佛像光背に之を置きしものか」と辯明せらる。されど千佛と多寶佛とは、二個の獨立の語にして、漫然一具のものとす可らざるは、元より辯明する迄もなき所なり。壁面に千佛を圖出するは、既に印度西域に其の例あり、但し此等と法隆寺の千佛像とは俱に單なる千佛像にして、佛塔と何等關係あるに非ず。若し强ひて塔四壁の佛畫を論ぜんとならば、印度古雕刻に存するものを初めとして、古くは支那鄮縣阿育王寺の阿育王塔、吳越王錢弘俶所造の塔には、釋迦の四本生變相を圖す。次に釋迦一代の變相を圖畫せるものあり。八相成道の相を圖せし藥師寺の寶塔の如き即ち其の例なり。次に又四佛淨土の相を畫けるあり。又金剛界の四佛等を安じ、且つ柱等に兩界曼荼羅等を圖せるあり。されど佛塔に千佛を取付けたる例は、予等未だ之を聞かず。否假令誤て之れ有りとするも、之を千佛多寶塔と稱す可らざるは、元來斯る不可思議なる熟語と實物が存在し得可き筈なければなり。予等は木に竹を接ぐ底の例證を引き來りて、妄に臆說を加ふるを愧づ。經論に考へ、史乘に徵し、更に實物を案じて、然る後に一應の管見を述ぶるに過ぎざるのみ。

三、當來龍華會得脫の信仰の流行と其の遺物

前節に於て造塔造佛の信仰に關して略述せるを以て、次に銘文中に見ゆる「壹投賢劫俱値千聖」の語句の說明に因みて、『法華經』に本づく造塔の事蹟を述ぶると俱に、當來龍華會上得脫の信仰の本說及び其の思想の流布竝に之に伴ふ如法經等の諸種遺物存在の由緒を明にし、此の小篇の結章となさむと欲す。

蓋し「壹投賢劫俱値千聖」の語句は、單に一往の說明を試むる而已ならば、さして難解の句に非らず。即ち壹に賢劫に投ずとは、賢劫とは、賢は梵語跋陀(バドラ) bhadra の譯にして、又善と翻す。劫は劫波(カルパ) kalpa の略にして、時分と譯す。是れ梵漢竝擧の語、梵語に具に跋陀劫 bhadrakalpa と稱す。過去莊嚴劫、未來星宿劫に對して、或は之を現在賢劫とも云へり。然るに此の賢劫の時量に就きて、疏家の間に古來異說あり。窺基の『瑜伽論劫章頌』は、一增一減を一劫となし、數二十を滿して住劫終る。此の住時を賢劫と稱すと云ひ、又元曉の『彌勒上生經宗要』は、六十四轉大劫を以て一賢劫の量とし、遁倫の『瑜伽論記』第一下に出せる有人の說は、千佛出世の時に約し、百千の水火等の劫を經、遠く長時に亙るを總じて賢劫と名づくとなせり。但し此の中第一說を以て通說とす。蓋し案ずるに、佛教の世界說に於ては、此の宇宙間に萬億無量の世界あり。即ち萬億の須彌

一須彌の如し（即ち地球の如し）一萬億の日月等あり。而して須彌天上には、夜摩天、兜率天、乃至阿迦尼吒天等の諸天ありとなす。此等の世界は一定の時間に起沒すべきものと明す。劫とは即ち時間の意にして、此の吾等が住する世界は、成劫（世界の成立する時代）住劫（住在する時代）壞劫（破壞する時代）空劫（空無の時代）の四期を經て一起沒を爲す。其の時量は、世界成立して人初めて此の世界に住する頃は人壽八萬歲なり。此の人壽漸く短促して人壽各十歲に至る、之を一減劫となす。又人壽各十歲より漸次に增長して人壽各八萬歲に至る、之を增劫となす。一減劫と一增劫と併せて之を一小劫と稱す。斯くして二十增減（小劫）を經るを一住劫となし、又一中劫と稱す。成劫、壞劫、空劫の量は、俱に住劫の量に同じきが故に、四中劫（八十小劫）を經て、此の世界一たび起滅す。其の破壞する時、大火災を起すあり、由て四中劫合して之を一大劫又ほ一火災劫と稱す。此の世界の破壞と同時に、欲界及び初禪梵天の諸天を壞す。斯くて此の世界は、常に成立し又破壞して限り無き次第なるが、其の第七回の火災劫を經、第八回の時、大水災起りて第二禪已下諸天を壞す、之を水災劫とす。更に七の水災劫を經たる即ち第六十四の大劫の時に當りて、大風災起りて三禪已下の諸天を破す、之を風災劫となす。即ち火、水、風劫一周轉するに六十四大劫を經、之を六十四轉大劫と稱す。宇宙幾億無量の世界は、是の如く起沒して際限あることなしとす。是れ佛家の世界說の大意なり。前文に引ける窺基師の說に、一增一減を一劫とし、數二十を滿して住劫終ると云へば、今現に吾等の住存する此世界の住時を稱するもの、其の餘推して知るべし。而して之を賢劫と稱することは、現時は正に是れ賢劫なるが故に現在賢劫と稱す。賢の名は、此の劫中に於て千佛賢聖出世し給ふに由ると云ふ。『悲華經』第五（宙三右八）に、時に大劫あり、名づけて善賢と云ふ。何の因緣の故に、劫を善賢と名づくるや、是の大劫中に多く貪欲瞋恚愚癡驕慢の衆生あり、千の世尊あり、大悲を成就して世に出現すと云ひ、又『大智度論』第三十八（往二〇左）に、劫簸は秦に分別時節と云ふ。跋陀は秦に善と云ふ。千萬劫の過去あり、空にして佛あることなし。此の一劫の中千佛興ることあり、諸淨居天、歡喜するが故に名づけて善劫となすと云へる即ち其の意なり。今銘文に「壹投賢劫」とあるは、即ち吾等が今此の賢劫中に生存するの意なり。

次に「俱値千聖」とは、千聖とは、今いふ此の賢劫中に出世し給ふ千佛を指したるものなることは勿論にして、即ち過去の拘留孫、拘那含、迦葉及び釋迦牟尼の四佛、當來出現の慈氏、師子焰乃至樓至等の千佛是れなり。『賢劫經』第六千佛名號品（黃四左）、『現在賢劫千佛名經』（黃三右四八）並に『佛名經』第二十九（黃五三左）等に具に其の名を出せり。其

の千佛出世の因緣に就きては、『賢劫經』第八歎古品〔黃四九左〕の說に依るに、過去久遠の時に德華王あり、無量精進如來の所に於て、其の千子と俱に深重の誓願を發す。爾時の德華王は、現在の無量光如來、千子は卽ち賢劫の千佛なりと云ひ、『千佛因緣經』〔黃三九左〕には、過去無量阿僧祇劫に寶燈焰王如來世に出現し、彼の佛入滅の後、其の像法中に光德王あり、千童子あり、俱に寶燈焰王如來の像を禮し、善稱比丘の說法を聞き、弘誓の願を發せり。爾の時の光德王は毘婆尸如來、善稱比丘は尸棄如來、千童子は卽ち拘樓秦等の千佛なりと明せり。此の外又異說あり。又此の千佛出世の時期に就きては、曾に賢劫の時量の說に異說あるのみならず、假に賢劫二十中劫の說を取るとするも、尙ほ異說頗る紛々たり。卽ち『大寶積經』第九密迹金剛力士會〔地一四一左〕には、前半劫中に九百九十九佛出世し、後半劫に樓至佛出世すとなし、『悲華經』第六〔宙三七左〕にも、亦前半劫中に於て千四佛出世し、最後に樓至如來出世し、其の後分の賢劫中に普く衆生を化すと云へり。而して若し憬興の『彌勒上生經料簡記』の說に依らば、二十中劫の中、前の十劫中に九百九十九佛出世し、後の十劫中に樓至佛獨り出世すとなし。『瑜伽論劫章頌』には、住劫二十劫中、其の第九劫中、人壽六萬歲の時に拘留孫、四萬歲の時に拘那含牟尼、二萬歲の時に迦葉、今百歲の時に釋迦牟尼佛出世し、後ち壽十歲に至り、更に增して八萬歲となり、其の減劫の時に彌勒佛出現し、爾後第十九減劫に至る間に九百九十四佛出世し、住劫方に終らんとする下半劫に樓至如來出興すと明し、『瑜伽論記』第一下には、初劫の減時に於て四佛(拘留孫乃至釋迦)に出世し、增時に一佛(彌勒)出世し、自餘の諸尊は、後の十九中劫に分布して世に出現すと說けり。其の餘の異說は、具に茲に列記するに遑あらず。今銘文に「俱値千聖」と云へるは、此等の賢劫出世の諸佛に値ひ奉らむとの思願を述べたるものなるが、所謂賢劫千佛の中、拘留孫、拘那含牟尼、迦葉、釋迦の四佛は、過去に既に出世し給ひしもの、されば千佛と云ふも、實は賢劫第五佛たる彌勒如來を始めとして、其餘の九百九十五佛を指せるものなり。

而して此の賢劫の千佛に遇ひ奉らんとの思想と、普通弘く唱へらるゝ彌勒三會の曉に値はんとの思想とは、一見文字上には其の異あるに似たれども、其の實大差なきものなり。何となれば、千佛に値遇し奉らむと云ふも、我等が將に其の第一に遇ひ奉るべき佛は、彌勒如來に外ならざればなり。此の意味に於て、俱に千佛に値はんとの思想も、又彌勒の三會に値はんとの思想も、或程度までは、畢竟同一思想に歸するなり。然らば彌勒世尊は、今如何にして在すやと云ふに、釋迦牟尼佛の補處の薩埵と

して、兜率天上に住して天人の爲に說法し給ふも、當來五十六億七千萬歲(兜率天の壽命を人間の壽命に換算せるもの、此の算數亦數種の異說あれども、今は煩を恐れて之を列記せず)の後、此の世界に下生して成道し給ふ可しと說くなり。

彌勒菩薩が、兜率天上に上生する次第は、具に劉宋沮渠京聲譯の『觀彌勒上生兜率天經』(閏九右二入)に詳述されたり。今左に其の文の要所を抄記せん。

佛告優波離。諦聽諦聽。善思念之。如來應正徧知。今於此衆說彌勒菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提記。此人從今十二年後命終。必得往生兜率陀天上。爾時兜率陀天上有五百萬億天子。一一天子皆修甚深檀波羅蜜。爲供養一生補處菩薩故。以天福力造作宮殿。(中略)爾時。此宮有一大神。名牢度跋提。卽從座起。遍禮十方佛。發弘誓願。若我福德應爲彌勒菩薩造善法堂。令我額上自然出五百億寶珠。瑠璃玻瓈一切衆色。無不具足。如紫紺摩尼表裏暎徹。此摩尼光。廻旋空中。化爲四十九重微妙寶宮。一一欄楯。萬億梵摩尼寶所共合成。諸欄楯間。自然化生九億天子五百億天女。一一天子手中化生無量億萬七寶蓮華。一一蓮華上有無量億光。其光明中。具諸樂器。如是天樂不鼓自鳴。此聲出時。諸女自然執衆樂器。競起歌舞。所詠歌音。演說十善四弘誓願。諸天聞者皆發無上道。(中略)佛告優波離。此名兜率陀天十善報應勝妙福處。若我住世一小劫中。廣說一生補處菩薩報應及十善果者。不能窮盡。今爲汝等略而解說(中略)佛告優波離。彌勒先於波羅棕國劫波利村波婆利大婆羅門家生。却後十二年二月十五日還家本生處。結加趺坐。如入滅定。身紫金色。光明豔赫。如百千日。上至兜率陀天。其身舍利如鑄金像。不動不搖。身圓光中有首楞嚴三昧。般若波羅蜜字義炳然。時諸天人。尋卽爲起衆寶妙塔。供養舍利。時兜率陀天。七寶臺內摩尼殿上師子牀座。忽然化生。於蓮花上結加趺坐。身如閻浮檀金色。長十六由旬。三十二相。八十種好。皆悉具足。頂上肉髻。髮紺瑠璃色。釋迦毗楞伽摩尼。百千萬億甄叔迦寶。以嚴天冠。其天寶冠。有百億色。一一色中有無量百千化佛。諸化菩薩以爲侍者。(中略)與諸天子各坐華座。晝夜六時。常說不退轉地法輪之行。經一時中。成就五百億天子。令不退轉於阿耨多羅三貌三菩提。如是處兜率天。晝夜恆說此法。度諸天子。(中略)佛告優波離。是名彌勒於閻浮提沒。生兜率陀天。因緣。佛滅度後。我諸弟子。若有精勤修諸功德。威儀不缺。掃塔塗地。以衆名香妙華供養。行衆三昧。深入正受。讀誦經典。如是等人。應當至心。雖不斷結。如得六通。應當繫念念佛形像。稱彌勒名。如是等輩。若一念頃受八戒齋。修諸淨業。發弘誓願。命終之後。譬如壯士屈申臂頃。卽得往生兜率陀天。於蓮華上結加趺坐。百千天子作天伎樂。持天曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。以散其上。讚言。善哉善哉。善男子。汝於閻浮提廣修福業。來生此

處。此處名兜率陀天。今此天主名曰彌勒。汝當歸依。應聲卽禮。拜禮已訖。觀眉間白毫相光。卽得超越九十億劫生死之罪。是時。菩薩隨其宿緣爲說妙法。令其堅固不退轉無上道心。如是等衆生。若淨諸業。行六事法。必定無疑。當得生於兜率天上。値遇彌勒。亦隨彌勒下閻浮提。第一聞法。於未來世値遇賢劫一切諸佛。於星宿劫亦得値遇諸佛世尊。於諸佛前受菩提記。

今此の經に依るに、初に彌勒菩薩が補處の薩埵として却後十二年兜率陀天に上生すべきことを記し、次に諸天子等、補處の薩埵の來處を知り、弘誓の願を發して國界を莊嚴するの有樣を詳說す。その牢度跋提神の化作せる善法堂は、四十九重の微妙寶宮なり。經に明に四十九重と云ふ。然るに後世兜率內院に四十九院ありと說くは、蓋し後人の訛傳なり。次に彌勒は兜率陀天に上生し、此の摩尼殿上の師子牀座に坐し、恆に說法して諸天子を度し給ふことを明し、最後に我等諸功德を修するに依りて、彼の天上に生れ、彌勒に侍して、聽法を得ることを述ぶ。此の下尤も注意すべきは「亦彌勒に從て閻浮提に下り、第一に聞法し、未來世に於て賢劫の一切の諸佛に値遇し、星宿劫に於ても亦諸佛世尊に値遇することを得、諸佛の前に於て菩提の記を受けん」とある文是れより。卽ち吾等は假令兜率陀天に往生すとも、固より之に依りて直に成佛を得べしと云ふには非ず。唯彌勒の說法を聞くのみ。彌勒下生して龍華樹下に成佛し給ふの時、其の會下に參じて法を聽き、乃至當來諸佛に値遇し、菩提の記を得んことを願ず。是れ兜率上生思想の骨子とする所なり。

次に今現に兜率天上に在す彌勒菩薩が、當來五十六億萬歲の後、我が此の國土なる閻浮提の地に下生し給ふ時の次第に就きては、姚秦鳩摩羅什三藏譯の『彌勒成佛經』（黃五四三）の中に詳記せらる。是れ亦煩を厭はず二三要點を摘記せん。

爾時世尊告舍利弗。（中略）四大海水面各減少三千由旬。時閻浮提地縱廣正等十千由旬。其地平淨如琉璃鏡。（中略）皆由今佛種大善根行慈心報。俱生彼國。智慧威德。五欲衆具。快樂安穩。亦無寒熱風火等病。無九惱苦。壽命具足八萬四千歲。無有中夭。人身悉長一十六丈。月日常受極妙安樂。遊深禪定。以爲樂器。唯有三病。一者飮食。二者便利。三者衰老。女人年五百歲。爾乃行嫁。有一大城名翅頭末。縱廣一千二百由旬。高七由旬。七寶莊嚴。自然化生七寶樓閣。端嚴殊妙。莊校清淨。（中略）其國爾時有轉輪聖王。名曰穰佉。有四種兵。不以威武。治天下。具三十二大人相好。王有千子。勇猛端正。怨敵自伏。王有七寶。（中略）時城中有大婆羅門主。名修梵摩。婆羅門女名梵摩拔提。心性和弱。彌勒託生。以爲父母。雖處胞胎。如遊天宮。放大光明。塵垢不障。身紫金色。具三十二大丈夫相。坐寶蓮華。

衆生視之無有厭足光明晃曜不可勝視諸天世人所未曾覩身力無量一一節力普勝一切大力龍象不可思議毛孔光明照曜無量無有障礙日月星宿水火珠光皆悉不現猶如埃塵身長釋迦牟尼佛八十肘（三十二丈）曾廣二十五肘（十丈）面長十二肘半（五丈）鼻高修直當于面門身相具足端正無比成就相好一一相有八萬四千好以自莊嚴如鑄金像一一好中流出光明照千由旬肉眼清徹青白分明常光繞身面百由旬日月星宿眞珠摩尼七寶行樹皆悉明曜現於佛光其餘衆光不復爲用佛身高顯如黃金山見者自然脫三惡道（中略）彌勒菩薩見此寶臺須臾無常知有爲法皆悉磨滅修無常想讚過去佛清涼甘露無常之偈諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂說此偈已出家學道坐於金剛莊嚴道場龍花菩提樹下枝如寶龍吐百寶華一一華葉作七寶色色色異果適衆生意天上人間爲無有比樹高五十由旬枝葉四布放大光明爾時彌勒與八萬四千婆羅門俱詣道場彌勒卽自剃髮出家學道早起出家卽於是日初夜降四種魔成阿耨多羅三藐三菩提（中略）爾時彌勒佛以大慈心語諸大衆曰汝等今者不以生天樂故亦復不爲今世樂故來至我所但爲涅槃常樂因緣是諸人等皆於佛法中種諸善根釋迦牟尼佛出五濁世種種呵責爲汝說法無奈汝何教殖來緣今得見我我今攝受是諸人等我以讀誦分別決定修多羅毗尼阿毘曇爲他演說讚歎義味不生嫉妬教於他人令得受持修諸功德來生我所或以衣食施人持戒定慧修此功德來生我所或以妓樂幡蓋華香燈明供養於佛修此功德來生我所（中略）或造僧祇四方無礙齋講設會供養飲食修此功德來生我所或以持戒多聞修行禪定無漏智慧以此功德來生我所或有起塔供養舍利念佛法身以此功德來生我所或有厄困貧窮孤獨繫屬於他王法所加臨當刑戮作八難業受大苦惱拔濟彼等令得解脫修此功德來生我所或有恩愛別離朋黨諍訟極大苦惱以方便力令得和合修此功德來生我所說此語已稱讚釋迦牟尼佛善哉善哉能於五濁惡世教化如是等百千萬億諸惡衆生令修善本來生我所（中略）時彌勒佛如是開導安慰無量衆生等（中略）說此語時九十六億人不受諸法漏盡意解得阿羅漢三明六通具八解脫三十六萬天子二十萬天女發阿耨多羅三藐三菩提心天龍八部中有得須陀洹者種辟支佛道因緣者發無上道心者數甚衆多不可稱計爾時彌勒佛與九十六億大比丘衆并穰佉王八萬四千大臣比丘眷屬圍繞如月天子諸星宿從出翅頭末城還花林園重閣講堂時閻浮提城邑聚落小王長者及諸四姓皆悉來集龍花樹下花林園中爾時世尊重說四諦十二因緣九十四億人得阿羅漢地方諸天及八部衆六十四億恆河沙人發阿耨多羅三藐三菩提心住不退轉第三大會九十二億人得阿羅漢三十四億天龍八部發菩提心（中略）爾時彌勒佛與娑婆世界前身剛强衆生

及諸大弟子。俱往耆闍崛山。到山下已。安詳徐步。登狼跡山。到山頂已。舉足大指蹈於山根。是時十八相動。既至山頂。彌勒以手兩向擘山。如轉輪聖王開大城門。爾時梵王持天香油。灌摩訶迦葉頂。油灌頂已。擊大揵椎。吹大法螺。摩訶迦葉卽從滅盡定覺。齊整衣服。偏袒右肩。右膝著地。長跪合掌。持釋迦牟尼佛僧伽梨。授與彌勒。而作是言。大師釋迦牟尼多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀臨涅槃時。以此法衣付囑於我。令奉世尊。時大衆各白佛言。云何今日。此山頂上。有人頭蟲。短小醜陋。著沙門服。而能禮拜恭敬世尊。時彌勒佛訶諸大弟子。莫輕此人。而說偈言(中略)說是偈已。告諸比丘。釋迦牟尼世尊。於五濁惡世。教化衆生。千二百五十弟子中。頭陀第一。身體金色。捨金色婦。出家學道。晝夜精進。如救頭燃。慈愍貧苦下賤衆生。恆福度之。爲法住世。摩訶迦葉者此人是也。說此語已。一切大衆悉爲作禮。爾時彌勒持釋迦牟尼佛僧伽梨。覆右手不遍。纔掩兩指。復覆左手。亦掩兩指。諸人怪歎。先佛卑小。皆由衆生貧濁驕慢之所致耳。告摩訶迦葉曰。汝可現神足。竝說過去佛所有經法。爾時摩訶迦葉踊身虛空。作十八變。(中略)以梵音聲說釋迦牟尼佛十二部經。(中略)辭佛而退。還耆闍崛山本所住處。身上出火入般涅槃。

卽ち此の經に依るに、初に先づ彌勒菩薩が此の閻浮提に下生すべき時の此の地の狀態を說き、次に此の地の翅頭末城に穰佉王の君臨すべきことを說き、次に城中修梵摩婆羅門家に彌勒の託生すべきことを說き、次に其の出家成佛を說き、次に穰佉王竝に諸王子等の出家を說き、次に釋迦佛の化益に漏れたる諸人が、種々の功德を修するに由りて、彌勒佛所に來生するに至れる因緣を說き、次に龍花樹下三會の說法に、初會に九十六億、第二會に九十四億、第三會に九十二億の人を度せしことを記せり。所謂龍華三會とは卽ち此の事なり。最後に摩訶迦葉が、定より起ちて彌勒佛に見え、釋迦佛の僧伽梨衣を獻ぜることを說けり。此の中、今茲に尤も注意すべきものは、所謂釋迦佛の化度に漏れたる諸人が、讀誦、起塔、布施等の諸の功德を修するに由りて、彌勒佛所に來生せる因緣を記せる一段なり。此の文は、前記『觀彌勒上生兜率天經』中に明す所の修善に由り、兜率陀天に生じて彌勒菩薩に侍し、其の下生の時は、俱に閻浮提に下りて、其の說會に參會し、乃至諸佛に値遇して作佛の記を受けんとの說と相待ちて、所謂彌勒崇拜の信仰の根幹を爲すものなり。蓋し起立佛塔の事は『法華經』等に亦盛に之を勸誘す。卽ち同經第六如來神力品(益一四六右)に

汝等於如來滅後。應一心受持讀誦解說書寫如說修行。所在國土。若有受持讀誦解說書寫如說修行。若經卷所住之處。若於園中。若於林中。若於樹下。若於僧坊。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。是中皆應起塔供養。所以者何。當知是處卽是道場。諸佛於此得阿

耨多羅三藐三菩提。諸佛於此轉于法輪。諸佛於此而般涅槃。

と云ひ、同第四法師品〔盈一四〇〕に

藥王。在在處處、若說若讀。若誦若書。若經卷所住處。皆應起七寶塔。極令高廣嚴飾。不須復安舍利。所以者何。此中已有如來全身。此塔應以一切華香瓔珞繒蓋幢幡伎樂歌頌供養恭敬尊重讚歎。若有人得見此塔禮拜供養。當知是等皆近阿耨多羅三藐三菩提。

と云へる即ち其の例なり。道明上人造塔の事蹟を始め、我國中古以後盛に行はれたる如法經等の作善が、凡て此等の經說に基づくものなるは、元より明瞭なる事實なれども、其は特に今の彌勒の信仰と結合して行はれたるものなることは、孰れも其の願文の終りに、俱値千聖、又は慈尊三會を待つ等の文あるに徵して明瞭なり。尤も『法華經』第七普賢菩薩勸發品〔盈一五三〕に

若有人受持讀誦解其義趣。是人命終。爲千佛授手。令不恐怖。不墜惡趣。即往兜率天上彌勒菩薩所。彌勒菩薩有三十二相。大菩薩衆所共圍繞。有百千萬億天女眷屬。而於中生。有如是等功德利益。

の文あり。されば其の彌勒の信仰と結付あるは、元より怪むに足らざれども、而も明に慈氏三會を待つ云々の思想は、前記の『彌勒經』等を主とし佛教本來の彌勒崇拜の思想に本づくものなるは事實なりとせざる可からず。即ち是等は釋尊の化導に漏れたるものなれば、生前種々の德本を植ゑて、當來彌勒佛出現三會の曉を待たざる可からずと云ふにあり。而して此の種の信仰を尤も熱烈に表白し鼓吹し實行せる先德と云はゞ、陳の南嶽慧思禪師なり。即ち慧思禪師は、彼の摩訶迦葉が、鷄足山に入定し、釋尊の僧伽梨を持して、慈氏の出世を待つ事蹟よりも一歩進みて、此の身此の儘にて、今後五十六億萬歲の後に出世すと傳ふる彌勒の出世に遇はんことを誓へるなり。事は禪師自作の『立誓願文』〔陽四七四〕に詳かなるが、今其の文の一節を抄記せば左の如し。

我今入山修習苦行。懺悔破戒障道重罪。今身及先身。是罪悉懺悔。爲護法故。求長壽命。不願生天及餘趣。願諸賢聖佐助吾。得好芝草及神丹。療治衆病除饑渴。常得經行修諸禪。願得深山寂靜處。足神丹藥。修此願。藉外丹力修內丹。欲安衆生先自安。己身有縛能解他縛。無有是處。(中略)我今懺悔障道罪。願爲證明除癡僧。爲求道故早成仙。宣暢廣說釋迦法。不計劫數報佛恩。爲護正法發此願。故造金字般若經。爲護衆生及己身。復造金字法華經。爲大乘故入深山。願速成就大仙人。壽命長遠具神通。供養十方諸世尊。未來賢劫彌勒佛。爲大衆說般若經。以我誓願神通力。金經寶函現其前。從地涌出住空中。大

地震動放光明遍照十方諸世界種種妙音告衆生稱揚讃歎釋迦法三途八難悉解脱。

彌勒會前現此事十方佛前亦復然。

即ち慧思禪師は、金字の『般若經』及び金字の『法華經』を作りて、金函に盛り、自身は大仙人となりて長壽を保ち、彌勒の三會に列し、釋迦の遺法を宣說せんことを誓願せるなり。蓋し現身を以て彌勒に見えんとせるもの、印度に於ては淸辨論師が馱那伽磔迦國の大山中に入定し、日本にては皇圓阿闍梨(傳扶桑略記著者)が蛇身となりて彌勒の下生を待つと稱して、遠江の笠原池に入身せりと云ふが如き、孰れも人口に膾炙せる事蹟なるが、就中尤も我が思想界に影響を及ぼしたるべしと思はるゝものは、南岳大師の事蹟なり。前に引ける文中に、「金經寶函其の前に現じ、地より涌出して空中に住し」云々の文あり。而して右南岳思禪師の『立誓願文』は、夙に平安朝の始に傳敎大師に依りて將來せられたるが、私に考ふるに、如法經其の他の埋經思想は、恐らくは彼の慧思禪師の事蹟を逐ふものならざるか。否假令同禪師の事蹟を逐はざる迄も、全然同一思想なるは事實なりとせざる可からず。彼の金峯山の經筒に銘刻されたる寛弘四年八月の藤原道長の願文の如き、其の尤も適切なる例證にして、其の餘經筒瓦經等の銘に、慈尊の爲め、又は龍華三會の曉を待つ云々の記載あるは、孰れも皆前記の彌勒に對する信仰の表白に外ならざるなり。

之を要するに、賢劫の千聖に値はんとの記載も、彌勒の三會に値はんとの思想も、實は同一思想に歸著するもの、而して彌勒崇拜の信仰の要點は、造塔造佛、其の他種々作善の因緣を以て、彌勒佛乃至當來の一切諸佛に値ひ奉りて、成佛の記を受けんと云ふに在り。兜率天に上生せんことを願ふとも、上天が目的にあらで、彌勒下生の際には、同じく此の閻浮提に下生して、第一に聞法得脫せんとするに在ること前に說明せるが如し。而して我國に於て、造塔造佛を始め、如法經(經筒に法華經を收めて之を埋め、其の上に塔を立つ、是れ蓋し前引法華經法師品の經說に本づきて起れるものか)瓦經等の諸種の作善は、大抵此の信仰の影響を受け居るものにして、現存せる經筒、瓦經、經石等の諸種の考古學上の參考品たる遺物は、概ね此の思想の產物ならざるものは之れ無きなり。即ち彼の道長の願文にも、

納之銅筴埋于金峯其上立金銅燈樓始自今日期龍華晨

とある如く、其の容器は銅、陶等の耐久性のものを選み、尙ほ瓦經等の如く、其の質耐久性のものを選める、皆之を當來彌勒の會まであらしめんとの素意を表するに外ならざるなり。但し茲に此の思想を研究するに就きて、尤も注意すべきは、此等の造

塔又は如法經等を作すに當りての實際に於ける願主の願意と、及び其の願文の見方なり。諸種の願文を檢するに、多くは其の末尾に彌勒三會又は平等利益云々等の文あり。されど之を以て直に各願主の心願なりとなさんは早計なり。願に總願あり別願あり、卽ち願主に於て、別して自己の爲の病氣平癒其の他現世利益、又は六親眷屬の追福等の爲の別願あり。作善は常に此の各個の別願の爲に勤修せらるゝも、其の願文には、總じて此の作善の功德を回向して、當來同じく彌勒三會に値はんことを願ずるが故に、總願として今の如く彌勒三會又は自他平等利益云々等の文を錄することを常とす。例せば今長谷寺銅版の銘文に於ても、「此福無量」の句を受けて、「粤以奉爲天皇陛下敬造千佛多寶佛塔」云々とあるは、正しく現在天皇陛下の奉爲の祈福の爲にせる別願の文にして、此の願文一篇の眼目なり。後の「壹投賢劫俱値千聖」の文は、當來此の修善の功德を回向して、彌勒佛乃至一切諸佛に値遇し奉らむとの總願を述べたるものにして、此は强き願意なき所謂總回向の文なりとす。されば此の種の願文を讀まんものは、特に此の點に留意するを要す。

已上予は非常に不完全ながら長谷寺藏千佛多寶佛塔銅版銘文に對する一往の管見を述べ畢れり。就中第二第三節の如き、猶ほ少しく詳述すべき必要あるもの、特に第三節の如きは、餘りに其の說を省略せる爲に、說述頗不備にして、其の意を得ざるもの多からむを恐る。但し予として今日之れ以上に記述するの餘暇無きを以て、遺憾ながら本稿は之に擱筆することゝせり。

終りに臨んで一言すべきは、彼の道明上人の願文の讀み方なり。予は如何樣に此の文を見るも、此は明に道明上人が、天皇(天武)陛下の奉爲に千佛、多寶佛塔を造顯し奉れる願文にして、其れ以外には何等の事實を發見する能はず。長谷寺本尊十一面觀音菩薩の造立と何等の關係を見出し得ざるは勿論、喜田博士が之を後代道明上人が天武天皇追福の奉爲に造顯せるものなりと解せられしが如きは、予等遂に此の文中に片言隻句も其の文意を發見する能はざる所なりとす。

第五章　靈山淨土變考

『斑鳩古事便覽』に載する法隆寺東院(又上宮王院と稱し或は夢殿とも云ふ)の『流記資財帳』の殘篇中に五副畫像靈山淨土壹鋪(具佛菩薩奉請坐法隆寺法師臨照)の目あり。蓋し右東院の『流記』は、淳仁天皇天平寶字五年辛丑(紀元一二四一)十月一日勘錄する所に係り、而して其の靈山淨土の請坐者たる臨照法師は、當時法隆寺の住侶とし

て『流記』の奥に其の名を署せるを以て、其の製作の年代は略ぼ推察すべきものなり。又『東大寺要錄』第四諸院章上如法院の條に、

靈山淨土二鋪

の名を記せり。此の上如法院安置の靈山淨土に就きては、今其の製作の年代を知察するに由なしと雖も、以上二記の記述に依りて見れば、我奈良時代に於て、靈山淨土の變相が、製作尊信せられたるものなることは明了なり。然らば靈山淨土とは果して如何なるものか、其の變相としての圖樣は奈何と云ふに、此の問題は、茲に本邦上古の佛教藝術史を研究するものにとりては、頗る難解の懸案なるを以て、予は左に聊か卑見の一端を縷陳して、大方諸賢の高教を仰がんとす。但し其の記述の次第に就きては、初に略して飛鳥奈良時代の製作に係る淨土變相を述べ、次に正しく靈山淨土變の圖相に就きての考を記し、後に右靈山淨土變と密家所用の法華曼荼羅との關係に就き一言すべし。

一、飛鳥奈良時代の製作に係る淨土變相　我國上古に於て、諸種の淨土變相が、盛に製作崇信されたるは事實なり。所謂藥師彌陀、彌勒、補陀落及び靈山淨土變是れなり。今是等の諸淨土變に就きて、史乘に顯著なるもの數點を列記すれば、

(一)法隆寺金堂四佛淨土繪　顯眞得業の『聖德太子傳私記』(一名古今目錄抄)卷上に、

此堂內壁ニ有ル四佛淨土繪。鳥ト云繪師畫之。天王寺塔扉畫繪佛師同之。字鳥。(是一乘院之說也)西壁阿彌陀淨土。東壁寶生淨利。北浦戸東脇壁藥師刹土。同戸西脇壁釋迦國土。如ル此繪書。自余壁ニハ菩薩立像繪。

と云ひ、『南都七大寺巡禮記』(法隆寺條)に、

堂內西ニ書ル彌陀淨土。東ニ書ル藥師淨土。南北二方ニ書ル佛菩薩像。

と云へり。蓋し現存せる淨土繪の尤も古きものなるべし。而して此の壁繪の製作年代に就き、若し斑鳩寺(即法隆寺)創建の歲を以てせば、推古天皇第十五年丁卯(紀元一二六七)に當れども、『日本書紀』第二十七の說に依れば、天智天皇第九年庚午(紀元一三三〇)四月火災に罹りて一屋も餘す所なかりしと云ふ。即ち『書紀』の說に從ひて、天智天皇の朝に罹災再建せしものとせば、右壁繪の年代も、其の後の製作となるや勿論なり。されど法隆寺再建非再建の問題は、學界未決の難問にして、茲に說明すべきに非ずと雖も、唯右淨土繪に就きての觀測を一言せば、其は推古朝初期のものと云はんよりは、寧ろ天智天皇朝頃の作物と認む可きなりといふ。尙ほ茲に議すべきは四佛の配當なり。四佛の尊名竝に方位に就きては、古來種々の異說ありて一准ならず。顯眞得業の說

は、法隆寺相傳の說として、固より信憑すべき物ならんと雖も、其の中に寶生佛の名を加ふるは、聊か疑ふべし。是れ新譯の譯名にして、古經に出す所の名に非ざればなり。若し强て配當すべしとせば、『金光明經』第一所說の四佛、卽ち阿閦、寶相、無量壽、微妙聲の四尊とするを穩當とせん。

(二)法隆寺舊藏金塗押出銅像　是れ阿彌陀淨土變の一として數ふべきものにして、今は帝室の御物となれり。其の製作の年代を詳にせずと雖も、恐らくは聖武天皇天平十九年丁亥(紀元一四〇七)二月十一日勘錄に係る『法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳』に

金塗押出銅像參具

と云へる中の隨一なる可く、若し更に前後の記載より之を考ふるに、是れ或は上宮聖德法王の奉爲に癸未の年(推古天皇三十一年)三月王后の敬造し請坐し給へる金塗釋迦像一具と同時又は相去る遠からざる時代に製作せられて、請坐されたるものなる可きか否か、聊か疑を存する所なり。

(三)藥師寺講堂繡阿彌陀淨土變　『藥師寺緣起』に云はく、

講堂一宇、重閣七間四面(中略)

繡佛像一帳、高三丈、廣二丈一尺八寸。阿彌陀佛像幷脇士菩薩天人等、總有百餘體。奉

繡畢

流記帳云、以壬辰年四月十二日奉爲飛鳥淨御原御宇天皇(天武天皇)藤原宮御宇天皇(持統天皇)奉造而請坐者

此の『藥師寺緣起』所引の『流記帳』の文に云へる壬辰の年とは、卽ち持統天皇第六年(紀元一三五二)なり。而して右繡帳に縫付けられたる佛菩薩天人等の諸像百餘體ありと云へるに依るに、其の淨土變の構圖は、後の智光作の淨土變より雄大なるものなりしは勿論なるべし。然るに『南都七大寺巡禮記』の藥師寺の條に依るに、

講堂

七間四面。安三尺釋迦像云云(文安)淨瑠璃世界之曼陀羅一帳。廣二丈一尺八寸。高三丈。每年三月最勝會之時奉懸之云云

件曼陀羅者。文武天皇卽位二年、供養。講師道眼。讀師智淵

とあり。若し此の文に依らば、彼の講堂安置の繡像は、前說の如く彌陀の西方淨土にあらで、藥師の淨土たる淨瑠璃世界の變相にして、且は文武天皇第二年戊戌(紀元一三五八)の造作に係るものとなすべきに似たりと雖も、此の二說の中には、寧ろ前說に順ふべきが如し。或は二者各別かの疑を挿むべきも、而も寸尺の二者全同なるより考ふ

れば、二者が別物として存せりとは想ひ難きなり。

(四)興福寺西圓堂彌勒淨土　『諸寺縁起集』の興福寺に云はく、

一彌勒淨土縁起

竊以。花臺葉座□彼岸以正基。寶殿珠宮立中天□啓字。用□□於苦海。咸濟迷津。道其趣於闍衢。俱登覺路。神力之奥。其大矣乎。伏惟。先聖先考正二位右大臣贈正一位太政大臣。日月降靈。輔堯日而重彩。風雲入氣。翼舜風而添薫。芳。謂山岳齊壽。經乾坤以久存。豈圖龍鶴從驩。蹈煙霞而長往。弟子靈祇有犯。罪釁惟深。洒掃之供。終天乖隔。風樹之痛。覽地無追。故奉爲所天。敬造彌勒變一□□域□妙□而初開。無上尊容。詫良工正寂。以茲妙福奉訓尊靈。伏願。蕩塵心於定水。昇彼三天。凝眞跡於禪林。超斯十地。將能忍而合契。與正覺而同符。長垂瓔珞之莊。御琉璃之殿。傍設□頂。廣被無邊。盡叶芳緣。咸承景福。

養老五年八月三日

是れ蓋し元正天皇の養老五年辛酉(紀元一三八一)八月三日。平城宮御宇奈保山太上皇、竝に中太上皇が、藤原淡海公の奉爲に右大臣從二位長屋王に勅して圓堂院を造立せられし時に作らるゝ所なり。

(五)興福寺東堂藥師淨土　『諸寺縁起集』に云はく、

東堂藥師淨土縁起者。神龜二年丙寅秋七月。今帝陛下奉爲太上天皇寢膳不安所造者也。

是れ卽ち聖武天皇神龜二年丙寅(紀元一三八五)の造作なり。

(六)興福寺五重塔四佛淨土變　『諸寺縁起集』に云はく、

制底縁起者。皇后藤氏。自發弘願所造者也(中略)是年天平二年庚午也。

又云はく、

五重塔一基(高十五丈。第五重已下十丈。伏盤已上五丈。大小垂木端并上高欄用裁金銅飾。層間別在水精小塔四基并銀札漆著屋無垢淨光陀羅尼)

塔本東方藥師淨土變

藥師佛一軀。脇侍菩薩二軀。羅漢像二軀。神王像八軀。薄山火爐一具(在花臺)

南方釋迦淨土變

釋迦佛像一軀。脇侍菩薩二軀。羅漢像六軀。淨飯王形一軀(從者八人)摩耶夫人形一軀(從女七人)

八部神形。神王形二軀。金剛力士形二軀。國王形三人。蝦夷形一人。新羅人形一人。婆羅門人。師子形二頭

西方阿彌陀淨土變

阿彌陀佛像一軀。脇侍菩薩廿二軀(四金色)種種鳥形十翼。花木四根。薄山火爐一具(在花臺)

北方彌勒淨土變

彌勒佛像一軀。菩薩六軀二金色羅漢像四軀。天人形十二人。神王形三軀。薄山火爐一具在花臺

是れ聖武天皇天平二年庚午紀元一三九〇四月の造立なり。

(七)阿彌陀院阿彌陀淨土變『阿彌陀院寶物帳』に云はく

阿彌陀淨土變一鋪

寶殿一基染八角高一丈六尺三寸

蓋頂居金花形一樣。八角居金鳳風形八口。名咋鞄。玉幡裏著大蓮花形一枚。並以金銀畫作飛鳥雲花等形

柱八枝並以金銀畫鳥花等形

基二階上階池磯敷瑠璃地。邊著金銅鍍臂金。幷畫飛菩薩等形。下階在蓮子。著金銅鍍臂金端裏等。高欄上居金花八葉

阿彌陀佛像一軀

觀世音菩薩像一軀

得大勢至菩薩一軀以上二菩薩幷在雜玉寶冠

右三座佛菩薩並壇金色

音聲菩薩十軀幷在雜玉寶冠各持樂器

羅漢像二軀各持香壇

右十二菩薩等壇宍色(中略)

右以天平十三年三月造作畢。安置淨土。並來集用等如件

是れ聖武天皇天平十三年辛巳紀元一四〇三月の造立なり。『阿彌陀院寶物帳』とは、稱德天皇神護景雲元年丁未紀元一四二七八月三十日、別當僧聞崇及び知事大法師平榮の勘錄する所に係る。阿彌陀院とは、未だ所在を詳にせずと雖も、蓋し東大寺の子院にして、即ち『東大寺要錄』第四諸院章に、

阿彌陀院流記在印藏水田六十町

と云へるものならざるか。

(八)元興寺極樂坊阿彌陀淨土變　元興寺智光の淨土變に就きては、智光の寂年も詳かならず、又淨土變の製作年次も明かならざるを以て、畢竟其の製作の年代を推定するに由なしと雖も、智光が行基菩薩と同時の先德なるに徵する時は、行基が天平二十一年己丑紀元一四〇九二月に示寂せるより計へて、智光の淨土變の製作は、恐らく天平年中或は其の稍以前の作と攷へて大なる過誤なかるべきが如し。『扶桑略記』第四には、此の智光の事蹟を以て、孝德天皇白雉四年癸丑紀元一三三の下に系すれども、年

代懸隔聊か疑ふ可きに似たり。

(九)唐招提寺食堂障子藥師淨土繪『招提寺建立緣起』に云はく。

食堂一宇安置障子藥師淨土（今阿彌陀佛像并脇士菩薩像聖像）

右藤原仲麿朝臣家施入造立如件

唐招提寺の食堂は、法力法師の造建と傳へらる。唐招提寺の創建は、淳仁天皇の天平寶字三年己亥（紀元一一九四）八月三日なるより推算する時は、此の藥師淨土繪の製作も亦當時のものなるべきか。

(一〇)敕製阿彌陀淨土畫像『續日本紀』第二十三淳仁天皇天平寶字四年七月の條に云はく、

癸丑。設皇太后七七日齋於東大寺竝京師諸小堂寺。其天下諸國每國奉造阿彌陀淨土畫像。仍計國內僧尼。寫稱讚淨土經。各於國分金光明寺禮拜供養。

是れ卽ち光明皇后の奉爲に、其の七々日に當り、天下の諸國に令して造る所なり。

(一一)興福寺東院繡補陀落山淨土變　同阿彌陀淨土變『扶桑略記拔萃』に云はく、

五年辛丑二月。大師從一位藤原惠美押勝。奉爲光明皇后。興福寺內造一堂宇。安置觀音菩薩。繡補陀落淨土變。而安西邊。繡阿彌陀淨土變。而安東邊。件堂山階寺東院也。

是れ咸神皇帝竝に光明皇后兩御菩提の奉爲に、敕宣を奉じて惠美大臣の造立する所なり。

(一二)法隆寺東院靈山淨土　同補陀落淨土　『斑鳩古事便覽』所載の『東院佛經竝資財帳』に云はく、

五副畫像靈山淨土壹鋪（具佛臺奉請坐法隆寺法師臨照）

二副畫像補陀落山淨土壹鋪（具佛臺奉請坐僧祚連□□□）

東院の『資財帳』は、天平寶字五年十月一日の勘錄に係り、右靈山淨土等が、當時の製作なるべきことは、前に一言せるが如し、補陀落山淨土亦准知すべし。

(一三)當麻阿彌陀淨土變存　是れ天平寶字七年六月二十三日、橫佩大臣の姫法如尼の製作なりと傳へらるゝもの、頗る人口に膾炙する所なり。彌陀淨土變としては、尤も完備に近きものなるも、所謂法如尼の製作云々といふに就きては、多少の疑難あるものとす。

(一四)西大寺金堂補陀落山淨土變　同藥師淨土變『西大寺資財流記帳』に云はく、

補陀落山淨土變一鋪（障子繪。高三尺九寸。廣三尺一寸。在金銀花形釘）

藥師淨土變一鋪（障子。高九尺。廣五尺九寸。紫地錦緣。在金銅花形釘肱金）

西大寺は稱德天皇天平神護元年乙巳紀元一二五の創建なれば、恐らく此の時代の物なるべし。『西大寺資財流記帳』は、光仁天皇寶龜十一年庚申紀元一四四〇十二月廿五日の勘錄なり。

一五東大寺南阿彌陀堂障子彌勒淨土　同盧舍那淨土『東大寺要錄』第四諸院章に

一南阿彌陀堂大仏風障子彌勒淨土一枚

盧舍那淨土三枚（中略）見二永觀二年分付帳一

是れ亦製作年代を詳かにせずと雖も『東大寺要錄』製作當時は既に存在せざりしもの、圓融天皇永觀二年甲申紀元一六四四の『分付帳』に依りて記する所と云ふ。是れ亦恐らく奈良朝の製作なるべし。

已上は座右に現在せる數篇の古書中より、散見のまゝ隨宜摘載せるものなるが、此の中所謂淨土變としては、四佛淨土一具のものを始め、別箇流傳のものとして、阿彌陀淨土變、藥師淨土變、彌勒淨土變、補陀落山淨土變、靈山淨土變、盧舍那淨土變等の別あり。其の材質の相違より云へば、壁繪あり、障子繪あり、繡帳あり、金涅押出銅像あり、或は群像を安置して、一淨土の相を現せしめたるもあり。又其の圖相の廣略に就きて云へば、略は三尊像の簡單なるより、廣は觀經全幅を圖せるあり。其の間、何變相は如何なる圖相なる乎、如何にして造作されたる乎等の問題を提げ來る時は、學術上諸種の複雜なる研究事項は、幾種となく予等の眼前に提供せらるゝなり。予は今長谷寺藏金銅千佛多寶佛像並に勸修寺藏繡釋迦如來轉法輪像を題材として、彼の靈山淨土變なるものに就き、一往の菅見を述べんとするものなるが、次章已下前記諸變相と併せ考へつゝ聊か陳述する所あらん。

二、靈山淨土變の圖相に就きての考

靈山淨土變が、他の阿彌陀、藥師、彌勒、補陀落、盧舍那の諸淨土變と俱に、夙に我が奈良朝或は其の以前より、世に流布せしことは、前節に述ぶる所の如し。然るに靈山淨土變とは、如何なる圖樣をなせる變相なるかは、茲に未だ適當なる遺物を發見せざるが故に、頗る明瞭なること能はざるものあり。予今之に對する一往の考を述ぶるに就き、說明の便宜上、一變相と曼荼羅との語義の相異、二變相の圖相の廣略並に製材の種類、三唐土に於て靈山淨土變の製作せられし例及び其の渡來の事實、四釋迦無勝淨土と靈山淨土との別、五靈山淨土變とは何物か、六大和長谷寺藏千佛多寶佛塔銅版の圖相に就きて、七支那に現存せる遺物の七段に分ちて之を記すべし。

一、變相と曼荼羅との語義の相違　古く淨土變と稱せしを、中古以來之を淨土曼荼羅と呼び、今は曼陀羅と稱するを普通とし、變相の名は殆ど之を用ゆるもの無きに至れり。然れども變相と曼荼羅とは、其の語義固より同じからず。

其の中、變相とは、又變像と稱す。多くは唯〻變の一字のみ用ひて何某變と云へり。我國の古文書に見へたるものは、具に前節に記するが如し。今更に支那の文書に見ゆるものに就き數例を擧げんに、

『高僧法顯傳』(東晉安帝義熙十年甲寅皇紀一七四○法顯)に云はく

佛齒常以三月中出之。未出前十日。王莊校大象。使一辨說人著王衣服。騎象上。擊鼓唱言。菩薩從三阿僧祇劫作行不惜身命。以國城妻子。及挑眼與人。割肉貿鴿。截頭布施。投身餓虎。不恪髓腦。如是種種苦行。爲衆生故成佛。在世四十五年。說法敎化。令不安者安。乃度者度。衆生緣盡。乃般泥洹。泥洹已來一千四百九十七歲。世間眼滅。衆生長悲。却後十日。佛齒當出至無畏山精舍。國內道俗。欲殖福者。各各平治道路。嚴飾巷陌。辨衆華香供養之具。如是唱已。王便夾道兩邊。作菩薩五百身已來種種變現。或作須大拏。或作睒變。或作象王。或作鹿馬。如是形像。皆彩畫莊校。狀若生人。然後佛齒乃出。中道而行。隨路供養。到無畏精舍。佛堂上。道俗雲集。燒香然燈。種種法事。晝夜不息。滿九十日。乃還城內精舍。

此の文は、法顯三藏が、東晉安帝義熙六年(皇紀一七○頃)、印度師子國(今の錫蘭)に於て目睹せし佛齒供養の大會の次第を記錄せしものにして、文中、道路の兩邊に、彩畫の本生變の形像を出して莊飾せる有樣を見る可し。所謂須大拏變、睒變、象王變、鹿王變、馬王變等の諸本生變像は、現存せるザンチー、アジャンター等の古美術中にも之れ有る所なり。

又『高僧傳』第六(梁慧皎梁元帝承聖三年皇紀一二一四寂撰)に云はく、

秦主姚興。欽德風名。歎其才思。致書慇懃信餉連接。贈以龜茲國細縷雜變像。以申款心。

又令姚嵩獻其殊像。

是れ秦主姚興が、嘗て西域に於て獲る所の細縷雜變像等を以て、廬山の慧遠法師に送りしことを記せるものなり。

又『洛陽伽藍記』第五(東魏孝靜帝興和五年癸亥皇紀二〇三一楊衒之撰)に云はく、

惠生遂割行資。妙簡良匠。以銅摹寫雀離浮圖儀一軀。及釋迦四塔變。

是れ北魏孝明帝正光元年庚子皇紀一八〇一惠生、宋雲等、北天竺に到りて佛跡を巡禮し、其の歸途に際して、釋迦四塔變等を摹寫し來りしことを記せるものにして、其の所謂

四塔變とは、蓋し尸毘王、須提羅王、月光王、薩埵王子の四本生變相なり。下の『東征傳』の記事と併せ見る可し。

又『往生西方淨土瑞應删傳』に云はく、

唐朝善導禪師。姓朱。泗州人也。少出家時。見西方變相。嘆曰。何當託質蓮臺。接神淨土。(中略)禪師平生常樂乞食。每自責曰。釋迦尚分衞。善導何人。端居索供養。乃至沙彌竝不受禮。寫彌陀經十萬卷。畫淨土變相三百鋪。所見塔廟無不修葺。佛法東行未有禪師之盛矣。

善導大師が、觀經に依りて淨土の變相を作りたることは、頗る有名なる事蹟なり。大師は唐高宗龍朔二年壬戌(皇紀一二二一)(一說に同永隆二年辛巳(皇紀一二三四)三月と云ふ)に示寂せらる。是れ初唐の作にして、我が孝德、齊明、天智天皇朝頃の史實なり。

又『佛祖統紀』第四十(南宋度宗咸淳五年(皇紀一八二八)八月志磐撰)法運通塞志唐玄宗開元二十四年(皇紀一三九六)の條に云はく、

吳道玄。字道子。妙窮丹青。大略張僧繇。上召入供奉。於景公寺畫地獄變。都人咸觀。皆懼罪修善。兩市屠沽不售。

又『唐大和上東征傳』光仁天皇寶龜十年己未(紀元一四三九一)眞人元開撰)に云はく、

天寶二載十二月舉帆東下(中略)申請明州大守處分。安置鄮縣山阿育王寺。寺有阿育王塔。(中略)其育王塔者。是佛滅度後一百年時。有鐵輪王。名阿育王。役使鬼神。建八萬四千塔之一也。其塔非金非玉。非石非土。非銅非鐵。紫烏色。刻鏤非常。一面薩埵王子變。一面捨眼變。一面出腦變。一面救鴿變。上無露盤。中有懸鐘。埋沒地中。

是れ卽ち唐玄宗皇帝天寶二年癸未(皇紀一三四〇)臘月。鑑眞大和上日本に渡らんと欲し、再び惡風に遇ふて果さず、明州界に漂著して阿育王寺に詣れるの時の記事なり。塔四面の薩埵王子變等は、惠生の所謂四塔變に當るものならむ。

又同書次下の文に、天寶十二年癸酉(皇紀一三一四)十月、第六度の渡海を企つる事を述べ、當時の將來物を列記せる下に

所將如來肉舍利三千粒。功德繡普集變一鋪。阿彌陀如來像一鋪。彫白栴檀千手像一軀。繡千手像一鋪。救世觀世音像一鋪。藥師。彌陀。彌勒菩薩瑞像各一軀。同障子。

の目あり。

又『圓宗文類』第二十三(高麗義天(宣宗六一七六)撰)に唐清涼國師澄觀(文宗開成三年戊午(皇紀一八五四)三月寂)の撰せる『華嚴刹海變相讚』を載す。其の文は

執象或亡象　取空空外求　斯人鼓識浪　浩勃只冥搜　卽象見無象

萬象歸毛頭　　圓機覩一乘

とあるのみにして、其の圖相の如何なるものなるかを推察するに由なしと雖も、既に題名に『華嚴刹海變相』といふ、是れ恐らくは華藏世界の變相なるべきか。

又宋哲宗紹聖三年丙子（皇紀一五六七）蘇子由の作に係る忠禪師撰『五相知識頌』（內題に華嚴入法界品善財變相經とあり）の跋に云はく、

予問。李伯時畫此變相。而未見也。伯時好學。善楷書小篆。畫爲今世道子。忠師未識伯時。而此畫已自得其髣髴。當往從之游。以成此絕技耳。

と。『五相知識頌』は、其の圖の傳否未だ詳かならざるも、維白の『文殊指南圖讃』、並に楊傑の『大方廣佛華嚴經入法界品讃』に依りて圖せる東大寺所藏の善財童子繪卷と同種のものにして、卽ち善財童子五十三參の次第を圖繪せるものなり。

已上列記する所に就きて之を見るに、所謂變相と稱するものは、單に淨土の圖繪のみに限らず、本生佛傳繪、地獄繪、世界圖、乃至弘く善財童子繪卷の類にも及び、其の語の意義極めて寬し。夫の『高僧傳』に細縷雜變像と云ひ、『東征傳』に功德繡普集變と云へるものも、亦何等かの繪像なりしなる可きが如し。（私に案ずるに、普集變の語の普集の二字は、若し强て配すれば、『陀羅尼集經』所說の普集會壇の曼荼羅に擬し度も、未だ深く之を考へず。）要するに變、變相、變像等の文字の用例、之を以て略索す可きなり。

然るに曼荼羅の語に至りては、今と稍其の意を異にす。卽ち曼荼羅 maṇḍala は梵語、舊譯に壇と翻じ、新譯に輪圓具足と云ふ。其の壇とは、唯坦然として平なるの義。蓋し印度の俗、天尊等を祭るに、土を封じて平ならしめ壇となすを云へり。輪圓具足とは、此の語の中、更に三密四智印等の無量の名義を具し、諸の義理成就して、闕くることなきを、車の輪轂輻輞具足して而かる後唯一輪を成ずるに喩ふ。是れ實に主として密教に於て使用せらるゝ術語なり。而して其の曼荼羅と稱せらるゝものに四種あり、所謂大、三、法、羯の四種曼荼羅是れなり。『秘藏記』に曰はく、

四種曼荼羅。一大曼荼羅。（五大也。謂繪像形體等。高廣之義。）二三昧耶曼荼羅。（尊等所執持器杖印契。平等義。）三法曼荼羅。（種子也。卽是謂法身軌持之義。）四羯磨曼荼羅。（威儀也。謂木像及塑等。作業之義。）

卽ち諸尊具足せる五彩の圖像を大曼荼羅と云ひ、諸尊所持の刀劍蓮華等の三昧耶形を示せるものを三昧耶曼荼羅と云ひ、三十七尊等の種子を書せるものを法曼荼羅と云ひ、模鑄刻等の像を羯磨曼荼羅と云ふ。之を前の變又は變相、變像等の語に對照するに、語義に於ても、圖相に於ても、二者全く相同じからざるなり。

されば淨土繪、地獄繪等の類は、須らく之を變相と稱すべく、又密家所傳の諸曼荼羅

に限りて、之を曼荼羅と稱するを穩當とするものなり。然るに我國中古以來、曼荼羅の語を濫用して、之を淨土變相等にも適用し、當麻曼荼羅、淨瑠璃世界曼荼羅、天壽國曼荼羅等の稱呼を用ゆるものあるに至れりと雖も、是れ固より正名に非ず。且つ奈良朝以前にありては、何々曼荼羅の語を用ひたる例、全く之れ無ければ、予は奈良朝以前の製作に係る諸淨土變並に之と一類の後世の作物は、總じて之を何々變相の正名を用ひ、密家の諸圖と甄別するを至當とするものなり。

二、變相の圖相の廣略並に製材の種類　變相と曼荼羅とは、既に其の語義に於て、已上の如き相違あるのみに非ず。圖相に於ても、亦頗る相類せざるものあるなり。之を一言にして云へば、或種の經典所載の說話の記事を、有の儘に繪又は彫刻として模造し顯はしたるものは變相なり。密軌記載の敍述に本づき、一定の本尊並に眷屬諸尊を、或る指定の方位に配列して圖寫し顯はしたるものは曼荼羅なり。されば變相に於ては、其の畫繪中に寶殿樓閣あり、山川草木あり、日月乃至鳥獸等あり。且つ畫題の品類と、筆者の意樂に依りて、必ずしも其の繪樣を同じくせずと雖も、密家所傳の曼荼羅に至りては、一々の曼荼羅に、皆悉く儀軌口傳の存するあり。尊形、座位等、總て咸阿闍梨の指受を蒙らざる可からざるものゝみにして、從て其の圖像の如き、孰れも或一定の諸尊が、一定の形像を以て、一定の方位に於て、月輪中に住し給ふを例とし、普通の變相中に見る如き、寶殿、樓閣、乃至鳥獸等の諸種の背景は、全然闕如する所なり。但し一二の除外例はあり、寶樓閣曼荼羅の類の如し。而も之を以て變相に同ず可からざるは、是れ等も固と純然たる密家相承の圖像たるに由ればなり。

而して變相の圖相に廣略麁密の差あり、製材の種類に絹紙泥木の異ある可きは、殊更茲に說述の要なきものならむと雖も、今日普通學者間に在りては、變相と云へば、單に淨土變を連想し、而も其は大抵畫像なりと思惟されつゝあるなり。然れども、變相と呼ばるゝものゝ中には、本生變、地獄變等の諸種の繪像を含み、其の製材も、繪畫あり彫刻ありて、多種多樣なり。就中其の圖像の廣く且つ密なるものと云はゞ、彼の禪林寺所傳の極樂淨土變（通稱當麻曼荼羅）の如き、卽ち其の例なり。實に『觀無量壽經』の全幅を圖し顯はして遺憾なきなり。然るに略にして且つ麁なるものにありては、僅に本尊並に脇士の三尊を圖し顯はせるも、是れ亦淨土變と稱すことを得。慈恩大師の『西方要決釋疑通規』にも、

二敬〻有緣像敎。謂造西方彌陀像變。不能廣作。但作一佛二菩薩亦得。

と云へり。蓋し法隆寺金堂壁繪の淨土、並に御物金塗押出銅像の阿彌陀三尊の如き

も、所謂阿彌陀淨土變と稱するを得べきものなること、例して知る可し。

次に變相の造顯さるゝ材體に就きて一言せんに、凡そ淨土等を顯示するに、必ずしも繪畫なるを要せず。彫塑の諸像を配列するも、亦同じく其の淨土等の相を表し得可く、是れ亦變相と稱するなり。前章に引載せる『諸寺緣起集』中の『興福寺緣起』の條に記する興福寺五重塔々本の四佛淨土變、『阿彌陀院寶物帳』に見ゆる阿彌陀院の阿彌陀淨土變の如き、卽ち其の例なり。彼の『法隆寺伽藍緣起竝流記資財帳』に

合塔本肆面具攝一具。涅槃像。土一具。維摩詰像。土一具。彌勒佛像。土一具。分舍利像。土

右和銅四年歳次辛亥寺造者

と云へる同寺五重塔々本四面の諸像の如き、是れ亦或は變相と稱するを得べきものならむ。若し是より推案するに、普通顯敎の寺院に於て、各寺の金堂に本尊を安置し、俠侍の菩薩を居へ、幡、蓋、其の他の莊嚴を施すは、是れ亦其の各佛刹土の有樣を造顯するものとして、或は今と同じく淨土の變相と稱するを得べきものなるべしと雖も、此は別問題として他日の研究を期せん。孰にしても彫塑の諸像を配列莊嚴せるものも、同しく變相と稱するとあるを忘る可からず。又畫圖として造顯せらるゝものにも、紙あり絹あり、繡あり織絨あり、其の製作の樣式の如きも、壁繪あり、障子あり、繡帳あり、或は金涅押出銅像等の別あること、前に援く所の諸引文に明かなり。

三、唐土に於て靈山淨土變の製作せられし例及び其の渡來の事實　我が國に於て靈山淨土變の作られし史實は、上に出すが如し。支那に於ても其の製作ありしこと勿論なる可しと雖も、而も文獻の徵す可きもの甚だ尠し。唯醍醐天皇延喜二年壬戌（紀元一五六二）三善清行の選せる『智證大師傳』に依るに、

九年。唐溫州內道場供奉德圓座主。付恣州人詹景全向國之便。贈。則天皇后縫繡四百幅之內極樂淨土變一鋪（長二丈四尺廣一丈五尺）織繪靈山淨土變一鋪（長一丈五尺廣一丈）付法藏上自釋迦迦葉下至唐慧能之影像二幀子（廣各四丈）

とあり。是れ清和天皇貞觀九年丁亥（紀元一八六七）（唐懿宗咸通八年）德圓座主より周則天武后（皇紀一三四四天武天皇第十二年　一三六四文武天皇慶雲元年　在位）勅製の極樂淨土變其の他を贈與せしことを記せしもの、夫の靈山淨土變の如きも、我が國に先ちて必ず彼の地に行はれしに相違なければ、是れ亦恐らくは則天皇后當時頃より既に造顯流行せしものなるべく、卽ち今織繪靈山淨土變一鋪の傳來を傳ふるは、是れ彼土に右靈山淨土變流布の事實を語るものとなすべきなり。但し右德圓座主が、智證大師に贈付せし靈山淨土變の爾後の傳承竝に圖相の如何等を知る能はざるは、予等の遺憾に堪え

ざる所なり。

四釋迦無勝淨土と靈山淨土との別　五大院安然の『敎時義』に依るに、釋迦に淨土あり。極樂の如し。彌陀に穢土あり、娑婆の如しと說けり。其の釋迦に淨土ありとの說は『大般涅槃經』第二十四（光明遍照高貴德王菩薩品第十之四）〔盈六左八〕に、

善男子。西方去此娑婆世界。度三十二恆河沙等諸佛國土。彼有世界。名曰無勝。彼土何故名曰無勝。其土所有嚴麗之事。皆悉平等無有差別。猶如西方安樂世界。亦如東方滿月世界。我於彼土出現於世。爲化衆生故。於此界閻浮提中現轉法輪。非但我身獨於此中現轉法輪。一切諸佛。亦於此中而轉法輪。

と云へる是れなり。卽ち此の文に依るに、是より西方三十二恆河沙諸佛國土を過ぎて無勝世界と名づくる釋迦の淨土ありとするものなり。

然るに『法華經』第五（如來壽量品）〔盈一三九左〕に依るに、釋迦如來は、成佛已來既に無量無邊百千萬億那由他劫、常に此の娑婆世界に在して說法敎化し給ふ。或は滅度を現ずと雖も、實は滅度せず、常に靈鷲山に在すと說けり。其の文に曰はく、

自我得佛來　所經諸劫數　無量百千萬　億載阿僧祇　常說法敎化
無數億衆生　令入於佛道　爾來無量劫　爲度衆生故　方便現涅槃
而實不滅度　常住此說法　我常住於此　以諸神通力　令顚倒衆生
雖近而不見　衆見我滅度　廣供養舍利　咸皆懷戀慕　而生渴仰心
衆生旣信伏　質直意柔軟　一心欲見佛　不自惜身命　時我及衆僧
俱出靈鷲山。　我時語衆生　常在此不滅　以方便力故　現有滅不滅
餘國有衆生　恭敬信樂者　我復於彼中　爲說無上法　汝等不聞此
但謂我滅度　我見諸衆生　沒在於苦惱　故不爲現身　令其生渴仰
因其心戀慕　乃出爲說法　乃餘諸住處　衆生見劫盡　於阿僧祇劫
乃餘諸住處　衆生見劫盡　大火所燒時　我此土安穩　常在靈鷲山
園林諸堂閣　種種寶莊嚴　寶樹多花菓　衆生所遊樂　天人常充滿
常作衆伎樂　雨曼陀羅花　散佛及大衆　我淨土不毀　諸天擊天鼓
憂怖諸苦惱　如是悉充滿　是諸罪衆生　以惡業因緣　而衆見燒盡
不聞三寶名　諸有修功德　柔和質直者　則皆見我身　過阿僧祇劫
或時爲此衆　說佛壽無量　久乃見佛者　爲說佛難値　在此而說法
慧光照無量　壽命無數劫　久修業所得　汝等有智者　我智力如是
卽ち若し此の文に依らば、靈鷲山卽ち久遠實成の釋迦牟尼世尊の淨刹となすもの

なり。又『維摩經』卷上〔黄七左三五〕に依るに、螺髻梵王が、我が釋迦牟尼佛の土を見るに、清淨なること、譬へば自在天宮の如しと云へることを記せり。是れ亦此の娑婆世界を一の淨刹と見るの説と爲すべきか。案ずるに今『涅槃經』の説と『法華經』の説とは一同すべからず。前説に從へば西方無勝世界、後説に依らば印度靈鷲山を以て、釋迦の淨土と爲す次第なるが、然らば古來釋迦淨土變又は靈山淨土變として造顯されたる變相は、果して何れの釋迦淨土の相を顯はしたるか。是れ卽ち今論文の主眼とする研究問題なり。

五靈山淨土變とは何物か　既に、釋迦の淨土に無勝淨土と靈山淨土との二説あり。而して其の製作せられし古變相に、靈山淨土變と、單に釋迦淨土變と稱するものとの兩樣の別あり。若し單に名稱のみに就きて判ずる時は、釋迦淨土變を無勝淨土に配せば可なるが如く感ぜらるゝも、今興福寺五重塔々本の釋迦淨土變に就きて之を考ふるに、釋迦三尊の外には、羅漢像六軀、淨飯王形一軀（從者八人）摩耶夫人形一軀（從女七人）八部神形、神王形、金剛力士形一軀、國王形三人、蝦夷人一人、新羅人形一人、婆羅門人、師子形二頭等を列す。是れ無勝淨土變に非ざるは勿論、靈山淨土變とも稱す可からざるものとす。勸修寺の所藏に係る繡帳釋迦如來轉法輪像の如きも、或は一種の釋迦淨土變として取扱ふ可きものなるやも知れずと雖も、是れ亦孰れにしても無勝淨土の相とは考ふ可からざるが如し。斯くして予等は所謂釋迦淨土變なるものゝ、釋迦淨土の取扱に就きて、其の措置に窮するものなり

又更に研究上其の推案に苦しむものは、所謂靈山淨土變の圖相なり。靈山淨土變の製作及び傳來等の史實に就きては、前記の如く確實なる記載ありと雖も、其の變相遺物竝に文献の徵すべきもの無きが故に、茲に如是の圖相なりと説明を附することは能はざるを悲むものなり。從て靈山淨土變とは何物かと云ふ問に對しては、法華所説の靈山淨土の相を圖せるものなる可しとまでは説明し得べきも、其以上は、單に闇中模索を加ふるに過ぎざるのみ。若し夫れ今の壽量品の文に「天人常充滿。園林諸堂閣。種種寶莊嚴。寶樹多花菓。衆生所遊樂。諸天擊天鼓。常作衆伎樂。雨曼陀羅花。散佛及大衆」とあるに依りて畫くとせば、夫の勸修寺の繡釋迦如來轉法輪像等の如きは、正しく是れ靈山淨土の變相となすべき所のものなり。而して予等が茲に又特に靈山淨土變の一相として説明を加えんことを欲するものは、國寶大和長谷寺所藏の千佛多寶佛塔銅版の圖相是れなり。左に少しく卑見の一端を陳述すべし。

六、大和長谷寺藏千佛多寶佛塔銅版の圖相に就きて　長谷寺藏千佛多寶佛塔銅版

の圖相を以て、靈山淨土變の相なりと解するは、全く予一個の私案なり。此の私案は果して適中せるものなりや否やを知らず。或は壽量品に明す所の靈山淨土の說相とは相同じからざるを以て、他に適當の名詞を選ぶべきものなるやも知らずと雖も、予は此の圖相を以て、靈山淨土變の一相として說明せんことを欲するものなり。蓋し此の長谷寺千佛多寶佛塔銅版の圖相は、『法華經』第四見寶塔品〔盈一右三〕の說明を顯はせるものにして、卽ち靈鷲山上、法華開會に際して、多寶佛塔出現の時釋迦牟尼佛三たび國土を變じて之を淨し、普く分身佛を來集し、其の七寶塔を開き、彼の多寶佛と半座を分ちて塔中の師子座上に坐し給ふ儀相を圖とし顯はせるものなり。見寶塔品の文に曰はく、

爾時佛前有七寶塔、高五百由旬、縱廣二百五十由旬、從地踊出、住在空中、種種寶物、而莊校之、五千欄楯、龕室千萬、無數幢幡、以爲嚴飾、垂寶瓔珞、寶鈴萬億、而懸其上、四面皆出多摩羅跋栴檀之香、充遍世界、其諸幡蓋、以金銀琉璃硨磲瑪瑙眞珠玫瑰七寶合成、高至四天王宮、(中略)爾時佛告大樂說菩薩、此寶塔中有如來全身、乃往過去東方無量千萬億阿僧祇世界、國名寶淨、彼中有佛、號曰多寶、其佛行菩薩道時、作大誓願、若我成佛、滅度之後、於十方國土、有說法華經處、我之塔廟、爲聽是經故、踊現其前、爲作證明、讚言善哉、彼佛成道已、臨滅度時、於天人大衆中、告諸比丘、我滅度後、欲供養我全身者、應起一大塔、其佛以神通願力、十方世界在在處處、若有說法華經者、彼之寶塔、皆踊出其前、全身在於塔中、讚言善哉善哉、大樂說、今多寶如來塔、聞說法華經故、從地踊出、讚言善哉善哉、是時大樂說菩薩、以如來神力故、白佛言、世尊、我等願欲見此佛身、佛告大樂說菩薩訶薩、是多寶佛有深重願、若我寶塔、爲聽法華經故、出於諸佛前時、其有欲以我身示四衆者、彼佛分身諸佛、在於十方世界、說法盡還集一處、然後我身乃出現耳、大樂說、我分身諸佛、在於十方世界、說法者、今應當集、大樂說白佛言、世尊、我等亦願欲見世尊分身諸佛禮拜供養、爾時佛放白毫一光、卽見東方五百萬億那由他恒河沙等國土諸佛、彼諸國土、皆以頗梨爲地、寶樹寶衣以爲莊嚴、無數千萬億菩薩充滿其中、遍張寶幔寶網羅上、彼國諸佛、以大妙音而說諸法、及見無量千萬億菩薩、遍滿諸國、爲衆說法、南西北四維上下、白毫相光所照之處、亦復如是、爾時、十方諸佛各告衆菩薩言、善男子、我今應往娑婆世界釋迦牟尼佛所、幷供養多寶如來寶塔、時娑婆世界卽變淸淨、琉璃爲地、寶樹莊嚴、黃金爲繩、以界八道、無諸聚落、村營城邑、大海江河、山川林藪、燒大寶香、曼荼羅華、遍布其地、以寶網幔、羅覆其上、懸諸寶鈴、唯留此會衆、移諸天人、置於他土、(中略)而於釋迦牟尼佛一方所分之身、猶故未盡、時釋迦牟尼佛、欲容受所分身諸佛故、八

方各更變二百萬億那由他國。皆令清淨。無有地獄餓鬼畜生及阿修羅。又移諸天人置於他土。(中略)釋迦牟尼佛。爲諸佛當來坐故。復於八方各更變二百萬億那由他國。皆令清淨。無有地獄餓鬼畜生及阿修羅。又移諸天人置於他土。(中略)爾時釋迦牟尼佛。見所分身佛悉已來集。各各坐於師子之座。皆聞諸佛與欲同開寶塔。卽從座起。住虛空中。一切四衆。起立合掌。一心觀佛。於是釋迦牟尼佛。以右指開七寶塔戸。出大音聲。如却關鑰開大城門。卽時一切衆會。皆見多寶如來。於寶塔中坐師子座。全身不散。如入禪定。又聞其言。善哉善哉釋迦牟尼佛。快說是法華經。我爲聽此經故。而來至此。爾時。四衆等見過去無量千萬億劫滅度佛。說如是言。數未曾有。以天寶華聚散多寶佛及釋迦牟尼佛上。爾時。多寶佛於寶塔中分半座。與釋迦牟尼佛。而作是言。釋迦牟尼佛。可就此座。卽時釋迦牟尼佛。入其塔中。坐其半座。結加趺坐。爾時。大衆見二如來在七寶塔中師子座上結加趺坐。各作是念。佛座高遠。唯願如來以神通力令我等輩俱處虛空。卽時釋迦牟尼佛。以神通力接諸大衆。皆在虛空。以大音聲普告四衆。誰能於此娑婆國土廣說妙法華經。今正是時。

已上頗を厭はず見寶塔品の文を抄記せるが、彼の長谷寺金銅版の圖相は、正しく此の見寶塔品の說相を造顯せるものにして、塔の周遍に取り付けられたる小佛像は、卽ち釋迦牟尼佛の分身の諸佛なり。或は其の圖下に刻されたる銘文中に、千佛多寶佛塔の語あるよりして、之を千佛の像なりと解せんとするものあれど、是れ甚だ非なり。千佛と多寶佛塔とが、千佛多寶佛塔といふ一連の熟語に非ざるは云ふまでも無きことにして、千佛は卽ち賢劫千佛を云へるものなる可ければ、此の千佛と今見寶塔品所說の釋迦十方分身諸佛とは、元より一同して說明すべきものに非ざるなり。換言すれば、上段の圖相は、正しく『法華經』見寶塔品に依りて、多寶佛塔出現、三變土田分身來集、佛塔開扉二佛竝坐の相を顯はせるものなり。然るに下段の銘文に「敬造千佛多寶佛塔」とあるは、是れ別に千佛及び多寶佛塔を造顯せし事蹟を記せるものにして、上段の圖相とは相一致せざる文なればなり。予此の圖を稱して靈山淨土變と云ふ。蓋し此の靈山說會の時、佛の神力に依りて、所謂三たび土を變じて之を淨し、以て此の娑婆界等亦國土淸淨なりきと說くが故なり。若し夫れ別に壽量品に本づきて、特に靈山淨土變を造顯するものありとせば、予の考は聊か穩當を缺くの譏なきに非ずと雖も、兎も角も予は此の長谷寺藏金銅版の圖を以て、靈山淨土變の一相（法華開會）として說明し置かんとするものなり。

七、支那に現存する遺物　予は嘗て長谷寺藏千佛多寶佛塔銅版の圖相に就き、其の

製作者が唐僧なるより、此の圖が純日本人の考案に本づく作物にはあらで、或は唐以前に彼の地に流布せし圖相ありしを模倣せしものならざるや否や、多少疑を存す可き餘地ある旨を說き置けり。然るに今回初唐以前の作物にして今圖と同式の三重多寶佛塔、竝に分身來集二佛竝座の儀相を顯はせる圖相の存在を知り、予が前考の必ずしも誤れる推案に非ざりしことを確むることを得たり。

三、靈山淨土變と密家所用の法華曼荼羅との關係　上來餘談多く頗る曖昧ながら靈山淨土變に就きての一往の考を敍し了れり。因て參考として密家所用の法華曼荼羅との關係に就きて一言せんとす。但し玆には單に其の圖相に對する一往の卑見を述ぶるに止む可し。

一、法華曼荼羅の圖相　法華曼荼羅とは、密家に於て法華法を修行する時に用ゆる曼荼羅なり。其の圖は『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』〔閏七ノ六〕に由りて造顯せらる。卽ち其の曼荼羅に三重あり。當中の內院には八葉蓮華を畫き、其の花臺上に寧觀波塔を置き、寧觀波塔中には釋迦牟尼如來、多寶如來の座を同じて坐し玉へるを畫き、塔門は西に開く。蓮華八葉上に於て、東北隅を首とし、右旋して彌勒、文殊師利、藥王、妙音、常精進、無盡意、觀世音、普賢の八大菩薩を安置す。又此の中院の東北隅に摩訶迦葉、東南に須菩提、西南に舍利弗、北に大目揵連あり。次に第二院に於て、其の東門に金剛鏁菩薩、南門に金剛鈴菩薩、塔の前門に金剛鉤菩薩、北門に金剛索菩薩を置く。又東門の北に得大勢菩薩、其の門南に寶手菩薩を置き、南門の東に寶幢菩薩、其の門西に星宿王菩薩を置き、西門の南に寶月菩薩、其の門北に滿月菩薩を置き、北門の西に勇施菩薩、其の門東に一切義成就菩薩を置く。又東北隅角に供養華菩薩、東南隅に供養燈菩薩、西南隅に供養塗香菩薩、西北隅に供養燒香菩薩を安置す。次に第三重院の東門に持國天王、南門に毘樓勒叉天王、西門に毘樓博叉天王、北門に毘沙門天王を置き、東方門の北に大梵天王、其の南に天帝釋、南方門の東に大自在天、門西に難陀龍王、西方門の南に妙法緊那羅王、門北に樂音乾闥婆王、北方門の西に羅睺阿修羅王、門東に如意迦樓羅王を置き、又東北方に聖烏芻沙摩金剛、東南方に聖軍吒利金剛、西南方に聖不動金剛、西北方に聖降三世金剛を安置して之を建立せるものなり。

二、靈山淨土變と法華曼荼羅との其の圖相上の關係　私に案ずるに、法華法は羅什時代に行はれし法華三昧觀法等が、大に發達して一の密法として勤修せらるゝに至りしものなるべく、其の道場觀に於て、前記見寶塔品の法華開會寶塔出現二佛竝坐の相を觀ずると俱に、曼荼羅の中台にも多寶佛塔を安置せり。之を長谷寺所傳の

變相等に比較するに、法華曼荼羅は、前記の變相を一種の密教曼荼羅の鑄型に當てはめたるものと稱するを得べきも、圖相の上に於ては、兩者の間に系統的發達關係ありとは認むること能はざるが如し。尙ほ法華曼荼羅に就き記述を要すること之れ有るも、今の所說に非ざるを以て、更に他日の研究に讓ることゝなし、今は之を省略せり。

第八篇　東大寺の研究

第一章　東大寺大佛蓮瓣の刻畫に見ゆる佛教の世界說

東大寺の盧舍那佛は、華嚴の教主なりや、梵網の教主なりや、華嚴の教主と梵網の教主とは同か異か、或は華嚴の教主にして梵網の教主を兼ぬるか、又眞言の教主毘盧遮那佛との關係は如何と云ふが如き論題を提出する時は、種々なる難しき研究事項の討議せられざる可からざる次第なるも、今は單に右盧舍那大佛の坐し給へる千葉蓮臺の華瓣の裏に刻出されたる一圖相を說明するにあるを以て、卽ち右蓮瓣の上に刻鏤されたる圖相のみに就きて、一往の管見を述ぶべし。蓋し此の大佛蓮瓣の刻畫は、『東大寺要錄』第一（本願第一章）に

十世界海盧舍那佛。跏趺臺上。而青蓮開ㇾ瞼。千百億國釋迦文佛。端坐葉中。而丹菓點ㇾ脣。

と云へる文の中の「千百億國釋迦文佛端坐葉中而丹菓點脣」の言に當る。卽ち臺上の佛は、本身の盧舍那佛なり。葉中の佛は、千と百億との化身の釋迦文佛なり。之を經典

の本說に徵するに、『梵網菩薩戒經』「列一坐」に云はく、

我今盧舍那　方坐蓮華臺　周匝千華上　復現千釋迦　一華百億國
一國一釋迦　各坐菩提樹　一時成佛道　如是千百億　盧舍那本身
千百億釋迦　各接微塵衆　俱來至我所　聽我誦佛戒　甘露門則開
是時千百億　還至本道場　各坐菩提樹　誦我本師戒　十重四十八
戒如明日月　亦如瓔珞珠　微塵菩薩衆　由是成正覺　是盧舍那誦
我亦如是誦　汝新學菩薩　頂戴受持戒。

今蓮瓣の圖を檢するに、中央には、釋迦文佛が諸菩薩に對して說法し給ふ相を顯はし、其の下方に、所謂百億國土の相として、須彌並に欲色諸天の相を出せり。卽ち圖中の釋迦佛は、經文に所謂「周匝千華上。復現千釋迦」とある一千の釋迦の隨一なり。而して下方に刻出されたる圖相の中、其の最下方に須彌界を竝列隣接して畫きたるは、此の如き世界が多數に存在することを表し、其の須彌の上方に、界線を以て二十五段とし、其の中二十二の各界に宮殿を圖せるは、是れ十八梵天、及び六欲天(此の內忉利、四天王天の二天を除く)等なり。且つ隨所に佛の形像(但し頭部丈)を圖せり。是れ經文に所謂「一華百億圖。一國一釋迦。各坐菩提樹。一時成佛道」とある百億國百億釋迦の相を圖せるものなり。斯く圖と經典の本說と對照して併せ考ふるに、予等は次下の二種の考案を得。第一、東大寺の大佛は、或は恐らくは華嚴の敎主たる盧舍那佛にはあらで、寧ろ梵網の敎主たる盧舍那佛なるに似たり。第二、大佛蓮瓣の刻畫は、『華嚴經』『華藏世界品所說の華藏世界にはあらで『梵網經』所說の三千大千世界百億須彌の圖なり。而して此の二項の考定は、我が國の佛敎史上のみならず、一般國史上にも頗る重要なる意義を有するなり。

蓋し東大寺は六宗の總本寺と云ひ乍ら、主としては華嚴宗なり。されば其の本尊たる盧舍那佛が、華嚴の敎主と考へらるゝは當然の事なり。且つ梵網の盧舍那と云ひ、華嚴の盧舍那と云ひ、其の名全く相同じく、思想も大同小異なれば、兩敎の敎主として尊崇せられしものなるやも知れずと雖も、而も今私に右大佛の尊像を考ふるに、正しくは今の如く梵網の敎主たること一點も疑ふ可からず。加之天平五年癸酉四月、興福寺の榮睿、普照の二僧、勅を奉じて傳戒師を請ぜんが爲に入唐せり。是れ良辨が羂索院創建の年なり。尋で天平勝寶六年、鑑眞大和上の此土に渡來するや、其の年四月五日、勅して大佛前に授戒の事を行はしめ給へり。『東大寺要錄』第一に云はく、

天平勝寶六年甲午二月四日。和上初至日本。聖朝勅安置東大寺。卽令行壇法。四月五